

互先石立



249-188



1200901424968

Kodak Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19



© Kodak, 2007 TM: Kodak

Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black



六段雁金準一
三段小林鍵太郎
共編

互先石立

東京博文館蔵版

圍碁 第十一編 互先石立
講義

緒言

六段 雁金準一
三段 小林鍵太郎
共編



本編は互先定石に引き續きて實戦に入らんとするに當り、必要缺くべからざるところの石立即ち全局面としての布勢を詳述せるものなれば、前定石と合はせて之を修得する時は實戦に臨みて其の効果尠からざるものあり、而して本譜は故七段小林鐵次郎氏の遺稿にして、勿論現今の碁勢に適用して頗可なるものありと認めれば、編者之に細解を施し一讀布石の何物たるかを知るに便ならしめたり。此布石を基礎として學習せば上達進歩に資せんこと必定なり。

尙詳細に説明を要するが爲、便宜上圖譜を數回に分載して次第に送ることゝしたれば、前圖に説明せる處は後圖に於ては單に白丸黒丸を以て現はせり、即ち説明と共に順次に第一圖、第二圖と連續するものなりと知るべし。

大正
8.10.29
内交

解説

第一局 (一圖)

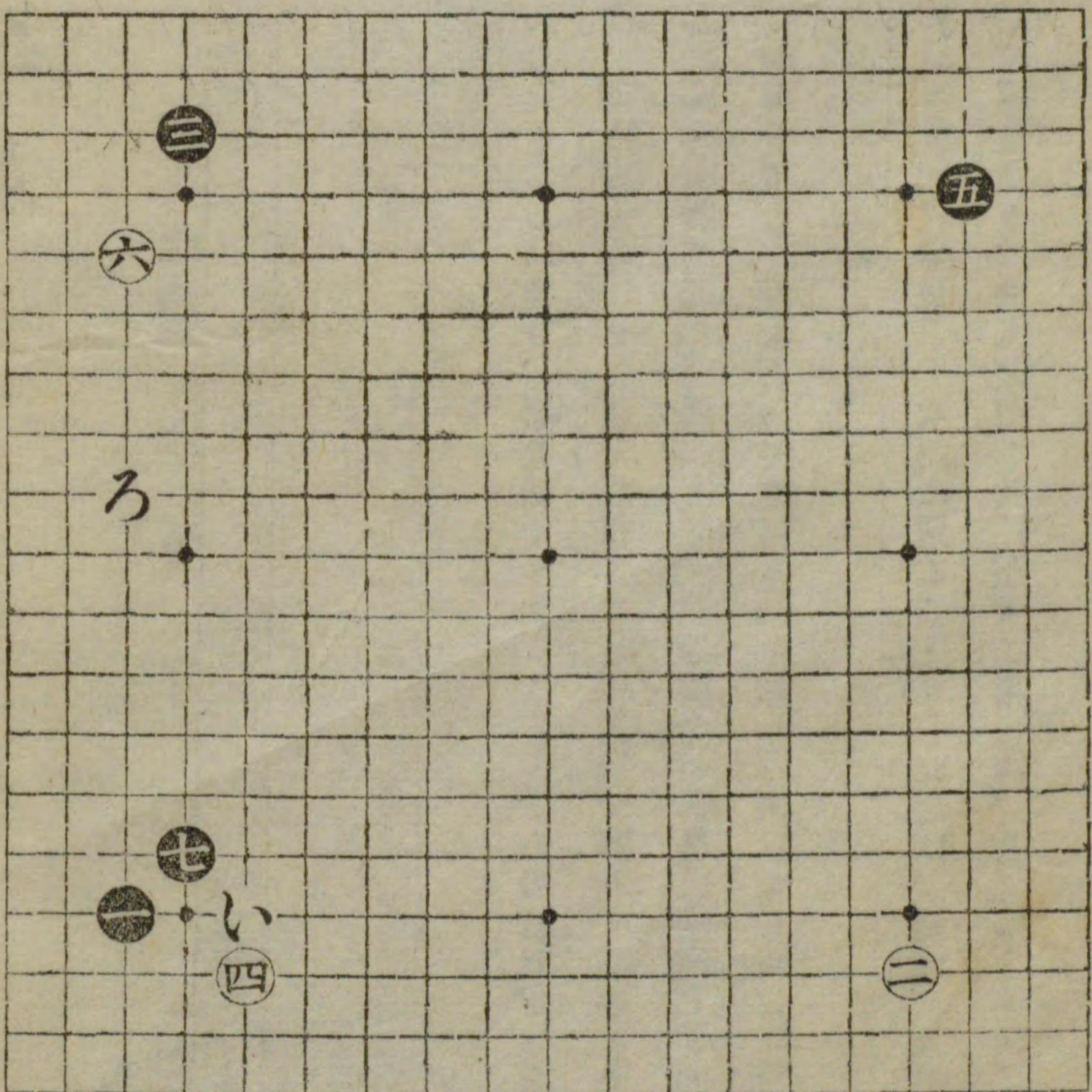
黒一と打つのは之を小目と稱へ、隅に先着する時には最多く用ひられる手で、又確かな打方である。

白二も矢張小目で、黒の一に對して釣合を持つて居る。

黒三も亦小目で一と關聯した位地、即ち高低互ひ違ひに其釣合を得た處とする。

白四は黒の一に對して小桂馬懸りと稱し、黒に影響を與へ、且二の白と遠く關係を保つて居る、

(圖一) 局一第



白若この手で右上部隅に打着すると、黒は「い」に締るであらう、其時白六に懸るも黒から「ろ」と三間夾されて左側に大模様を生じ、碁勢較々急促となるやの嫌がある、乍併趣向に因つて絶対に打たぬといふ譯ではない、即ち各自の思考で異なるが、十中六分は之を避けて四或は六と此二ヶ處に懸るのが、白として多く用ふるところである。

黒五これも亦小目で、三の石と權衡を保ち、延いて一の石にも影響を及ぼして居る、之を一、三、五の石立と稱へ、先を布いた配石では最紛れの少ない打方とする、此配石の法は秀策師の打ち出だされたものといひ傳へる、現今も此法に據る棋家が頗る多い、以下此布法に範つとるから能く心得て置かれたい。

白六は四と同意味で矢張隅の勢力を殺ぎ、且左下隅の黒一の石に對して側面から攻撃を加へやうかの氣勢を示して居る。

黒七の尖みは先の碁で能く打ち出す確實の良手である、此際は殊に四の懸りがある、一方六の白石も遠く扣へて居て夾まれやうとする場合であるから、之を避けて堅實に斯様に尖みおき四の白へ響かせながら六の白に對し「ろ」の處に逆撃しやうとする勢を含んで居る。

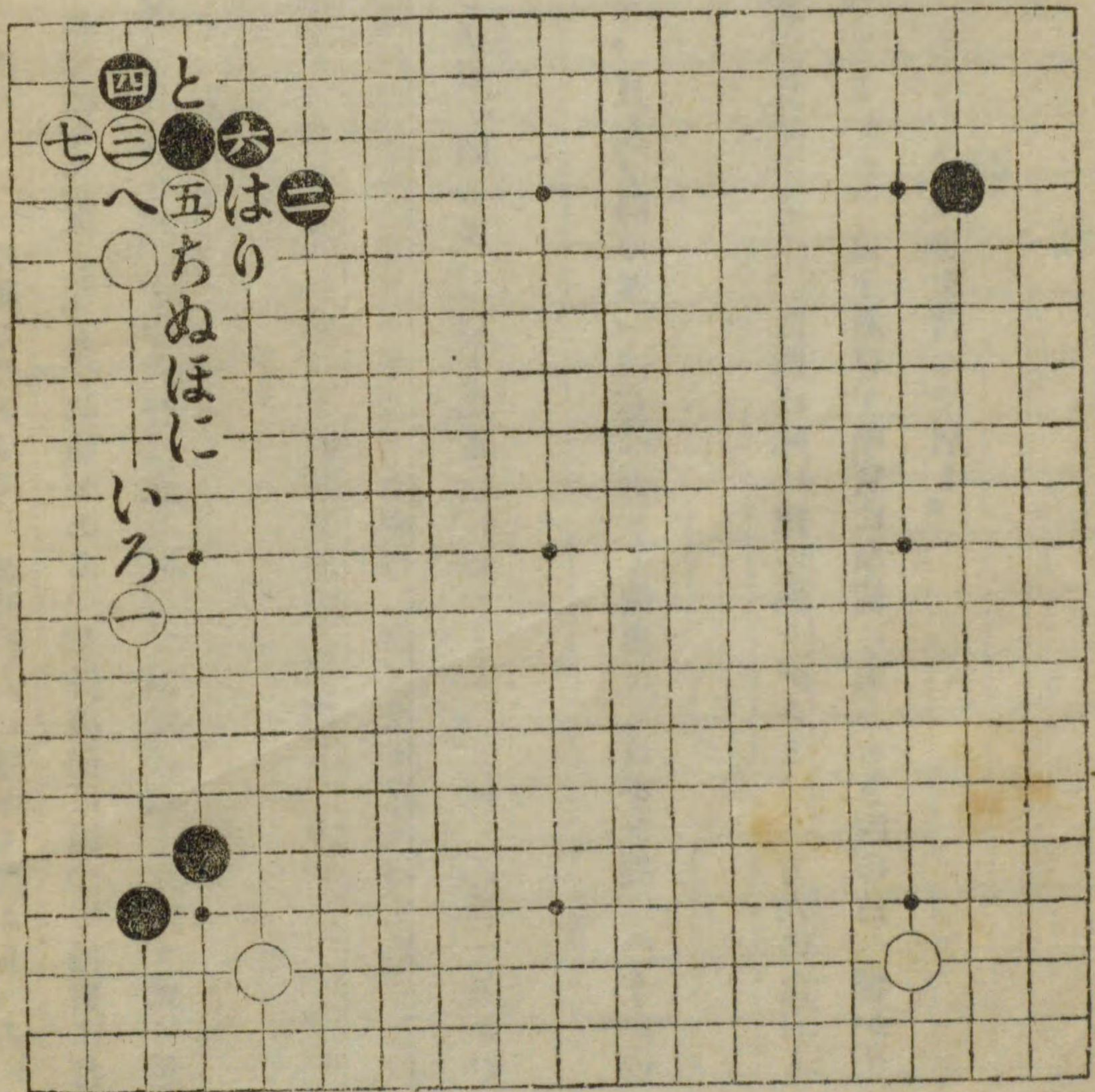
解説

第一局 (二圖)

白一と拆いたのは、黒から「い」へ夾撃されるのを凌ぎながら、自己の勢を張つたのである、尤此一の手は「い」「ろ」の二點に扣へて打つ事もある、そは各自の趣向に因る。

黒二と斜走したのは隅の石を補ふと、白の懸つた石と一の石との間隔が廣いから打込をも狙つて居る、若此儘白が手を抜いたなら、黒から打込むには「い」の處を好點とする、黒二の手は

第一局 (二圖)



「は」に尖むのも亦一法である、因みに黒二の手を他に打つたとすると、白から「は」若くは二の處に掛けられて左側に大模様が出来、碁勢が廣くなり種々の手段を施される虞があつて紛れ易くなるから、斯く二と此處に打つておくが善い。

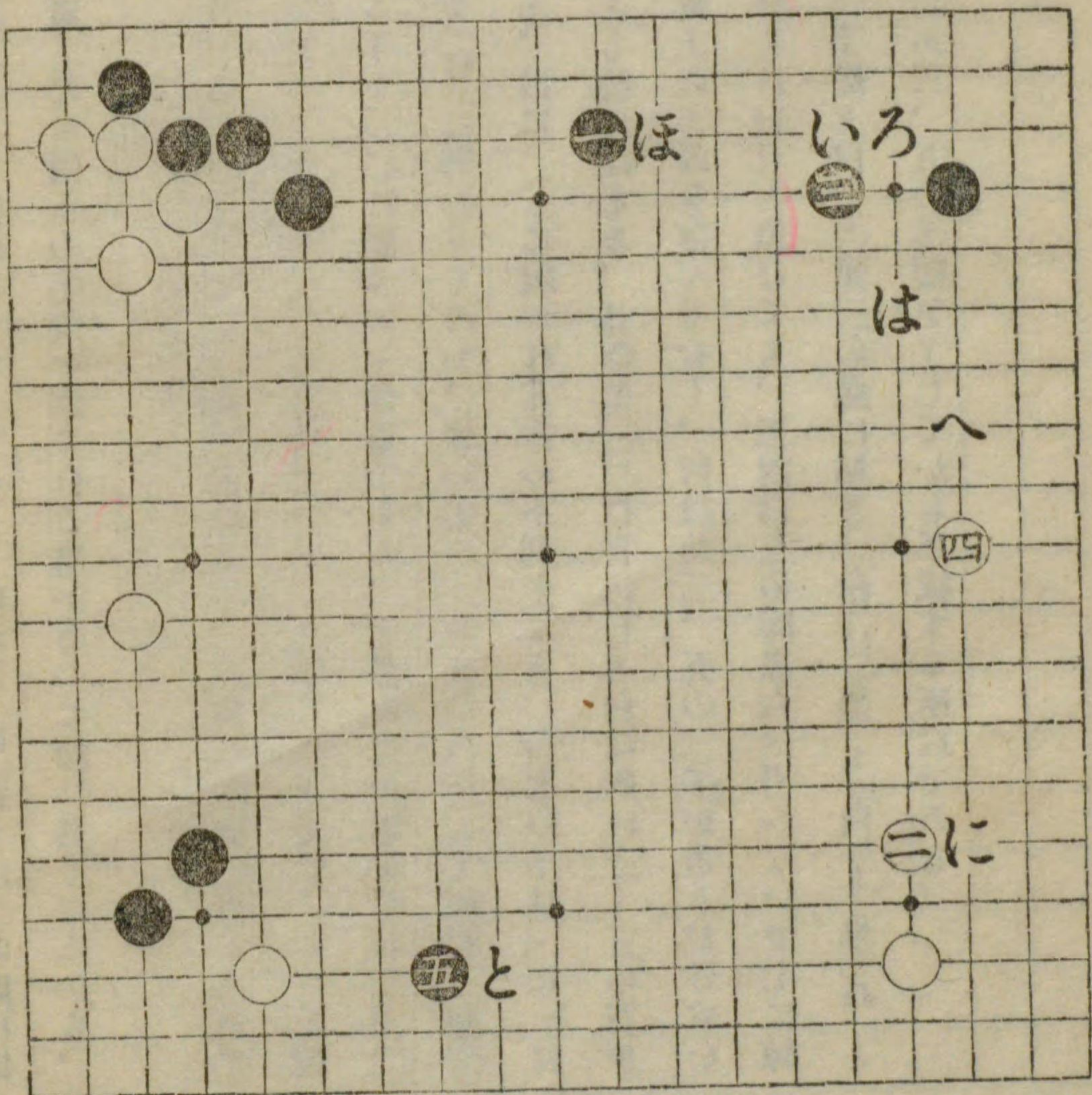
白三と頂けたのは「い」の打込を防ぐ手段である、以下七まで通常の應接で、此隅に根據を得ると最早打込の効力が薄弱となる、若、手抜しておく黒から「い」に打込まれて、上下の白が急忙となつて凌ぎがたくなる事がある、又白三に頂ける手で「に」に圍ふのも普通である、尤黒の二が斜走でなく「は」の尖みにある時は、白「に」に圍はないで「は」に斜走するのが、黒の尖んであるのに對して權衡上相持した形である、黒四の手で五に行びると、白に「へ」に續かれ非常の不利となる、白七の手は「に」に圍ふも或は急な場合には手抜きすることも時にはある、其際黒「い」に打込むも白は既に三と五の石が打つてあるだけ此隅を治めやすいから如上の手段を運んでおく、何故此三、五の二子があるだけ宜いかといふに、黒から「い」の打込を先んせられ白三と頂けても、黒四白五の時黒六へ引かないで七に繰ねることもある、而して白六黒「へ」に一子提起白「と」黒三の處に粘ぎ、白「は」黒「ち」白「り」黒「ぬ」と變化に出られて白割合が悪い、これがため三、五の手順を了してから手抜きする所以である。

解説

第一局 (三圖)

黒一は大場で左右の釣合を保つ手である、其時白「い」に懸れば黒の一は恰も三間夾した好處となるを以て、黒「ろ」に尖みつけ白三黒「は」と煽つて打つから面白い、又白「い」に懸らないで三に懸つたなら、黒は矢張「は」に斜走して此白を攻め立てる氣味に打つて宜しい、故に白は二と手を抜き黒三に縮れば白四と大場を占めて打つたのである。遡つて黒一の時に是等を豫測し

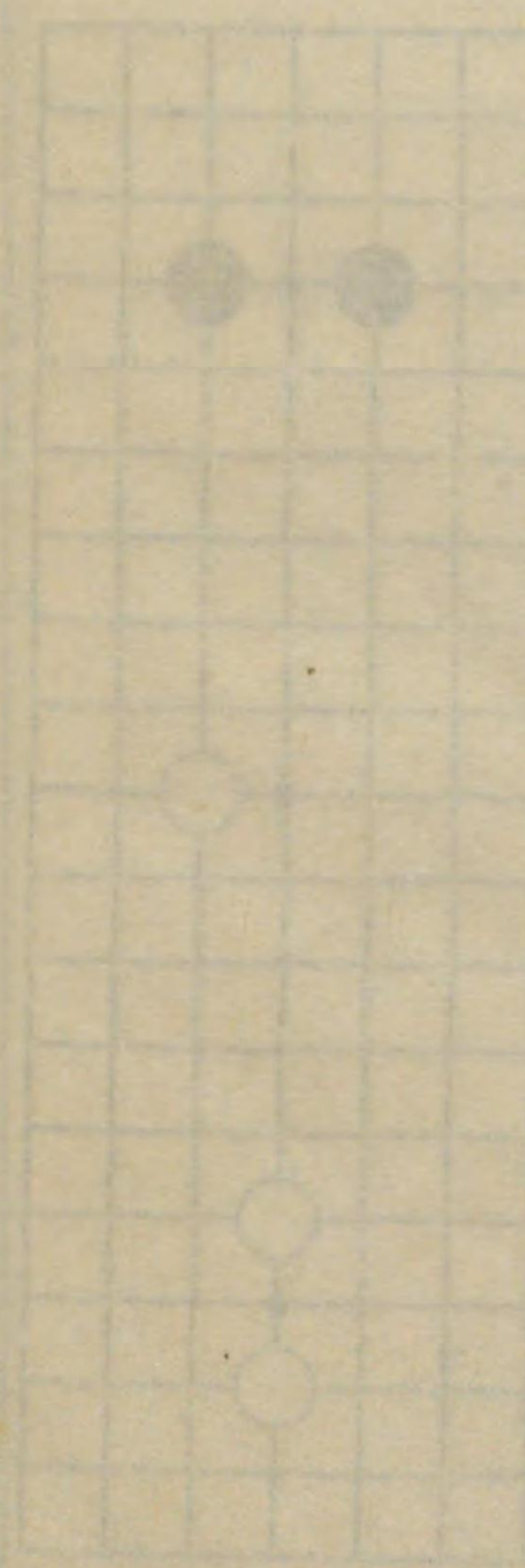
(圖三) 局一第



て若、面白くないと考へたならば、一の手で直ちに三に縮るもあり、或は「に」に懸つて打つこともある、就中「に」の懸りを用ふることが多い、其時白「い」なれば黒一か或は「ほ」まで近く夾んで打つ趣向である。

黒三の縮は佳處である、然し白から四の大場を占めらるゝを苦痛として、三に縮まらないで四に先鞭を着けると云ふ考へも出やうが、かくては隅が如何にも開放されたる縮のない形勢で着實を缺くの嫌がある、且三と縮まるのは初め一と打つた時から豫定の行動で、次ぎに下邊の大場に先着する順であるから之を忍ばなければならぬ、されば若これを避け様と思ふなら、最初一の手を下すに當つて徐ろに一考せばねならぬ。

黒五の二間夾は大場である、之を外にしては「へ」の詰めがあれど、然る時は白から「と」に打たれて碁勢が廣くなる傾があるから、此場合黒は五と下邊に打着するのが至當であらう。

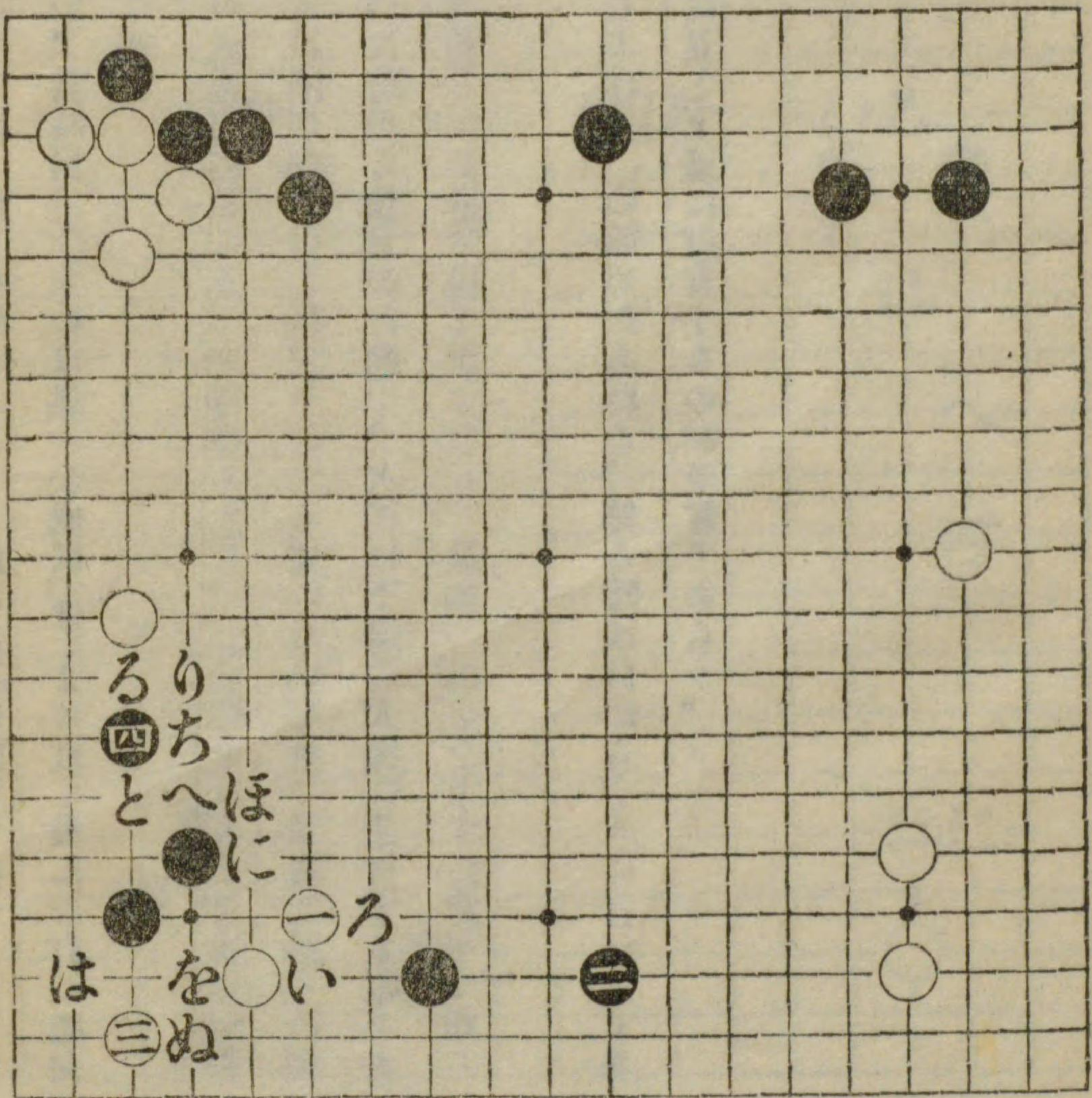


解説

第一局 (四圖)

白一の尖み出しは黒の二間夾に對する普通の應答で、中原に進出する手段である、此一の手は局勢に因つて直ちに打つとは限らない、若、手抜して黒から打つとすれば同じく一の處に掛けるのである、然し此碁では黒から封鎖される事が白として不利である故、斯く尖み出した、又白一の手で三へ斜走し、黒一白「い」黒「ろ」白「は」となる打方もあるが、既に封鎖されるのが悪

(圖 四) 局 一 第



い局勢であるから此際面白くない、又白一の手で「に」に頂けることもある、其時黒二白「ほ」黒四となるもあり、又白「ほ」に行びず「へ」なれば、黒「と」白「ち」黒四白「り」黒「ぬ」と打つ位のものである、又白「り」の手で「る」なれば黒三に打ち、後「ほ」の切を窺ふ手段となる。

以上の様に白が出動した時は、黒必ず二に拆く事を怠つてはならぬ、若、之を外すと白から二に攻められて非常の不利を蒙ることがある。

白三の斜走は自己の根據を作りながら黒の石を攻めやうとする手である。

黒四は小さい様であるが己れを治めるを以て必要缺くことができぬ、若し手抜すると白から「と」に打たれ、黒「へ」に押すも白に四の處に引かれ、三子の黒は根據を失ひ浮遊せねばならぬ。

又白三と斜走しないで直ちに「と」なれば、黒「へ」白四黒「を」に尖みつけ隅の根據を作るから悪くない、加之白の二子は却つて遊離する反對の結果となる故、白も亦輕々しく「と」に打つことは出來ぬ。

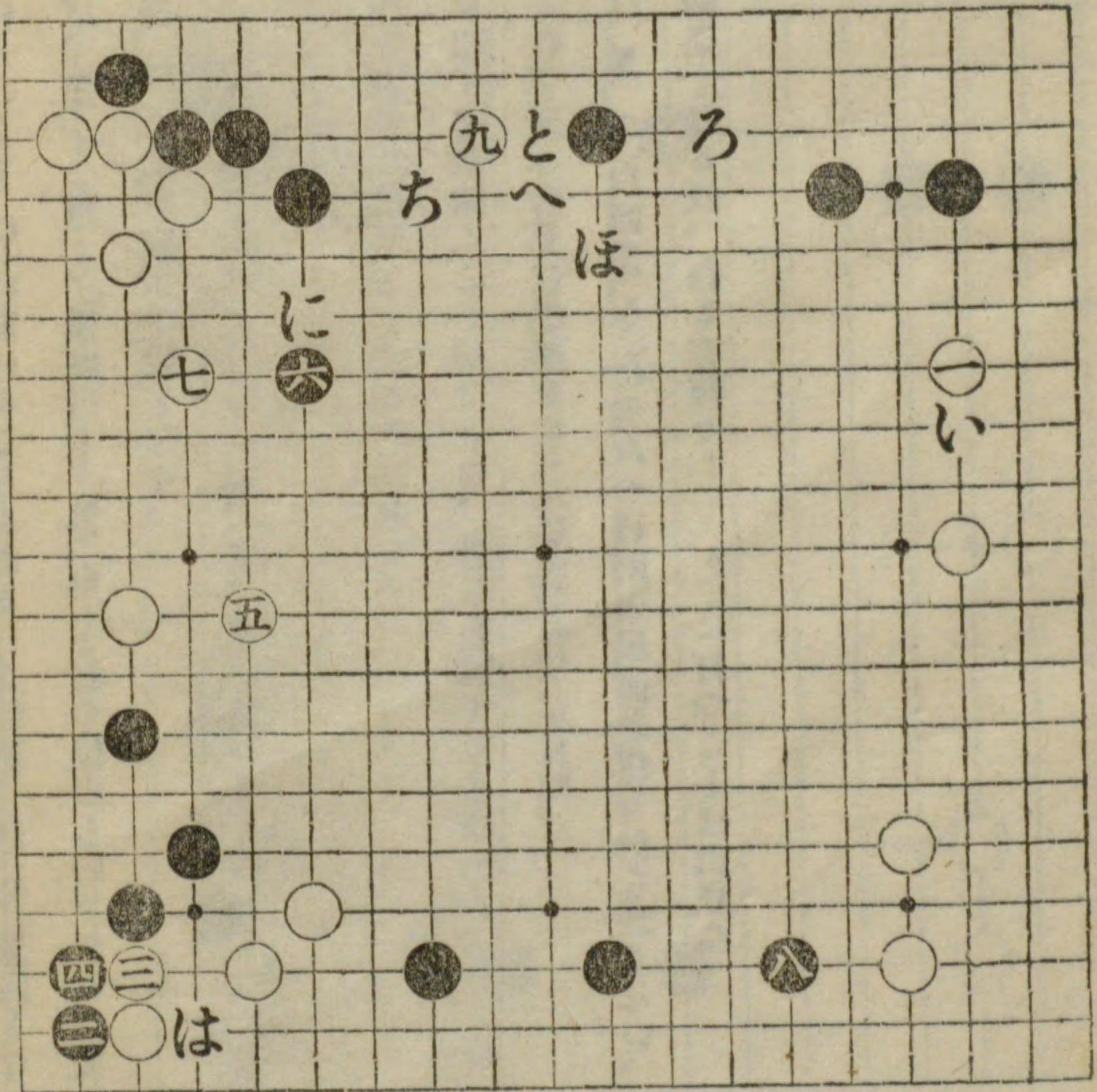
解説

第一局 (五圖)

白一の二間拆は此場合で最大場である、其故は之を手抜して黒から「い」に詰められると、右上隅の敵地が厚壯になり、且右側の自領に少なからざる影響を受ける、又圖のやうに己れから拆けば模様を廣大にして其上「ろ」の打込みを窺ふ次第となるから、是非共此處に着手しなければならぬ。

黒二の頂けは一見小さいやうであるが、之は白の根據を奪ひな

第一局 (五圖)



がら攻る意味と保守兼用の良手である、之に對し白三は致方ない受手で、若し之を四に芻出すと黒から「は」に頂け兩斷されて悪い、それゆゑ三に應じる外はない、此黒二と頂ける前に白から先着する時は四に尖むもので、圖とは反對の意味を生ずる。

白五は間接に左下隅の石を援護したのである、尤此時直ちに「へ」に打つ趣向もあらう。

黒六は大模様を作つて左側の白地を消さうとする手である、然し此手は「に」に一間飛ぶが普通で、此場合でも亦差支ないやうである、そは圖のやうに白から九若くは他の手段に因り上邊に着手された時、其間隔が廣いだけ又缺陷もないではない。

黒八の詰は此時に於て大場に相違はないが、隅の白が高締にある場合だから其響きは最薄いに因つて、上邊「ほ」に關し守備を嚴にするのも確に一策と思考する。

白九の打込は深過ぎるやう思はるれど、前にも述べた左方の黒の間が廣過ぎる故斯様の手も出来るのである、尤白は此手で「へ」に打ち黒「と」の時白「ち」に一間飛びする手段もある、之も矢張黒の間隙を窺ふことが出来る。

解説

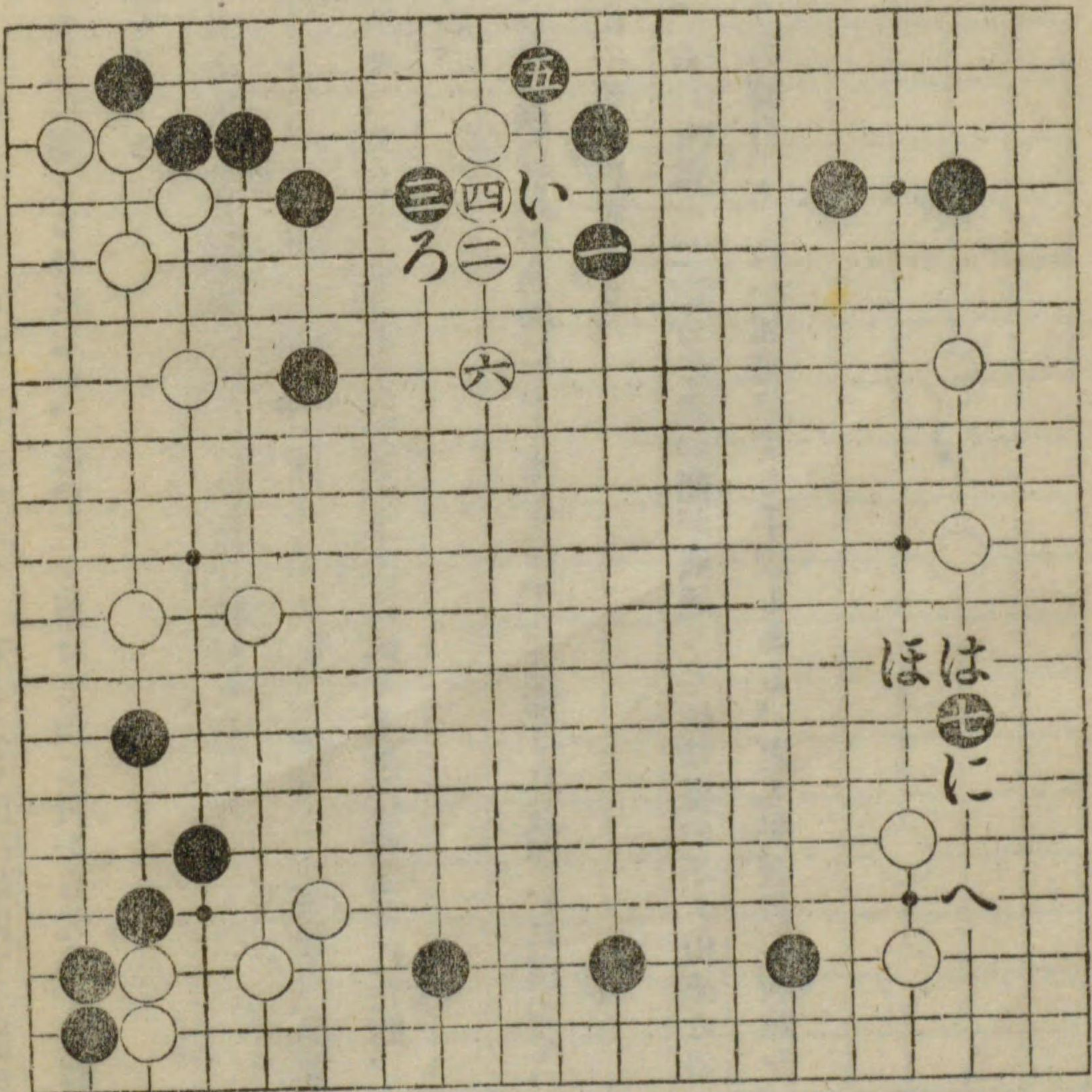
第一局 (六圖)

黒一の飛びは至極穩かの受方で、若「い」に尖むと白「ろ」に斜走するから混雜を來し易い。

白二の飛びは普通の手で別に言ふ程のこともない。

黒三と覗き次ぎに五と尖むのはこれ一つの手筋として應用することが少なくない故心得て置く必要がある、其意味は三と覗くのは左方の疎なるを補ひ、且白をして重くさせ、尙自己の眼形を作る便宜ともなる、又續いて

第一局 (圖六)



五と尖み白の眼形を奪ひながら右隅の吾が領地を固め、其上左方と連絡の意を含む、此種々な關係は三、五の兩着に因つて相應じ此意味を生ずる、即ち之は連絡して居る趣向である。

白六の飛び出しは自石を庇護するには已むを得ない手で、此手を以て黒の連絡を妨げやうなどの考へは重くして甚不可である。

黒七の打込は此際に於て適當である、尤此手の場合に因り「は」に打込むのもあるが、此形勢では「に」に尖まれるから圖の方が宜しい、楮七と打込み白若「ほ」に掛けて來たら、黒は轉じて「へ」に打込み七の一子を軽く捨て、隅に利を收めるか或は白の應手に因つては連絡して活形に就くことが出來やう、此石立黒の方先着の效があるから細碁ながら優勢たるを失ふまい、之から以後の打方は此七の捌き方如何にあるので、白も普通では面白くないから何とか趣向を廻らすべく、之に應じ黒は紛れない様注意して打つべきである。

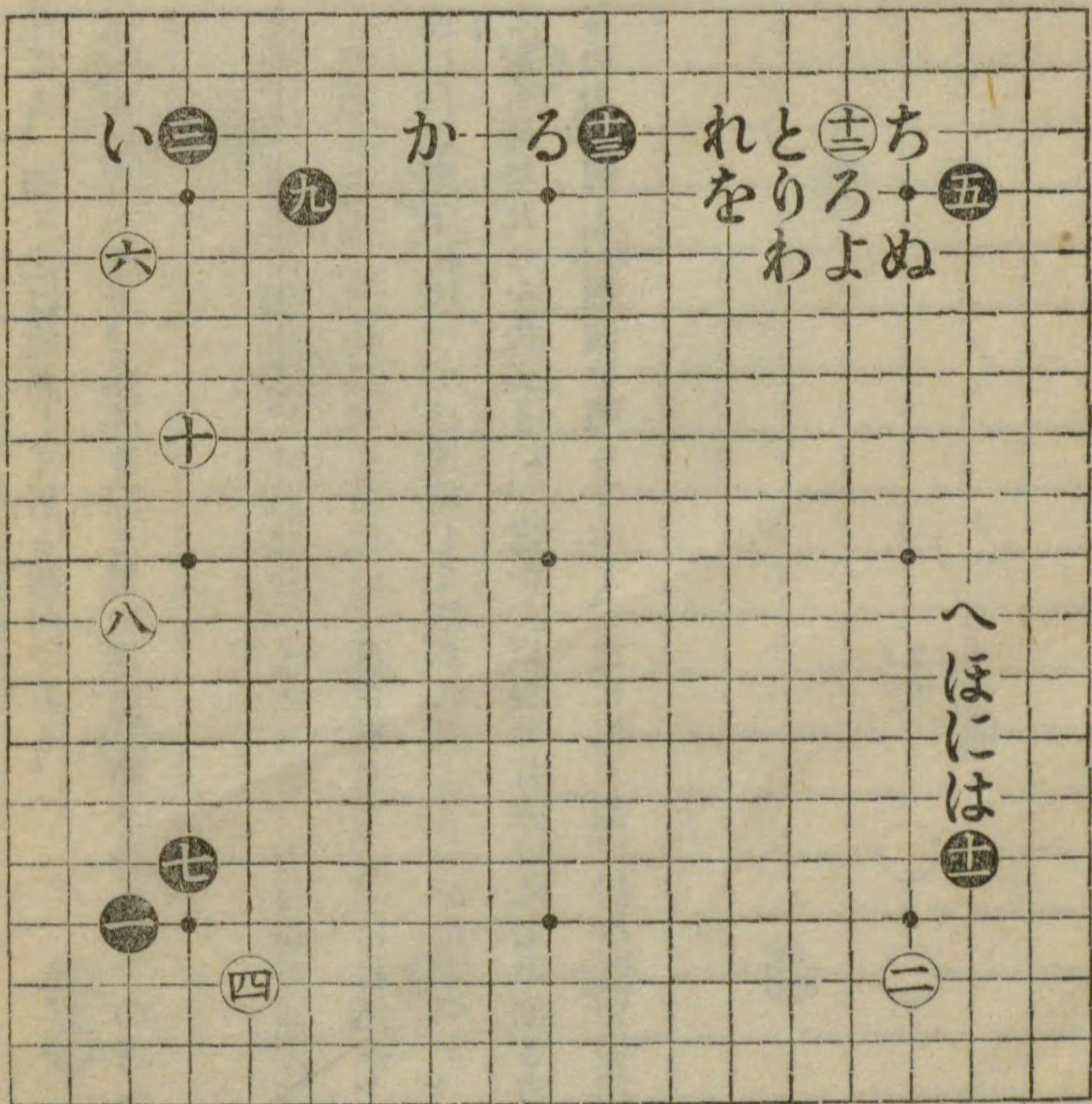
解説

第二局 (二圖)

本譜も黒は一、三、五の石立で一から九までは前圖と同じであるから其説明を省略する。

白十は六と八との間に打込まれるのを防ぎながら己れの地歩を拓く着手である、前譜に示した布石では此手で「い」に頂けた、此兩手段は何れを選むかといふに、それは全局の權衡上から打算すること、今斯様に前と同じ布石で變化するのは各々其時の趣向に基くものである。

第 二 局 (圖 一)



黒十一は先を置いた黒の地位として、十二の處か若くは「ろ」に縮り白を明隅に據らしめ、各々一隅を領するのが碁勢判明しやすいから、黒本來の性質に適ふ打方とすれど、此布石では白から「は」に縮まられては、左下隅及び右上隅との釣合上局面却つて擴大するかの感がなくもないから、寧ろ黒は進取的手段に出て十一に懸り、白十二の時十三と夾む趣向を用ふる方が分り易いから、斯くは打つたのである、さりながら十一の懸りが確定の良手段と思ふのは非で、「ろ」に縮り白を此隅に據らすのも常に打ち出す事である、詳しく言へば其用法十中六、四の割合と心得てよい。

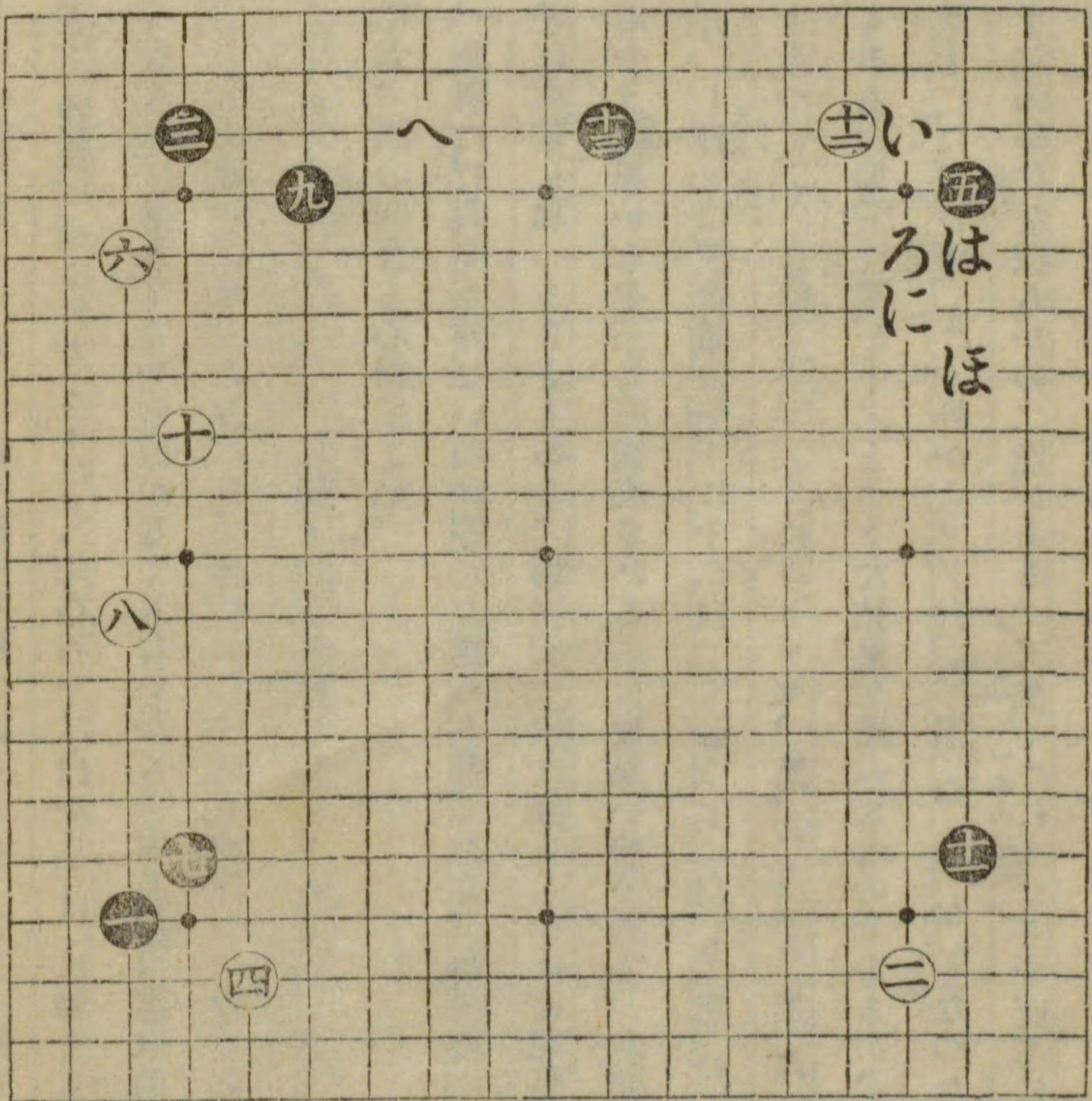
白十二の懸りは黒が十一に打つた以上、此隅に打着する外ないのは等しく認める所である、但殊更に常套を避けて「に」「ほ」「へ」と十一の一子に夾撃を加へることもある、偕白右上隅に懸るとすれば那點を可とするかといふに、十二なれば圖のやうに黒から十三に三間夾されるのは觀易い勢である、其他では白「り」に懸る趣向もある、又白「ろ」と打てば黒普通のやうに十二白「と」黒「ち」白「り」黒「ぬ」白「る」となる、又白左上隅との釣合上もあつて「り」に續く手で「を」にカケツギ、黒「わ」白「り」黒「ぬ」となつた時、白轉じて「か」迄廣く拆くもある、以上は黒が十二とツケた結果を述べたものであるが、若、前陳の運びが不都合と思考すれば黒十二に頂けず「よ」と外からツケ白「わ」黒「ぬ」白「を」となつた時、黒「と」に打つ定法に出るか、或は十三の變化を採るか二途がある、又黒「よ」にもツケず直ちに「れ」に逆撃するものもある、其中場合に應じ宜しきに従ふがよい。

解説

第二局 (二圖)

白十二の懸りに就ての應酬は、既説のやうに彼我共に其趣向多様で、斯かるところは打着の如何に因り、局勢の趨くところに大なる相違を來す分岐點であるから、能く其計を立て、熟慮せねばならぬ、而して以上の白の懸り方に就き、何れを撰むかは此一隅に就てばかり斷言することとは出來ぬ、即ち時と場合に因り臨機の應答を要するのは言ふまでもない、さて此布石では如

第二局 (圖二)



何といふに各々一得一失あつて何れに従ふのも不可でない、要は各自が今後の趣向に因つて其懸り方を撰むのである。

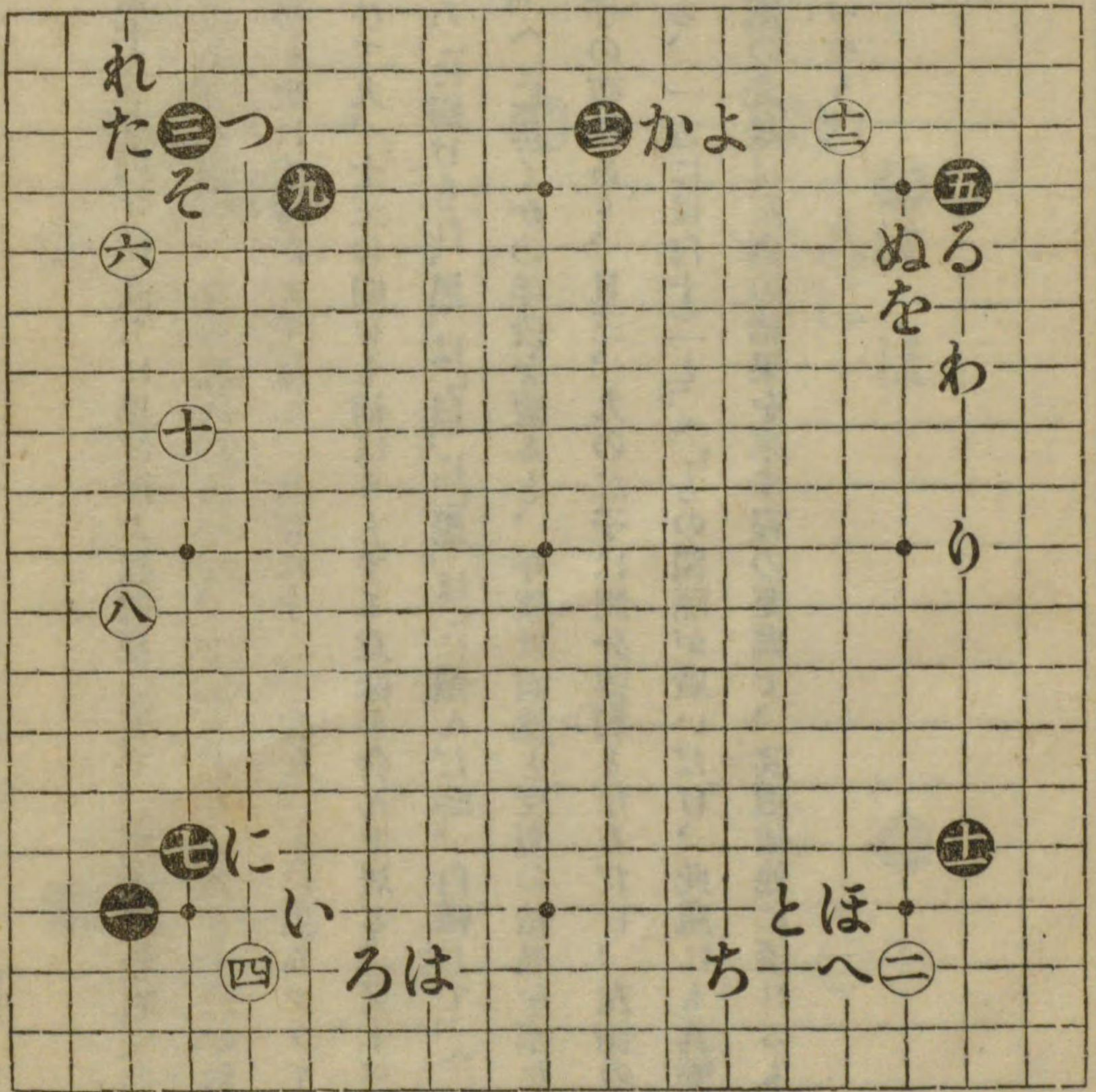
此圖は白十二に懸つたもので、其時黒十三と夾むは直ちに思ひ浮ぶ程觀易い手で、又實に好點であるのは誰人も疑を挟む餘地がない、其故は左上隅三、九の布置があつて、十三と夾めば九と十三の釣合が一高一低正しく碁理に適合した姿勢を現はすばかりでなく、次ぎに十二の白を「い」に尖みツケて之を攻め立て、右上隅を固めながら延ひて九、十三の間をも補はうとする意味を含んで居る、又十三の手を打たないで捨ておくと、白から「ろ」に掛けられ、黒は「白」に「黒」ほに飛んだ時、白轉じて「へ」に拆るか、或は「ろ」に打たないで單に「へ」に拆くかの手段を蒙ると、今度は前述と反對の結果を來たす、即ち左側に於て白六、八、十と三子の布置あり、且三、九の二子は幾分薄弱となるだけ、左側の白の圍ひは之に因つて益々堅實を加へる、一方には白十二と「へ」との間隔が廣いだけ、此處にも其弊を蒙ることが少くない、されば彼我此處の先後は反對の結果を來す程の要處で、其價值他に優れるものがある、尙殘説があるから次圖に述べやう。

解説

第二局 (三圖)

黒十三の手で假りに轉じるとしても皆普通の着手で、特に好點を見出すことが出来ぬ、即ち「い」に掛けるも白「ろ」に飛び、左側の圍ひがあるから黒「い」の手の効力が少い、又黒「は」に夾むも白「い」或は「に」に頂けて打つから、今上邊の要處を手抜きしてまでも此處から着手する程の要はない、又黒「ほ」に掛け白「へ」黒「と」白「ち」となるも、右上隅の配置と此黒十一以下「ほ」

(圖三) 局二第



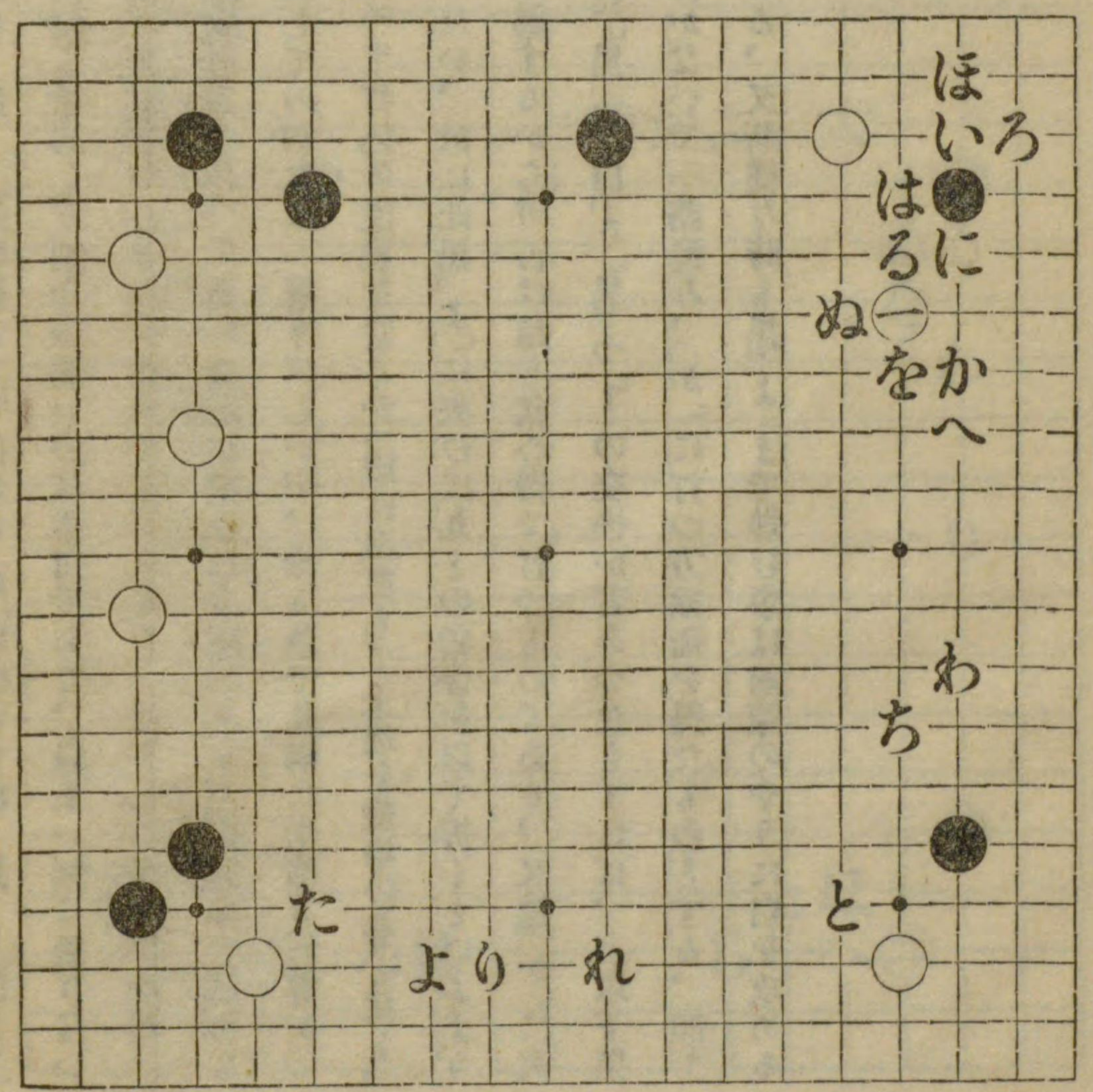
「と」の三子との釣合が肯綮を得ないから、黒「り」邊に拆いても白から「ぬ」に掛けられ、黒「る」白「を」黒「わ」となれば此黒「り」と「わ」との間狭く重複して割合の悪いのは明白である、以上一例に過ぎないが、此處に至ると上邊十三の着點は益々其價值のあるのを發見するであらう、尙十三の手で着眼點は同じでも「か」に夾むは九と其石との間廣過ぎ、却つて後に打込を狙はれる虞があるから適切と認められぬ、又黒「よ」と一間夾すると白に對しての利目は一層きびしいが、餘り急で此隅に引續き何等かの成行を見るに至り、事端之から生じ却つて打込の逆襲を蒙るか、或は混亂して上邊を戰場の巻と化し、黒守備の違ふこと、ならうも計りがたい、故に此黒「よ」に夾むは九との釣合を以て拆くといふよりは寧ろ直接白を攻撃するといふ手段に屬するから可否は措き其心得で打つものである、又黒「か」に夾む事に就て一言するは、左上隅に白「た」黒「れ」白「そ」黒「つ」との交換が若あつたとすれば、三以下黒石堅固であるを以て其時こそ十三に拆かないで一路進み、「か」に打つ方權衡を得たものとする、即ち十三では一方堅いだけ較々狭い感がある、又斯様な時も黒「よ」まで進む事は前陳のやうに白を攻める意味を主としたものと思ふてよい。

解説

第二局 (四圖)

白一と大桂馬に掛ける手は此場合に於て普通の趣向である、此手を外にしては適當な處が少い先づ「い」に頂るもある、其時黒「ろ」白「は」黒「に」白「ほ」黒「へ」と二間拆して彼我の形勢が略定まる、其時白「と」に尖めば黒「ち」に斜走するのが通常である尙白「り」なれば黒「ぬ」に斜走して分り易い碁勢となる、又白「り」に拆かないで「る」に押し黒一白「ぬ」黒「を」の時白上邊に打

(圖 四) 局 二 第



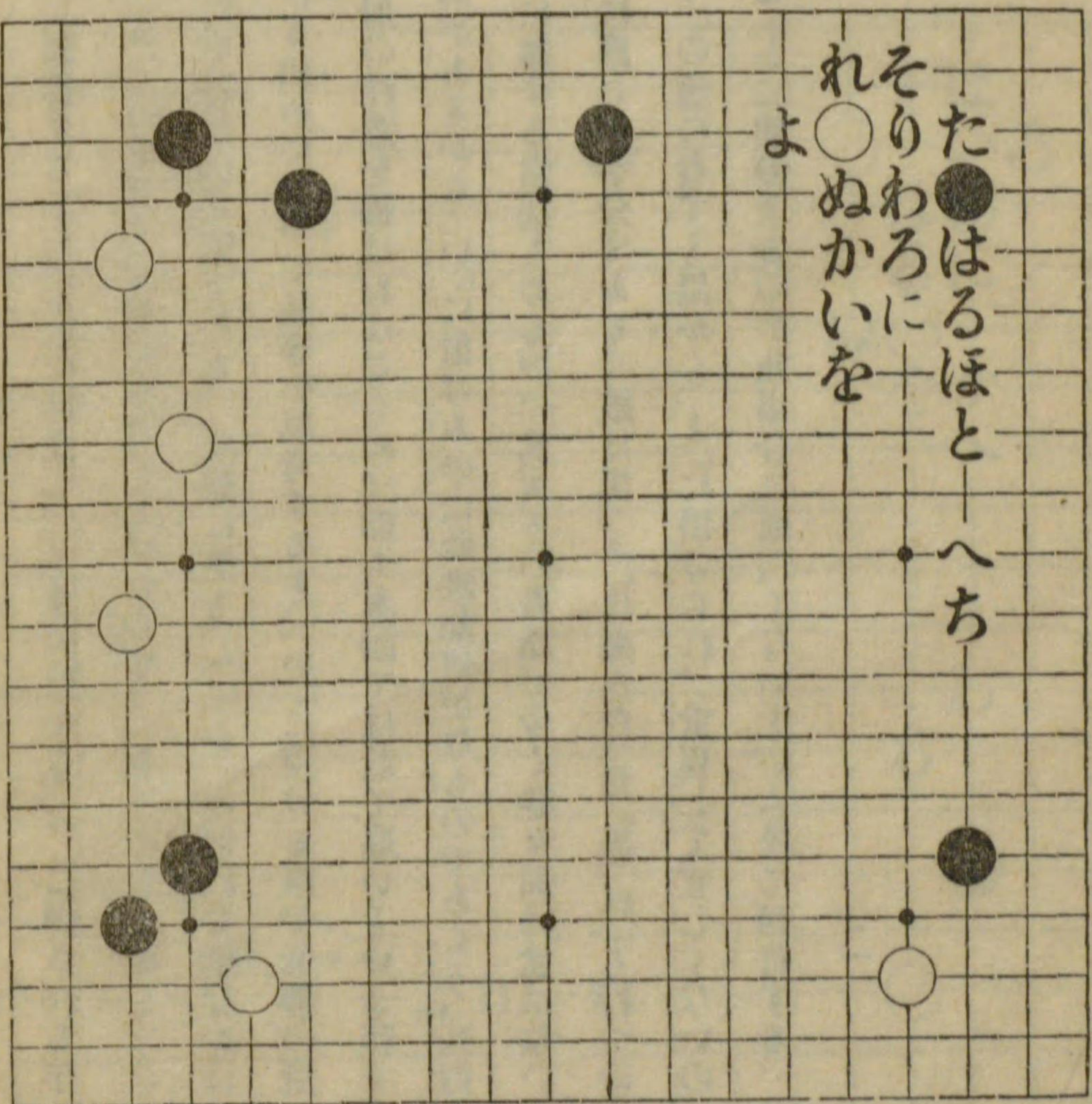
込を狙ふ趣向もあるが、黒は比較的打ちやすい局勢である、然し黒として上邊に白から打込まれる事が痛痒を感じる場合には、初め「へ」に二間拆する手で「を」に斜走し、上述の白から「る」に押される手順を避ける方法もあるが、「へ」に拆くに比して右側に今度は打込の適處が出来る、恐らくは白から「わ」に夾まれて碁勢變化を來たすのは亦已むを得ない次第である、此故に黒も「へ」を「の」何れを撰むかは熟慮を要する、従つて又白も「い」に頂ける初めに當つて是等を思考すると、「い」に頂ける事が碁勢の廣狭に關する最大な着手であるから、一層の注意を拂はねばならぬ、即ち本譜では敢て悪いといふ程でもないが、幾分碁勢が分り易くなる傾向があるから「い」に頂けるのは此際如何がなものであらう、又白「い」に頂けず「ぬ」に二間飛し黒も「か」に應ずる常法もあるが、其次ぎの着點が少く益々黒は迷はない勢となる、即ち白「と」に尖むも黒「ち」に應じて十分である、或は黒「よ」に夾み白「た」黒「れ」と打つのも一策で面白い、又白「と」に尖まず「り」の邊に着すと黒から「と」に掛けられ、重複して宜しくないのは觀易い道理である、因つて初め白「ぬ」と二間飛するのが此場合に面白くないといふ事に歸着する。

解説

第二局 (五圖)

前圖に續き尙説かんに、白「い」にも飛ばす「ろ」に掛けて黒「は」白「に」黒「ほ」となるのもあるが是亦「い」に飛ぶのと大同小異であるから宜しく推知されたい、今度は白「ほ」に夾返せば如何といふに、黒「ろ」白「へ」となつて右上隅は一つの定形となるが、「へ」と拆く事が下方の黒に對し響きが甚薄い、されば此「ほ」と夾返す趣向が最良の手段とはいへぬ、又白「ほ」の手で「と」に夾

(圖五) 局二第



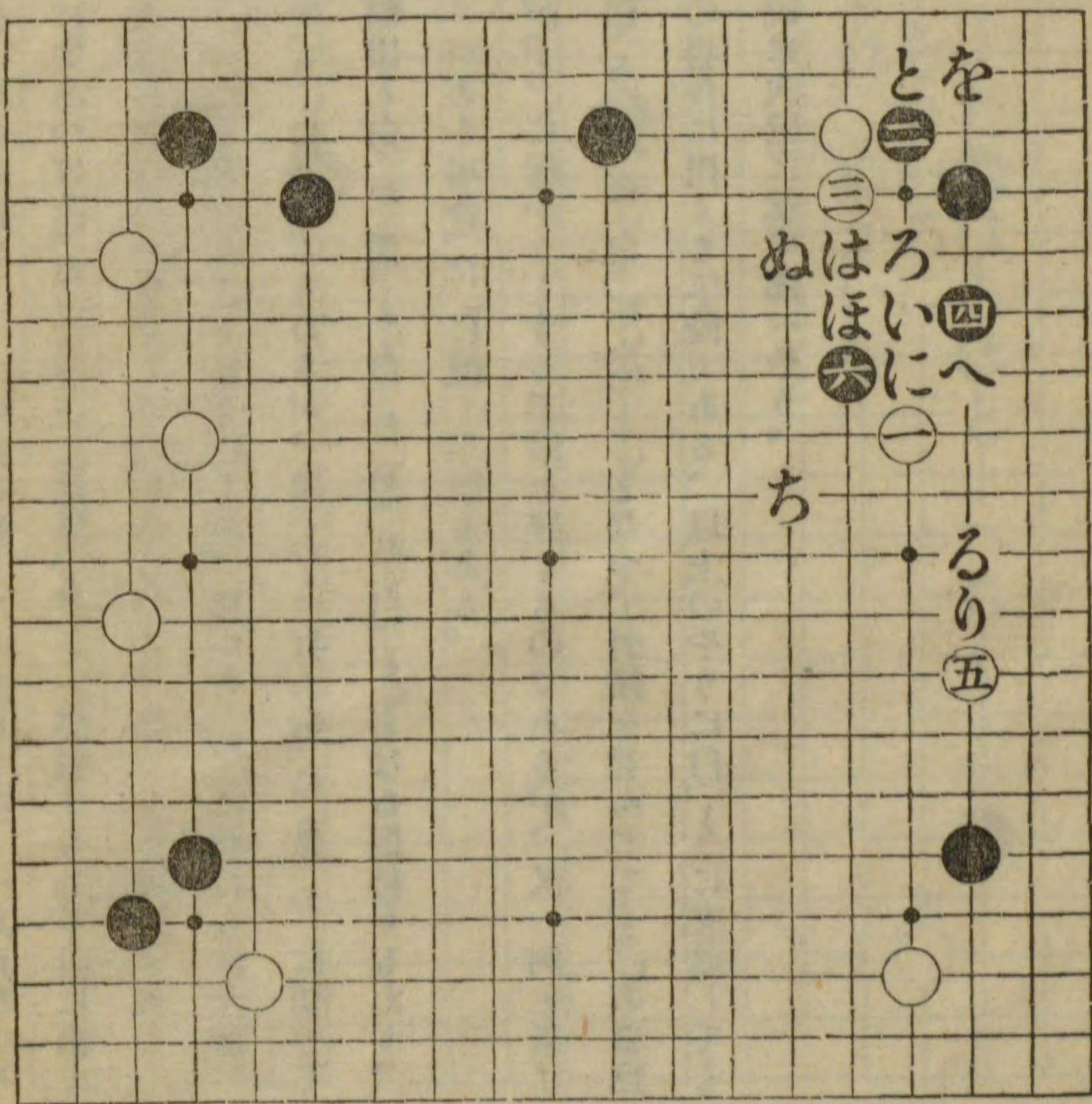
返すと、黒が其時「ろ」に尖み白「ち」に拆く事になれば、下方の黒に對しても利目を生じ一舉兩得のやうであるが、此黒「ろ」と尖む手で「り」に尖みつけ白「ぬ」に行びた時黒「る」と一間飛する急手段に出て白をして己むを得ず「を」に補はしめ、上述の白の趣向を挫く手段があるから、白「と」に夾返す事も一考を要する、尤白「ぬ」に行びる手で「ち」に拆く事古來往々見受けるが、黒から「ぬ」に縛ねられ大抵の場合損と知つてよい、又白「ち」に打たす「ろ」に掛けるもあるが、黒「わ」に打ち白「ぬ」黒「か」に切つて戦ふもあり、又黒「わ」に打たす「ぬ」に列出し白「わ」黒「よ」白「た」黒「れ」白「そ」となる振替りもあり、又黒「よ」の手で本譜のやうに征のアタリがある場合「た」に續く手段もある。以上何れも黒「り」に尖みつける時は白が「ち」に拆かうとする手段を挫くものであるが、又一例を挙げると白「と」の時、黒直ちに「ち」に打ち白「ろ」黒「は」白「に」黒「る」となつて封鎖を甘んじて「ち」の要點を占めるのもなくはない、是れは特殊の場合に用ふる手段である、以上のやうに白「と」に夾返しても必ずしも効果を得ると限らない、尙殘説は次圖に就て述べやう。

解説

第二局 (六圖)

今度は白一と打つ手段もあることを説明する、其時黒二に尖みつけ白三に行び黒四に一間飛びし、白轉じて五と夾むのは本來の趣向である、これは一の手から胚胎したもので、然らば黒六と斜走上邊の二子を攻めながら漸々に運ぶが宜しい、又白五の手で「い」に頂け黒「ろ」白「は」黒「に」白「ほ」黒「へ」白六黒「と」白「ち」となるのも亦一法である、此黒二と尖みツケル手で

(圖六) 局二第



「ろ」なれば白矢張五に打つのである、又黒「ろ」に尖まないで「り」に拆けば白から「ろ」に掛けられて悪い、此白一と打つことは軽い手で此場合などに用ふるのは善い、今度は白一に打たず四に詰めるもあり、黒「ろ」白「い」黒「は」の時白「り」に打つか或は「ほ」に押し、黒「ぬ」に行びた時白五に夾む手段もある、尤黒「ろ」に尖む手で三に頂けるか、又は「い」に頂るもあり、何れも其得失少くないが、餘り多岐に渉るから其成行きは定石の部を参照されたい、又右上隅に着手しないで單に「り」或は五に夾むもあるが、黒から二に尖みつけられて面白くないことが多い、又白前に述べた「へ」に夾み返し黒「ろ」の時、白「る」に拆かないで直ちに五に夾むか、或は「を」に斜走する趣向もある、これは此場合に一策として用ふるも面白い。

其他は本圖の一に打つか或は四に詰るかの三種である、何れも趣向大に異なるから従つて結果も同じでない、故に何れを可とするかは斷言しがたい、其外には之から説かうとする「い」に大桂馬掛けする手段とがある、是迄述べたところに因つてみるも、此場合の着手至難な事は略推知されやう、上述の三種の手段と本譜「い」に掛ける手との四種の中其何れを可とするかは一概に論ずることは出来ないが、其他の打方の面白くないことは既説のやうである、今之から「い」の大桂馬掛けを説くに當つて、其撰擇を誤らない様種々の變化並びに得失を詳説した次第で、本圖の「い」が必ずしもよいといふではないが、他との比較上幾分基勢を廣からしむるだけが多少執るべき點である。

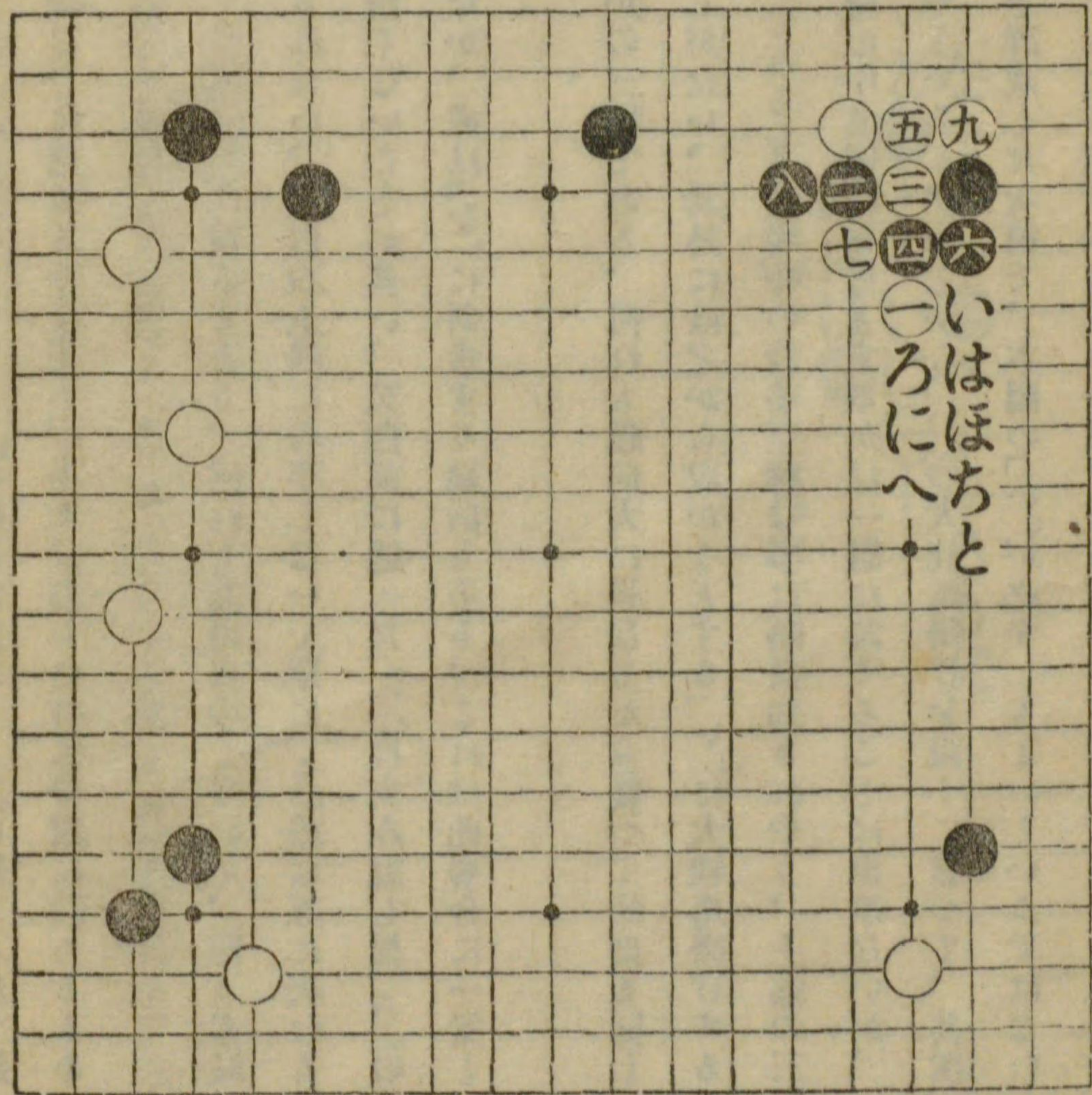
解説

第二局 (七圖)

前圖まで述べたやうに今度は白一と掛けたとすれば、それに對して黒二に頂け、白三以下九までの運びとなるのが最も用ひられるところである。

此黒二と頂ける手は白も豫て期した應手であるが、此手段は黒として此場合に於て最適當な打方で、此一隅の定石は相互應接の着手が渉るだけ、碁勢を觀易からしむるから黒の得策である、黒他の定法即ち黒四に尖み

第 二 局 (圖 七)



つけ白七に約へ、黒「い」白「ろ」黒「は」白「に」黒「ほ」白「へ」黒「と」の飛びとなるは、或場合には宜しいこともあるが、此際は黒下方の懸りがある處へ、一方から「と」と同線に打つことは重複の嫌がある、又一方白は外勢を得たから、之を利用して上邊の間隔に打込の便宜があり、従つて碁勢廣くなり黒として面白くない、故に四と尖みつける定石に出るのは此場合考へねばならぬ、又黒四に尖みつけず六に双び白七黒「は」に飛ぶ古法もあるが、殆前と同意味の狀態があつて矢張好ましくない、されば二に頂け烈しく應接する方が利益だといふ次第である。

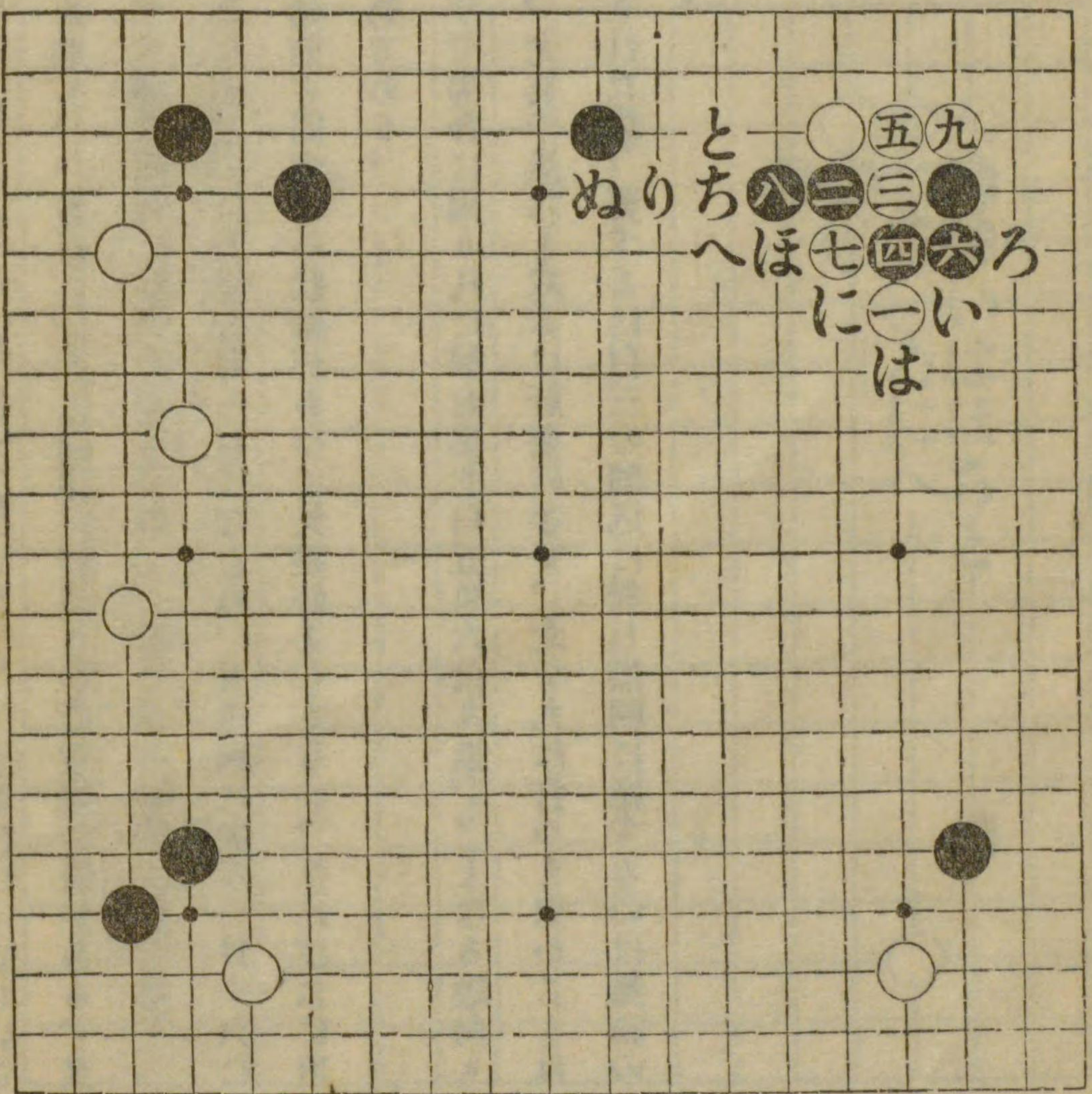
白三の勿込は當然の手段であるが、此手で場合に因り八に綽ね黒七白五黒六白九黒「ち」となる趣向も稀にはあるが、此處では白面白くない、尤其中黒六と双ぶは肝要の手で、之を九に打つと悪いことは定石の部に於て詳述してあるから参照されたい、要するに白三の勿込に對し黒四に應ずるのは無論の手で、白五の粘ぎも言ふところはない。

解説

第二局 (八圖)

黒六と内に續くが普通の手であるが、若し七と外に續くと白六黒「い」白「ろ」黒「は」の變化となる、之は一の白一子を必ず征にかけてとり得べき時に限つたもので、本譜のやうに征の當りがあつては其不可なること言ふまでもない、且三間夾の一着既にある上に内外實利と虚勢との振替りは前述の缺點がないとしても、尙虚と實との交換は稀有の事で特殊の場合でなければな

(圖 八) 局 二 第



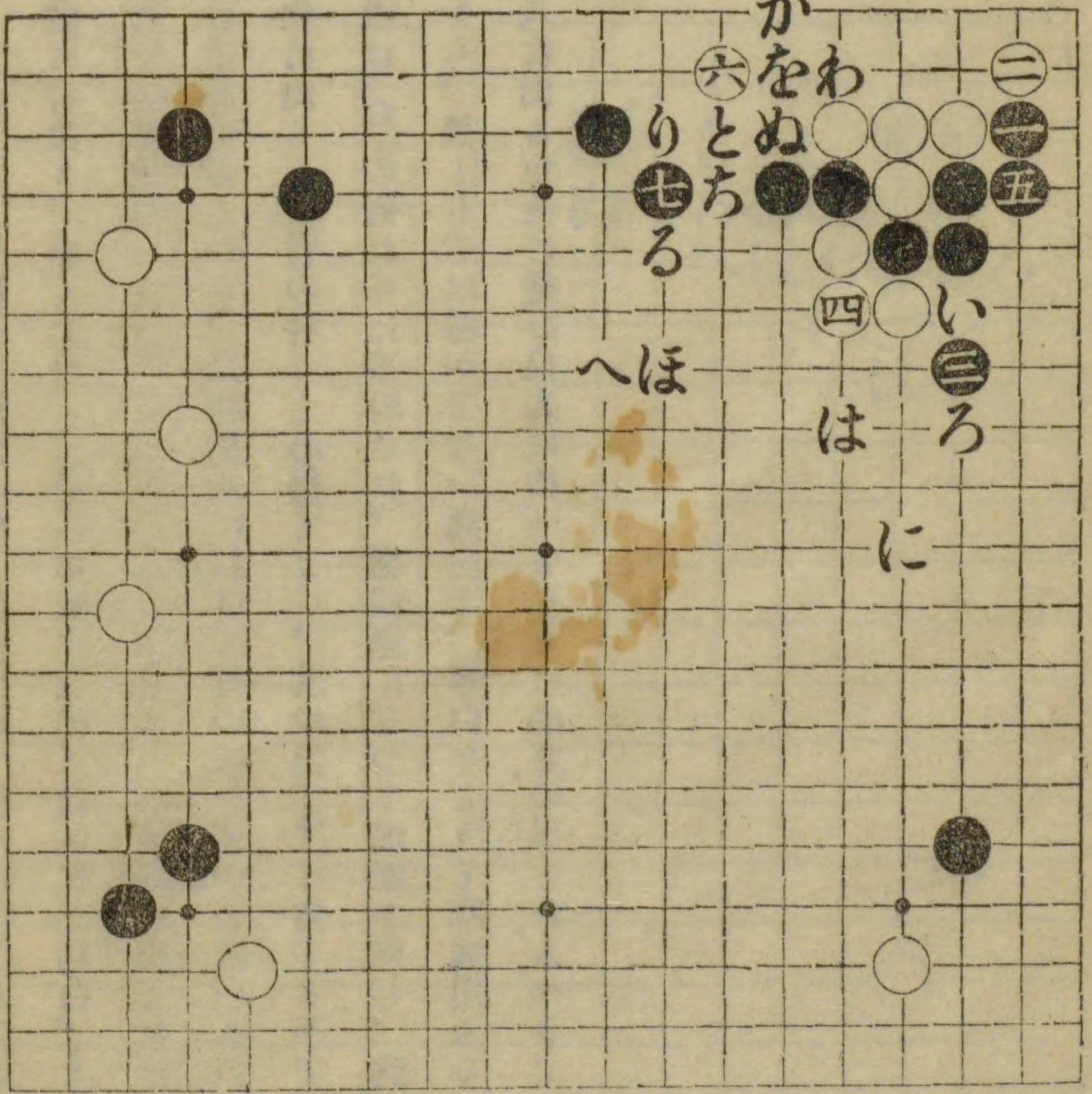
らぬ、故に此時黒七に續くことは悪手といふの外ない、因つて黒六に續き白七に切り黒八に行びるを定石とする、之を若「に」に切れば白八の處に打抜き、黒「ほ」白「へ」黒二の處に劫提り白九黒劫粘白「と」にカケツギするもあり、或は中央の形勢に因り普通のやう「ち」に打つこともあらう、何れにせよ黒の三間夾した一子は敵の堅壘に近過ぎるの不利があるから、最初黒八に行びて打つのを善いとはいふのである、併三間夾の石のない時は此變化に出るも相當の替りと心得てよい、其中黒「ほ」に當てる手で九に約へる變化もあるが、白から「り」或は「ぬ」の何れかに手段され、應接急になつて混雜を來し、到底紛紜を醸すことを免れぬ次第であるから、黒としては穩かでない趣向で、寧白をとりて臨機用ふる時は却つて面白いこともある、故に黒八に出る定法に従ひ白九に約へとなるは必定の手といふべきである。

解説

第二局 (九圖)

黒一と綽ね白二に約へ以下七までとなるのは一つの定石で、此場合黒一と綽る定法に出たのは場合を得たものといへる、普通は一の手で「い」白四黒「ろ」白六黒七白「は」黒「に」白「ほ」或は「へ」となるが多く用ひられるところであるが、此場合では白六の手で「と」に飛び黒「ち」に約へ白七黒「り」白「ぬ」となり、黒「る」に掛けるも白の一子を征にとる事が出来ぬと、此處に黒は

第二局 (圖九)



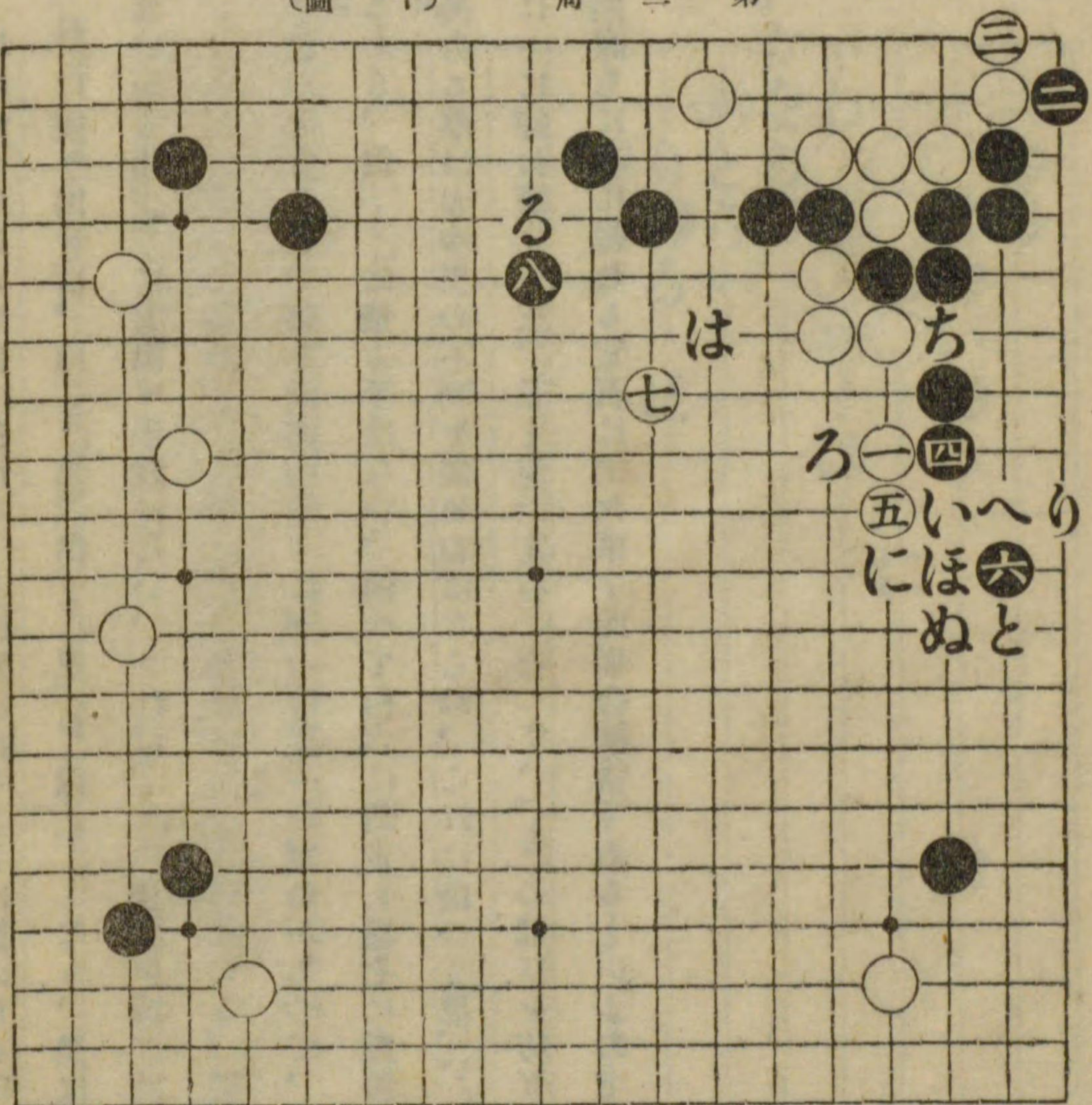
兩斷されて紛れ易い形勢となるから、征の當りがある場合に白から「と」に飛ばれることは黒のため不得策である、其中黒「り」に切る手で「ぬ」に突き出せば、白「を」黒六白「り」黒「わ」白「か」となり、黒は白の二子をとると、搾られて攻合が悪いから此「ぬ」に突出す手段はない、されば「と」の飛びを凌ぐには黒「ろ」に飛ぶ手で先づ一に綽ねおき、白二に受けた時黒「ろ」に飛べば、今度は白「と」に來ても、黒「ち」白七の時黒「ぬ」に突き出す手段を執つて宜しい、即ち前述のやうに運べば黒一の綽ねがあつて、隅の白四子ダメヅマリとなり取られるから、白「と」に飛ぶ手はない、因つて白六に斜走し黒七に應答する通形とはなるが、此一、二の交換ある事は多少黒の不利を認めねばならぬ、これに由つて黒「い」に押す定法を捨て、本譜のやう直ちに一に綽ね續いて三、五と運ぶ定石に打つて、「と」の飛びを防ぎながら相當の基勢とはなつた、即ち黒直ちに一に綽ねる定石に出た事を此場合適當であるといふのである。

解説

第二局 (十圖)

白一と掛け黒八までの運びとなるのは通形である、白一と掛ける手で「い」に詰め黒一白五黒「ろ」白「は」と運ぶ打方は、場合に因り趣向として打碁に見受けらるが、之は碁勢を急促にするから到底模範とはいはれぬ、且此場合は右下隅に黒の懸りがあれば尙更此處に詰めるのは不適當である、之に反し圖のやうに一と掛ければ、懸つてある己れの石の方へ向つて、黒を六と低く

第 二 局 (圖 十)



打たす成行となるから其方が至當といへる、又黒が隅へ綽續きした、此定形では白一の手で「ろ」に飛ぶのは宜しくない、即ち黒「い」に飛ぶから譜に比すると一段高だけ白の不利に歸する。

黒六の斜走は軽くして善い手筋である、斯様な打方は往々起り易い形であるから心得て居てよい、之を若「い」に押すと白「に」に行び、這ふに任せて白が外勢を得るは觀易い次第である、又黒「い」に押さず「ほ」に飛べば白「い」黒「へ」白六となり、黒「と」なれば白「ち」の穴から突出すべく、又黒「と」を「り」に下れば白「ぬ」に掛けて黒「ほ」の石を征にするから形勢白大に有利である、此故に黒は「い」「ほ」何れも悪く六に斜走するのが優つて居ることを推知されたい。

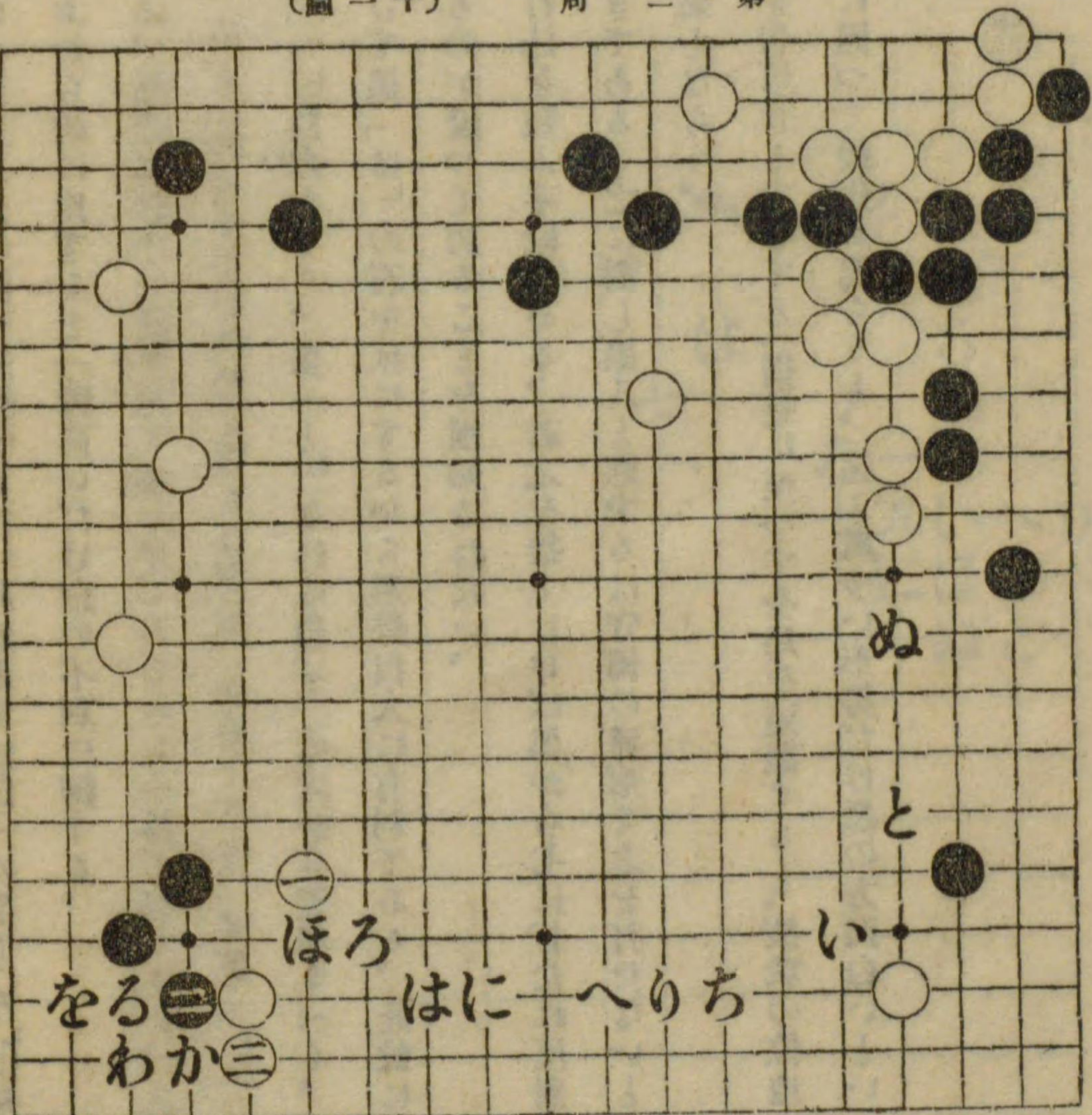
白七の大斜走は此白を補ひ且上邊に打込を窺ふ手段である、若之を捨ておけば黒から七に打たれ反對の形勢になる、此處は要點といふべきである、之に對し黒八と應ずるは守備の通形で之を打たないと「る」の點を衝かれて混亂を見るの結果とならう。
此八の手を以て上邊の方面は一段落を告げたものとする、儲是に至つて全局を通觀すると、彼我の位地既に定り、餘す處唯下邊一帶の打方に因つて變化が起らうも、迷ふ處少い形勢だけ黒の方面白いといへる。

解説

第二局 (十一圖)

今此時に當つて白下邊方面を如何に打着したなら、最黒を紛らすことが出来るかといふに、甚至難の場合に立ち至つたものといふべく、先づ其一は譜のやう一に斜走するのが適當であらうか、其他の手段としては「い」に尖むか「ろ」に斜走するか、或は「は」及「に」に打つ位であるが、先づ「い」に尖んだとすると黒は「は」に夾むであらう、白「ほ」に尖めば黒「へ」に二間拆するか

第二局 (圖一十)



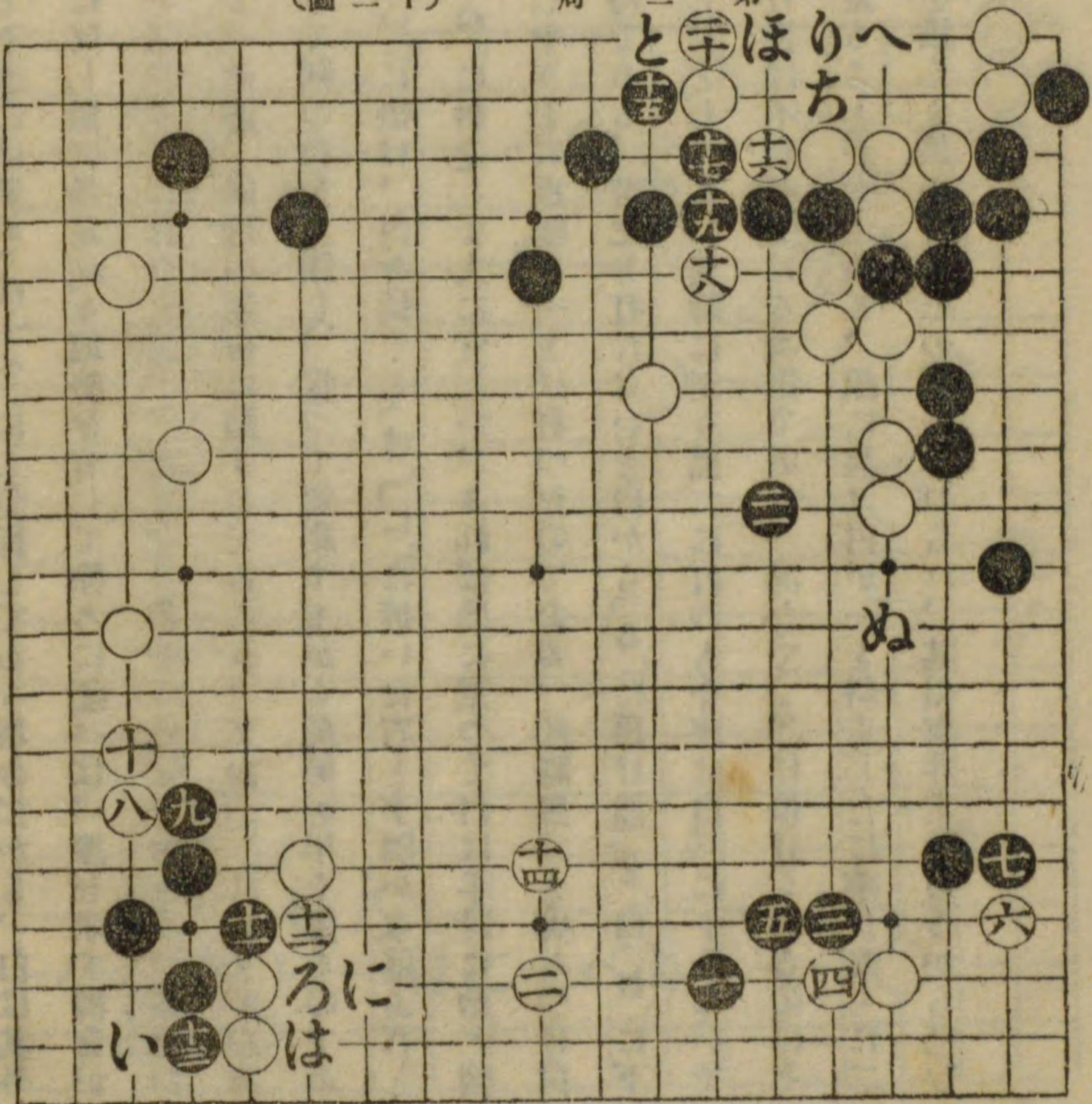
ら、白「と」に掛けて右側を低くしても下邊には黒が「は」「へ」に二間拆してある場合だから、白は其外勢を利用する效が比較的乏しく、之に反し黒は各定れる地勢を有して徐ろに運べば、迷を來す機會がなく白として面白くない布石である、又白「ろ」に打つと黒「ち」或は「り」の中に夾むであらう、其時白「い」なれば黒左方に向つて二間拆して、前述と同理の運命に歸するであらう、又白「い」に尖ます左方面から其黒に詰めると黒は「い」に掛けて隅の白を封鎖し、従つて連絡するから局勢が早く定るのである、又白「は」或は「に」に拆くと黒は「い」に掛け、白を低くし「は」「に」に拆いた石と下隅から這ふ石との布勢を重複ならしめ、轉じて黒は「ぬ」に斜走して大に宜しい、されば此に至つて白は手段に殆ど困惑する故に、其中比較的局面を廣くしやうとの意味で一とは打つたのである、此時黒二と尖みつけ白三と交換しておくのは隅を守り且打得である、若之を打たないと白から「る」に頂け黒「を」白「わ」に下る手段がある、又白單に「わ」に斜走したとしても、其時に至り黒二に打つも今度は白三に下らないで「か」に應じて差支ないから、それだけ黒は不利を受ける次第である、況して「る」に頂けられるのはそれより一層きびしいだけ尙更影響を蒙ることが大である、故に黒は白が一と斜走したに乗じ直ちに二と尖みつけておくがよい、白三の手を抜くと黒から又三の處に縛ねられ、其損害非常であるから已むを得ず三に下る外はない。

解説

第二局 (十二圖)

黒一と夾むのは最適當の要處である、其時白三に尖み出すと黒二に二間拆するから、下邊の黒は治まるばかりでなく、左方の白は勢力を削減される状勢となる、因つて已むなく常套を脱し二と打つたものである、而して黒は三と掛け隅を封鎖する運びになつたもので、七までの手順を経て白八と先着し、以下之に對し黒十三までの應答は普通である、若白八の手で「い」の方が

(圖二十) 局 第二



ら來れば黒は十に斜走して治まるがよい。

白十四の飛びは捨ておく黒から「ろ」に切りを試みられる不利がある、即ち白「は」なれば直ちに「に」に引出す手段もあるべく、或は機會をみて行び出すべく、何れにしても白は不安心といへる、又白「は」に打たず「に」に應じたなら黒直ちに二子を取らずとも即ち打得ではないか、故に白十四と飛びおく次第である。

黒十五は攻めながら己れを固める手段で、白十六以下二十までと譜のやうに運ぶのを普通とする。白十六の手で十七に行ければ黒十九に續く、其時白尙十六に一手を要する、併し圖に比して此白は少し得ではあるが、外部に十八の覗きがないから中央薄弱の程度に差異がある、序に十六の處に何故一手を要すかといふに、即ち之を手抜きすると黒二十白「ほ」黒「へ」白十六黒「と」白「ち」黒「り」で此白劫となる。

黒二一は白の弱點に痛撃を加へた強硬の手筋で心得べき事である、尤此確な碁勢では較々緩いが黒「ぬ」に斜走し、徐々に運んでも悪い道理はない、而して此手は白の應手に従つて變化を盡すの要があるから、それだけ後の打方力量が之に伴はねばいけぬ、此意を諒して進退しないと却つて不測の結果に陥る事がないとも計られぬ、深く戒心しなければならぬ次第である。

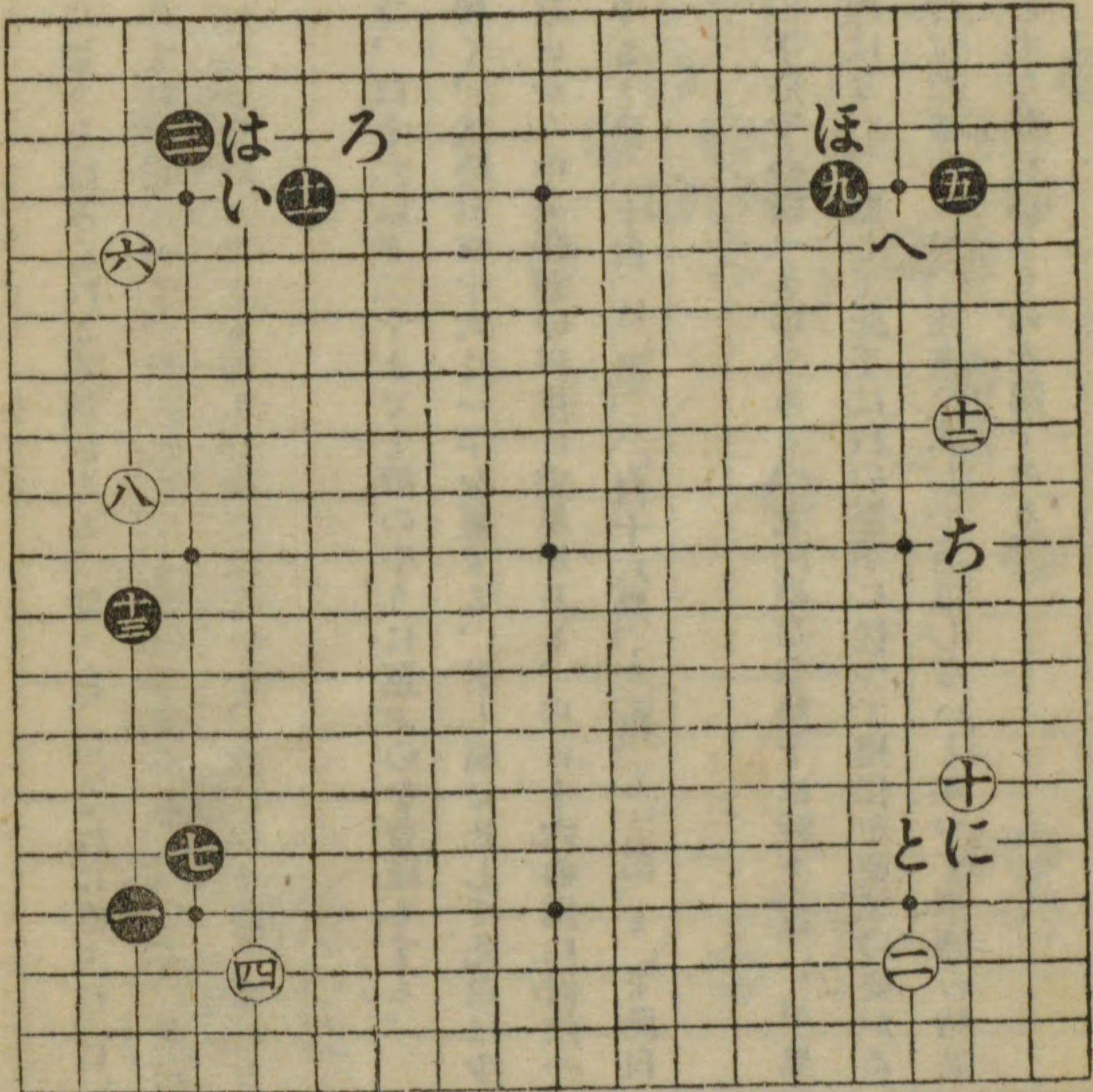
解説

第三局 (一圖)

本局初發から黒七までは前と同じである、次に白八と狭く拆くのも一つの趣向として古來から用ふるところである。

黒九と高締にしたのは是亦普通の着手で、前局のやうに白八の拆きが十三にある場合には、黒九と轉じると白から「い」若くは十一或は「ろ」など此三の黒に對して手段を廻らし、左側の廣いのを利用し種々黒を紛らす方法を講ずる事があるから、黒では

(圖一) 局三第



直ちに十一の處に控へておくのが夫等を凌ぐと同時に、敵の拆が廣いから打込の狙ひをも含んで宜しいのである、然るに此場合では白の拆が八と狭いから黒は必ずしも直ちに十一の處へ應じないでよい、即ち九に締り其時若白が「い」方面から掛けて來るも、黒は「は」に這ひ普通の應答に出て少しも差支ない、其故は白が外勢を張つても、既に打つた八が狭いから其外勢との釣合を失し、働きのある布石とはいひがたいのみならず、却つて黒に有利なものがある。

以上述べた理由を會得して他に轉じるのでなければならぬ、尙黒九と打つことは紛れ少い着點であるが、此手で「に」に懸るのも又一法である、其時白「ほ」なれば黒「へ」に尖んで打つ趣向もある。

白十の大斜走締は此場合右上隅黒の高締りに對し、最權衡を得た打方とする、尤一路控へて「に」に打つのも普通用ふるところである、又特に趣向して「と」に高締することもあるが、其時黒から「ち」に拆かれると、敵に好位地を與ふる氣味があるによつて、妄りに此場合「と」に締るは面白くない。

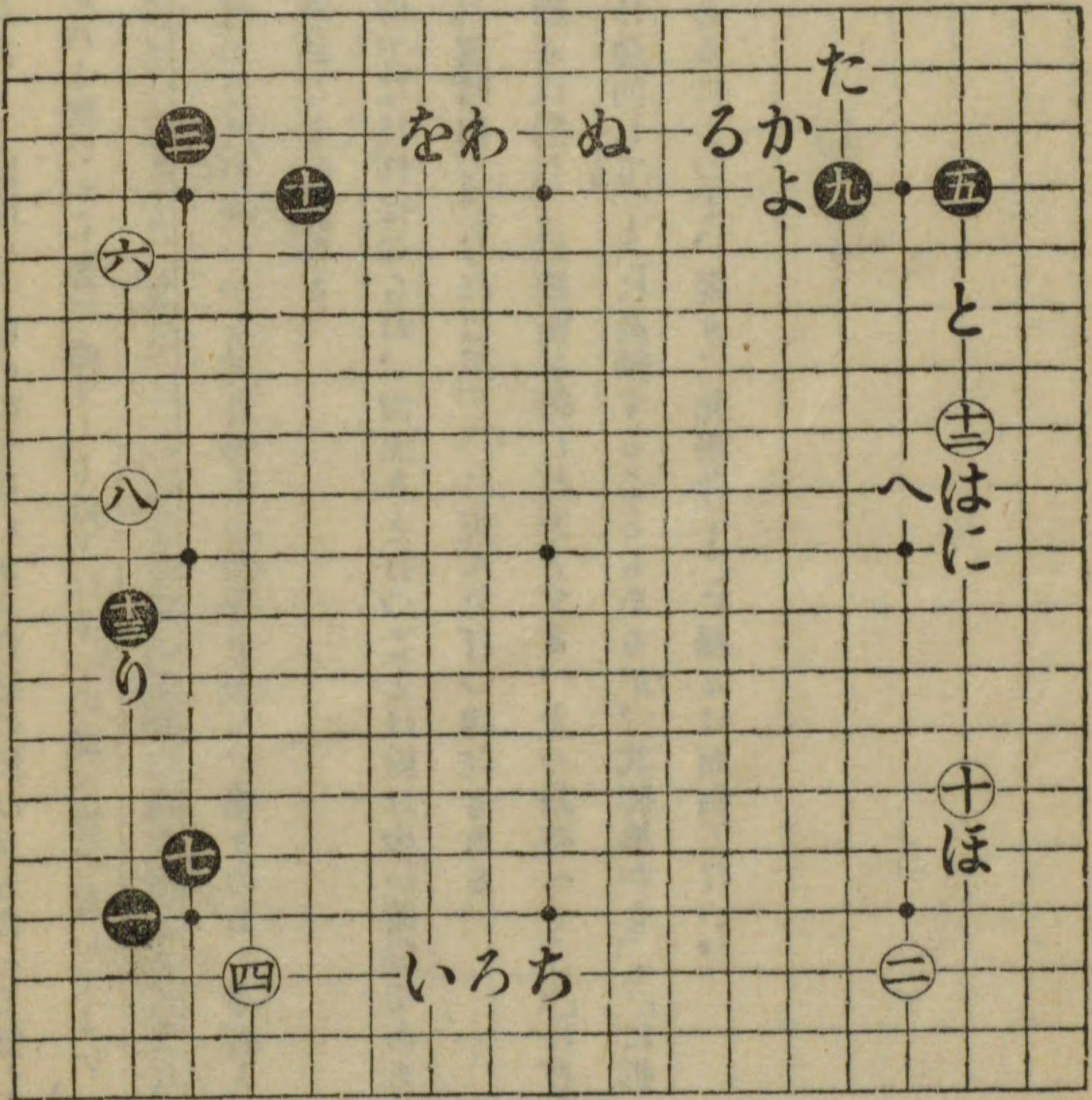
解説

第三局 (二圖)

黒十一の斜走は普通である、乍併此時黒の打方に種々ある、即ち直ちに十三に詰めるもあり、又「い」或は「ろ」の夾むもあり「は」邊に打つのもある、何れも皆相當の着點で之は各々の趣向に因つて岐れるのである。

白十二は趣向の手で、普通は上隅の高締に對して十二の處では黒から「に」に打込まれ進退不都合の事が多いけれども、此場合下隅が白十と大斜走締であるか

(圖二) 局三第



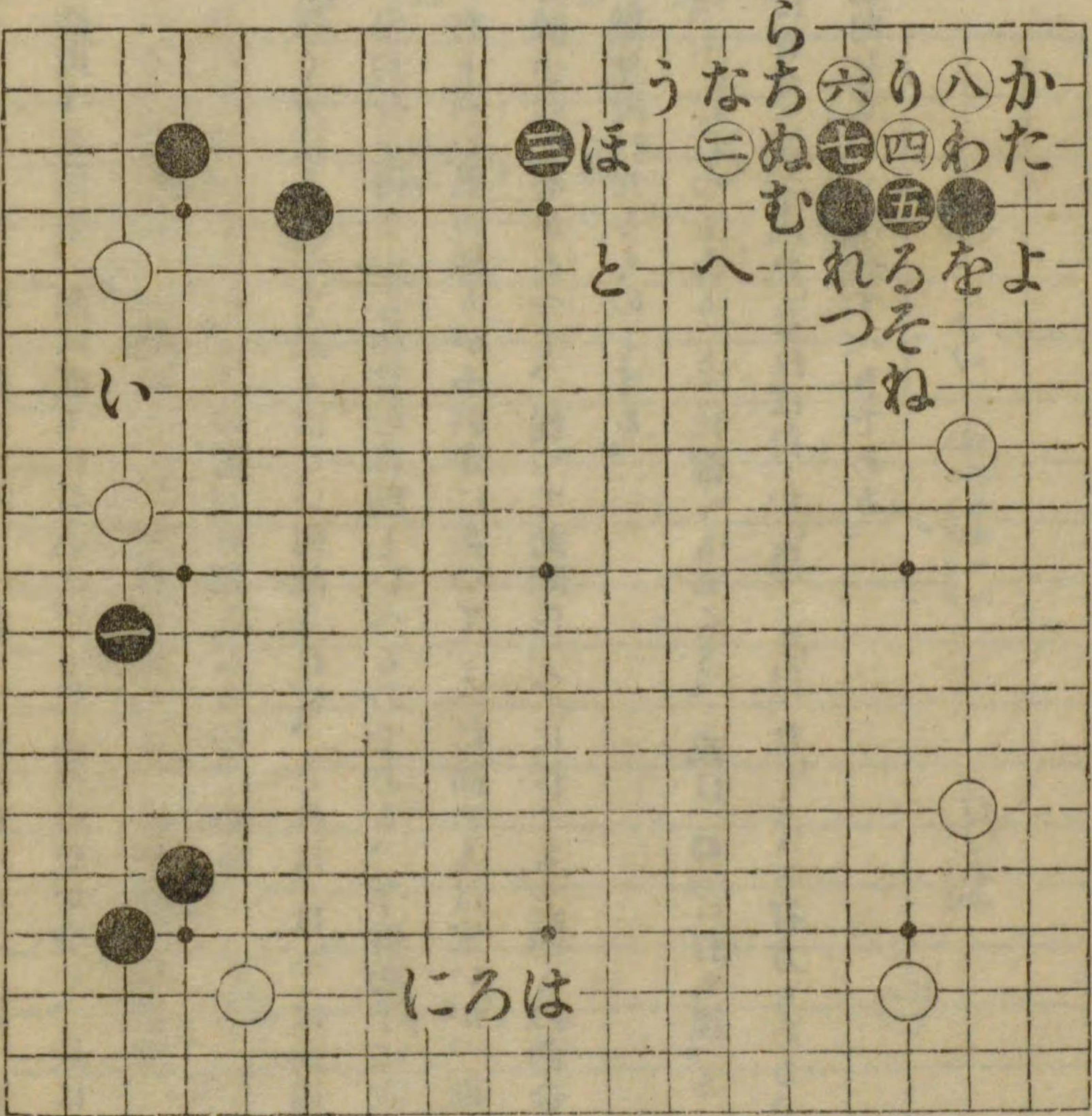
ら、黒が若「に」に打込んで其黒自身も下方に向つて拆く餘地が少く、従つて是亦白の十二と同じ運命ともなれば、互に飛び合つて中央に進出する結果、黒は直ちに打込んで思ふ程の効が少い、故に此場合白は十二に拆くのは亦一策といへる、之を若、一路控へ「は」の處へ拆くと、十の石との間狭く働きのない布石となる、されば此十が「ほ」にあつてこそ「は」の處が好點となるのである。尙此方面として白の打場は「へ」に高く拆く方法もあつて悪くはない何故なれば、それは「は」では前述のやうに不可であるが、高ければ隅々の釣合を得るから相當の着點といへるのである、乍併此手は次に「と」に運ぶ意を含んで居るから、右上隅の黒の締りが小斜走にあつて「と」に詰めるは宜いが、斯様に九と高締の時は「と」の詰めの效力減少の姿勢があつて、従つて此際白「へ」に拆くも上隅との釣合を得ないから、此場合では十二の方を幾分優れたるものとする。又白十二の手を他方面にするとすれば「ち」に打つもあり「り」に拆くもあらう、或は「ぬ」に打ち黒「る」なれば白「を」に打てばよい、又黒「る」に打たないで「わ」なれば白「か」黒「よ」白「た」とする打方もある、斯様に種々の着點があるから、能く趣向を立て、撰擇すべきである。

解説

第三局 (三圖)

黒一は最大場である、之は上隅にある斜走の黒と相應して白の三間拆の中間「い」の點へ打込まうとする素地をなしたもので、同時に地境を拓く手である、白二は下邊「ろ」に拆いても打てやう、前圖で述べた「は」の處では、此場合黒に一の控へがあるから、黒から「に」に打込まれ面白くない次第ともなうか、されば此際での着點は「ろ」の處に拆く方が穩當である、又上邊に打

第三局 (圖三)



つとして之も前圖で「ほ」に打つ事を述べたが、前と異り既に右側に拆いた石があるから「ほ」よりは敵に迫つて二と懸る方釣合を得て居る、其時黒三の詰め普通である、之を「ほ」まで詰めると白「へ」黒「と」の時白四に打込み上隅が急になつて宜しくない、されば一路控へて三と打つた所以である。白四の打込は侵略と同時に自己の根據を作る手段である。

黒五の續き通常で若、強ひて七に斷ち切ると、白六黒「ち」白「り」黒「ぬ」白五黒「る」白「を」黒「わ」白八黒「か」白「よ」黒「た」白「れ」黒「そ」白「つ」黒「ね」白「な」となり、其時黒「ら」なれば白から「む」に打たれ征の當りがあるから黒は虜となる、又「ら」の手で逃げ出せば白「ら」に盤り隅の黒は取られる結果となる、されば黒は七と斷ち切るは宜しくない、五に續く外ない、其時白六に尖む手筋は心得られたい、之を七に盤る時は黒から「む」に出られ白「ぬ」なれば黒「わ」に曲り其形が重くなつて白は宜しくない、又白「ぬ」に續く手で「わ」なれば黒「ぬ」白「ち」黒「た」に綽ね、其時白「か」なれば黒「な」に切る手がある、又白「う」なれば黒八に綽ねる、何れにしても白は形が重くなるから六と軽く尖むが善い。

黒七のアテは一應利かしておくが順序である、之を捨ておく時は白から「わ」に約へられる、夫から七にアテルも既に遅くなつて効力がない。

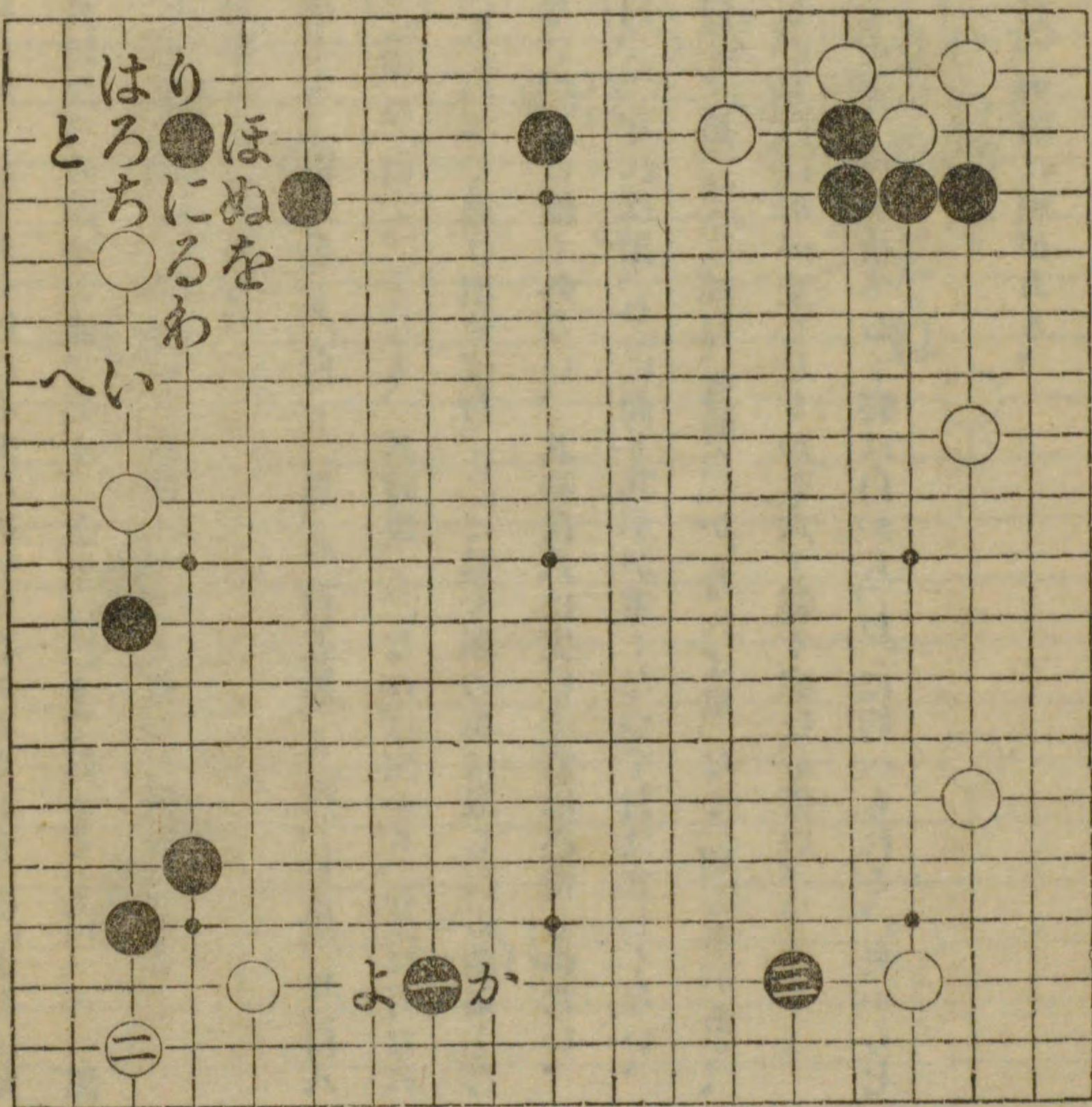
白八のカケツギは「り」に打つより斯く打つ方隅に利がある。

解説

第三局 (四圖)

黒一は最至當の着手である、右
上隅黒の根據は奪はれたに因
り、外部の黒を何とか治めなけ
れば不都合ではないかといふ
に、此處は黒の形が厚いから急
に白から攻められる虞もなく、
又黒から打つても好點を得ない
から、寧ろ手を抜くが當然であ
る、此場合局勢を通觀して黒の
打場を求めれば、「い」に打込む
か、或は下邊一の點でなければ
ならぬ。

(圖 四) 局 三 第



「い」に打込むとすれば、白から「ろ」に頂けられ黒「は」白「に」となつた時、此場合黒「ほ」に引く外なく、
其時白穩に「へ」に頂け黒の動靜を試みるか、或は其他種々の手段もあらう、要するに黒が「い」に
打込んだ上は「ほ」に引く事が打ちにくい次第で、大抵「と」に縛ね白「ほ」黒「ち」白「り」にアテ、黒粘白
「ぬ」黒「る」白「を」黒「わ」と振替つて打ちたいところであるが、黒には既に右方に拆いて置いた石があ
るから、「ほ」に引くと上邊に地域を形成するところを白から突き出され、却つて右方の石を攻め立て
られる運びを見るであらう、然れば左側に得をしてもヨリ以上の損失を受けて割合が面白くない、且
右上隅の石が未だ治まつていないから、白は之を利用して上邊の一子と絡み打つ手段に出れば、最
初黒が「い」と打込んで「と」に刎ね返すことが面白くない場合であるから、黒は暫く此打込を見合せる
方が得策であらう。

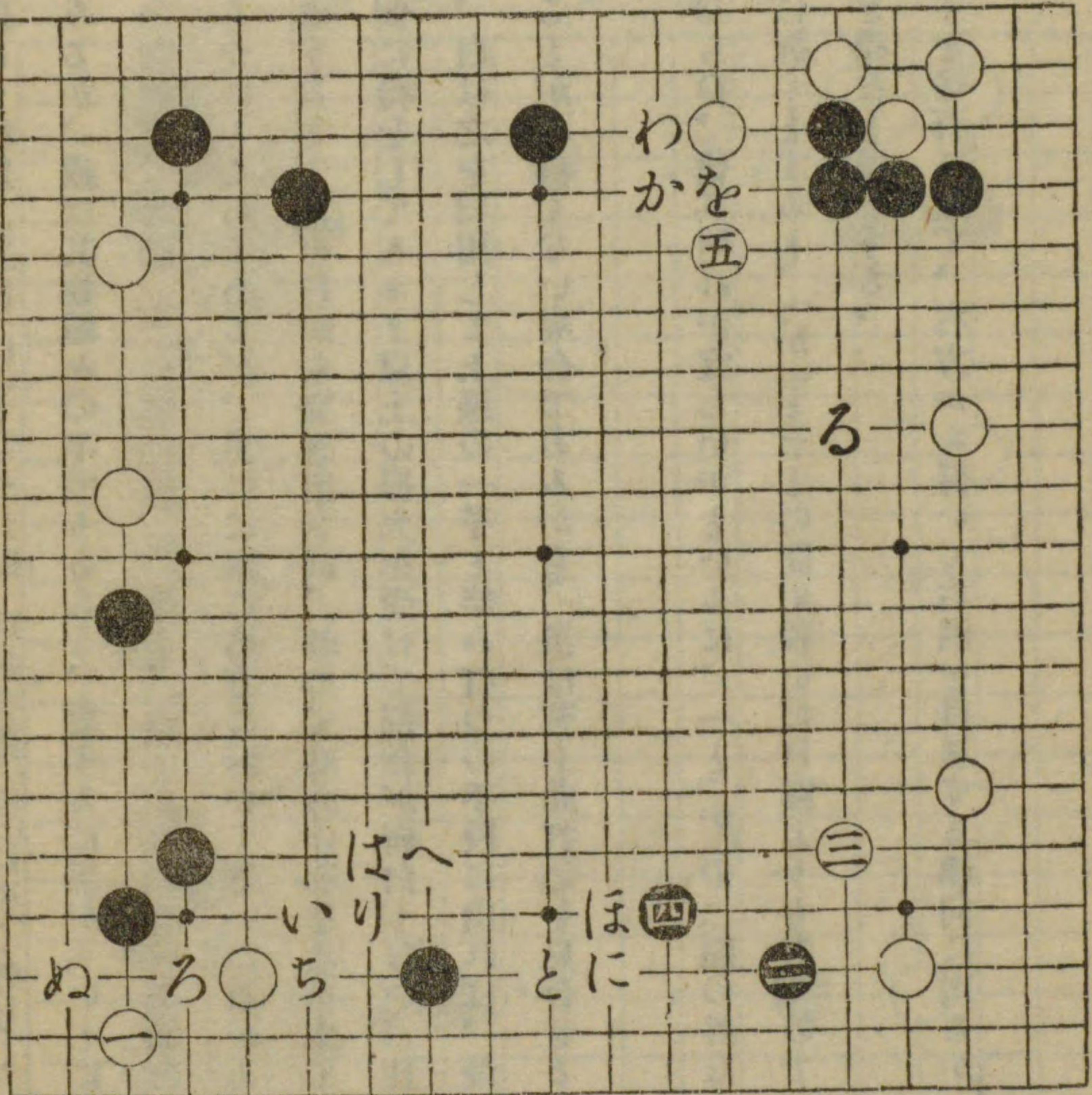
それ故、勢下邊に着點を擇まなければならぬ、偕其何れが宜しいかといふに、一と「か」の二點の外な
く、假りに「か」とし白二へ斜走し黒三に拆くとすると、「か」と三との間が狭いだけ圖よりも劣るので
ある、故に譜のやうに一の處を最權衡を得たものとする。
又「よ」の間夾にすると白は懸つた一子を捨石にして、右方から拆いて右隅を發展する趣向に出るか
ら、是亦黒は面白くない。

解説

第三局 (五圖)

白一の斜走は意味のある手で、普通は「い」に尖み出すものだが、然る時は黒「ろ」に尖みつけ白「は」に尖み黒「に」に拆きとなる打方もあり、或は黒「ろ」に打たず二へ拆き「ろ」の尖みつけを含んで打つのもある、其時白「ほ」に打つと黒「へ」に飛び、白は左右急忙の形勢となつて良くない、斯様に白は「い」に尖み出すと此場合「ろ」の尖みつけが忙しい處となつて、後の運びに

(圖五) 局三第



宜しくないものがあるから、圖のやうに一と斜走したのである、又此手で「と」或は「に」に拆けば、黒は「い」に掛けて白の一子を圍ふから、前述の間夾と異り割合は黒が良い。

黒二で「い」なれば白「ち」黒「り」白「ぬ」となるであらう、之は白が一と斜走した趣向で、白は上述のやうに進出するのも面白くない場合ゆる、軽く此隅で治り、且「ぬ」に尖む事になれば、黒の左側の地域に對して侵入の間隙を作つたもので、斯く黒が上方に拆いて地域を成して居る場合は、白一と桂馬に走る手段を用ふる事が多い、因つて黒も亦「い」に掛けないで先づ二に拆いて白の動靜を窺つたものである。

白三は此大桂馬締を完全にすると同時に、黒の下邊の間に打込まうと狙つて居る手である。黒四は敵の侵入を防禦した手である。

白五の飛びは他に急要な點も見當らないから、先づ此處から着手して黒を試みたのである、而して黒出走の機に乗じ右側を固める手段とする、此手を「る」に飛ばば黒から「を」に頂けられ白「わ」黒「か」となり連絡する、又白「わ」の手で「か」なれば黒「わ」に切り返へして是亦白は好果がない。

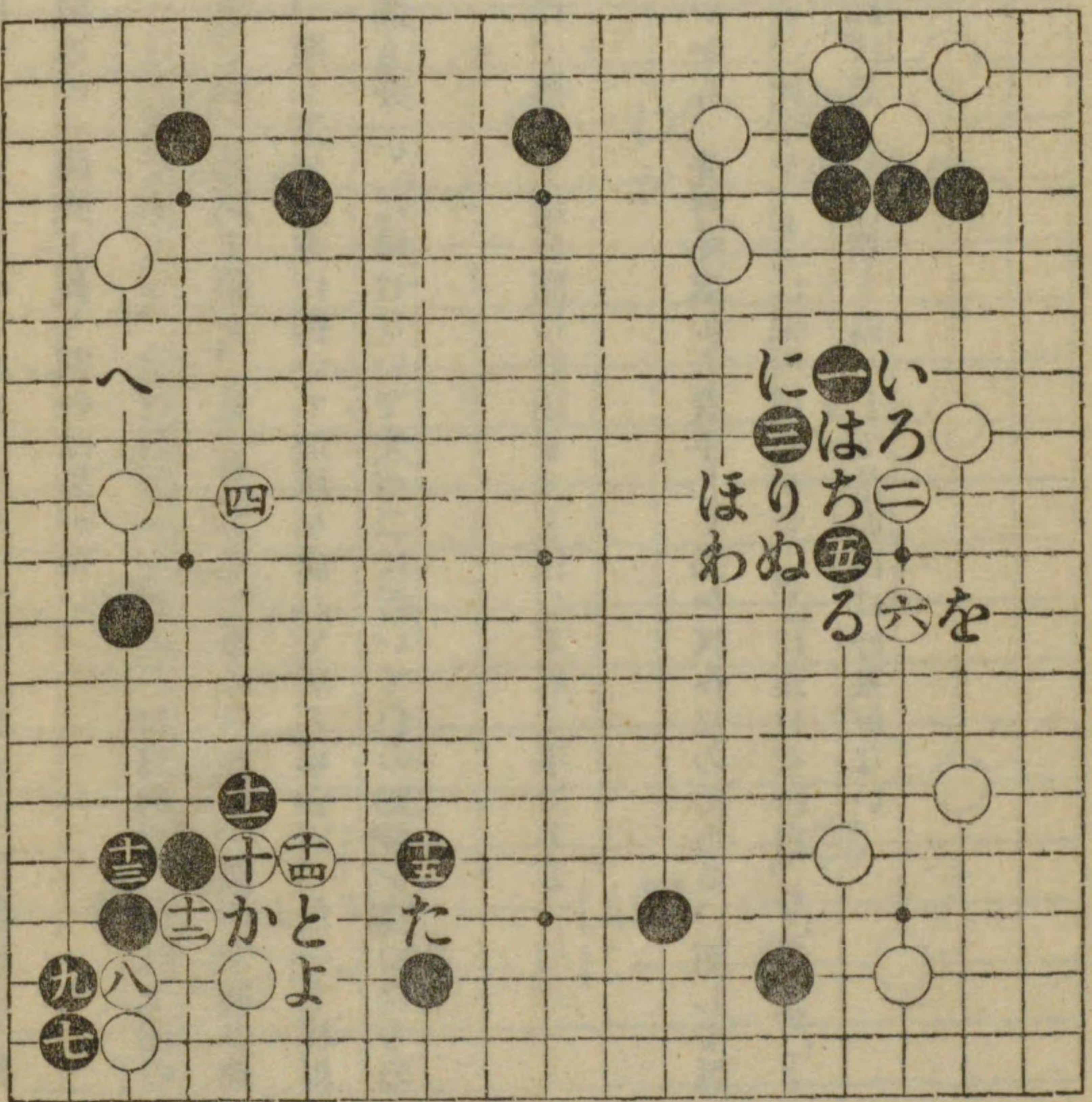
解説

第三局 (六圖)

黒一は出動の適處であつて、次に二に掛けて白を低くしやうとする意を含んでゐる、若、此手を「い」に打つと白から「ろ」に押され、黒一白「は」黒「に」白「ほ」と運ばれ圖より悪くなるは明瞭であらう。

白二は黒から此處に掛けられては右側の位が低くなつて悪いから、之を凌ぐと同時に尙三の處に掛けて此黒を攻めやうとする氣勢を示してゐる。

第三局 (圖六)



黒三は白から此處に煽られては窮屈を感じるから之を防いでおいたのである。

白四の一間飛は前圖で説示した「へ」の打込を凌ぎ、一方には黒から「と」に掛けられても中央に大模様が出來ないやう豫め備へたものである。

黒五の掛けはこの一聯の黒を發展し且白の位を低くしたものである。

白六は當然の應手で、若、之を「ち」に出黒「り」白「ぬ」に切ると黒から「る」に行びられ、其時白「を」なれば黒「わ」に掛けて白の「ぬ」の一子を征に取られる、又白「を」に受けしないで「わ」なれば、黒「を」に飛び込み、其結果は白が悪い故に白「ち」に出切るのは無謀である。

黒七の頂けは此時黒「と」に掛けて外勢を張つても、既に白に四の飛びがあるから黒は封鎖しても其好果は少い、因つて此場合黒は七からツケて實利を收めながら、此白を追ひ立てた方が策の得たものである。白八黒九共に當然で言ふところはない、白十の頂けは此處に眼形を作らうとする打方で、黒十一の手で若「か」に刎込むと白「と」黒十二白「よ」黒十四なれば白「た」に頂けて打つから、此白容易に治まるこゝが出来る。

白十二のアテは順序で眼形を作る手である、若、單に十四に行びると黒から十二へ打たれて眼形を失ふ虞がある。

黒十五は尙此白を攻めながら發展の策である。

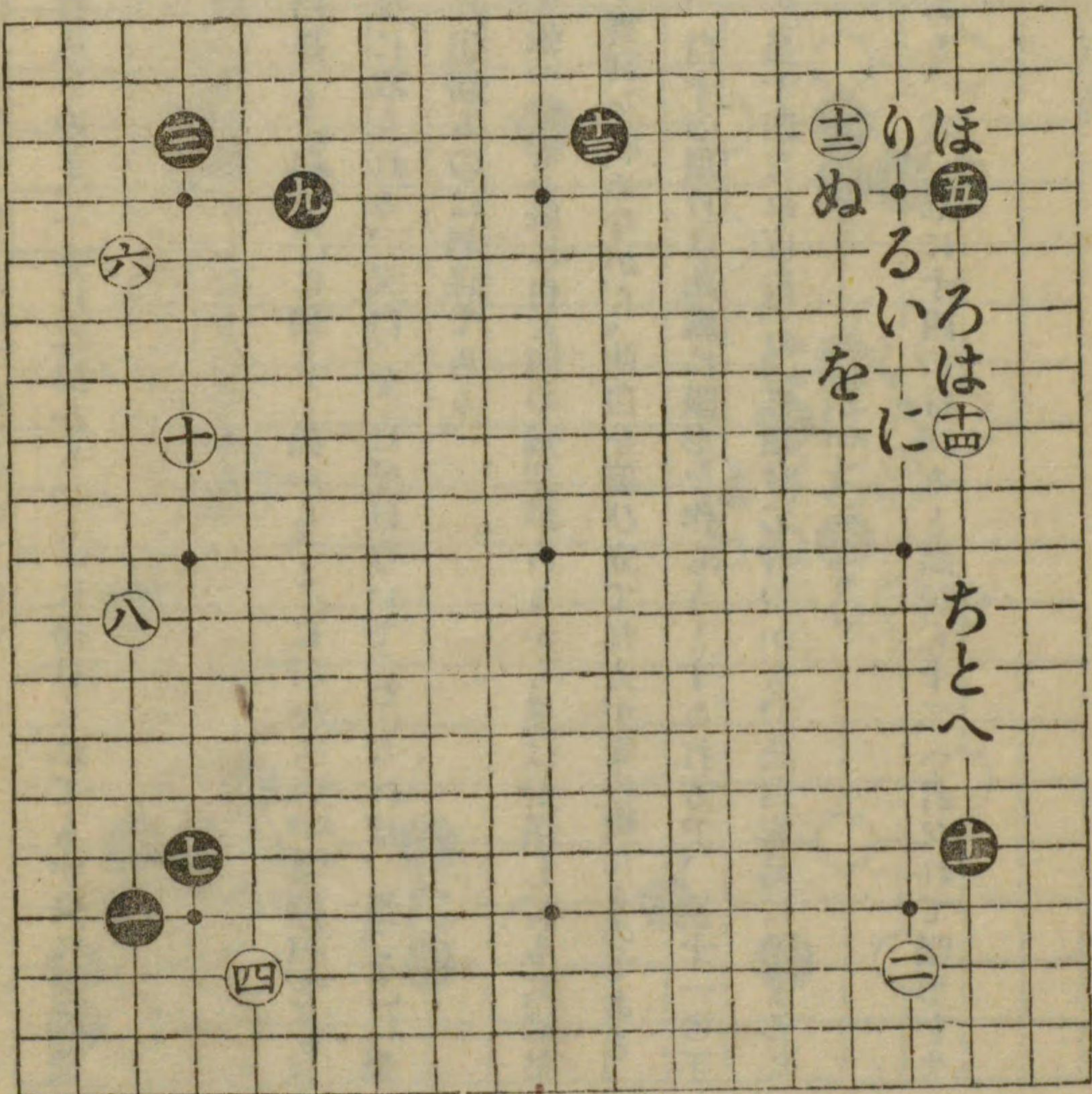
解説

第四局 (一圖)

黒一から十三までは既に述べたところであるから略す。

白十四の手は一つの趣向で、此際に於ける白の着手は晝策の第一歩であるから、最慎重熟慮を要する場合である、而して白の手段としては多々あるが、其一、二を例すと「い」の掛け(前出)「ろ」「は」の夾返或は「に」「ほ」もあり又は「へ」と「ち」と十一の黒を夾むもあり、其應接は何れも既説の通りである。

(圖一) 局四第



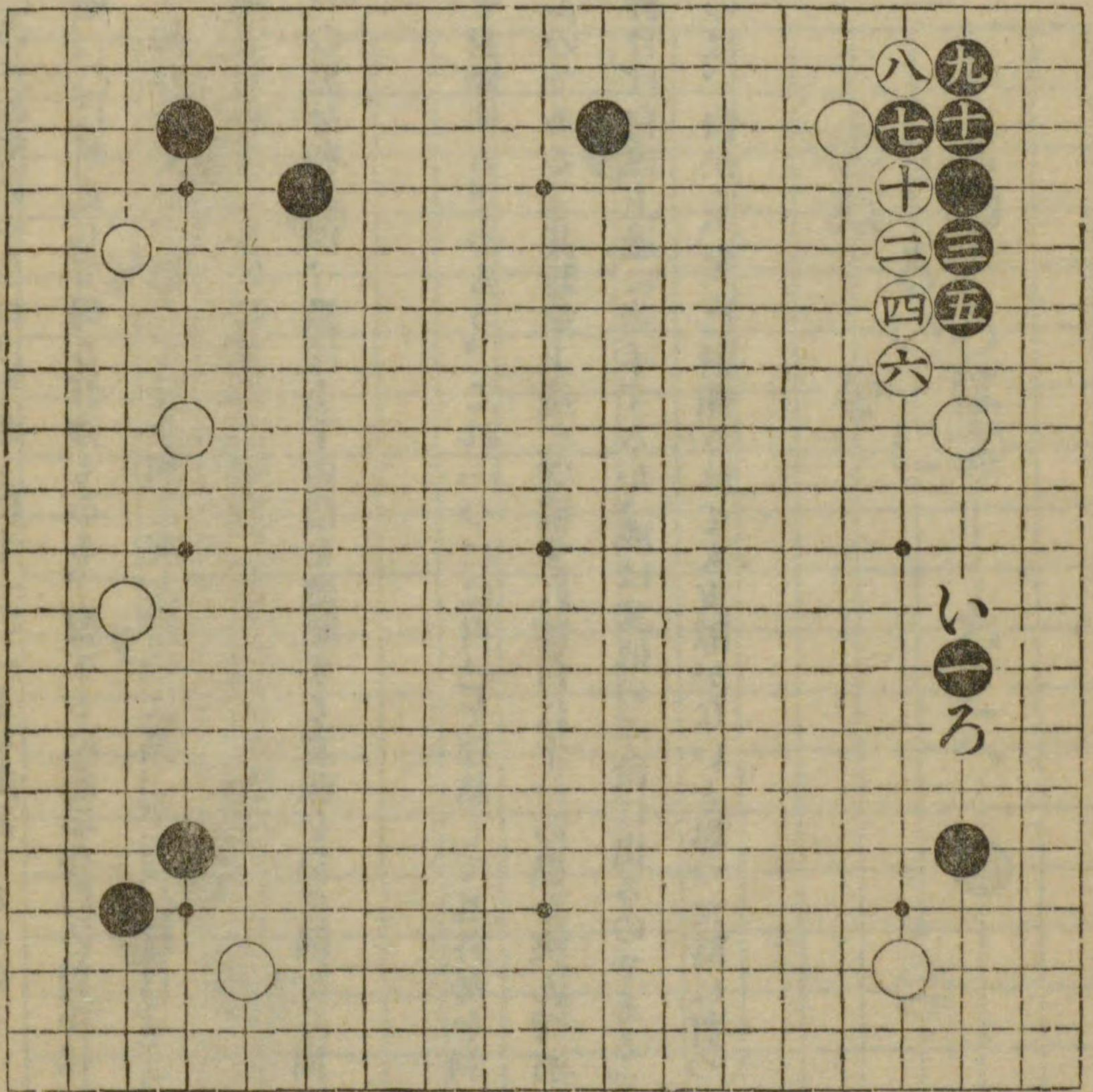
其中白此隅に着手しないで「へ」と「ち」の三個所の中なれば黒直ちに十一の一子を處置するもあり、又は轉じて「り」に尖みつけ白「ぬ」の時黒「い」に斜走して煽る打方もある、要するに此場合白の着手は今後の局勢に至大の關係を生ずるものと知つてよい、而して此十四と夾んだのは黒「る」なれば白「ち」に拆かうとの趣向である、又黒「る」に尖まないで「り」に尖みつけ白「ぬ」に立つた時黒「ろ」の處に一間飛びして打つ手段もある、其時白十一の黒を夾めば、黒は上下の白を遮斷する意味を以て隅から出動する打方に出るから白は面白くない。因つて白は下方に夾まないで「を」に黒を封鎖するであらう、これ一つには自己を連絡して其外勢を利用し遠く上邊の黒の間隙に打込みを狙ふのである、其時黒上邊に守備すれば白は十一の黒を夾んで打つのである、又黒上邊を措いて「と」に拆けば白は上邊に着手するか、或は其他の手段に出るのである。要するに黒「り」に尖みつけ「ろ」に飛ぶのは、白から「を」に封鎖されても支障がないと思つた時に打つものである。

解説

第四局 (二圖)

黒一の二間拆きは通常の手ではない、それは白から二に掛けられて此隅を封鎖されるのは悪いから普通好んで打つものではない、然し此場合では黒二の處に尖むと白「い」に拆くのは觀易い趣向であるから、黒は之を挫かうと斯く一と打つて右上隅を封鎖されても其外勢を餘り利用させぬ手段で、斯様な時には打つこともあるものである、而して黒一の拆きを一路進んで「い」に

第四局 (二圖)



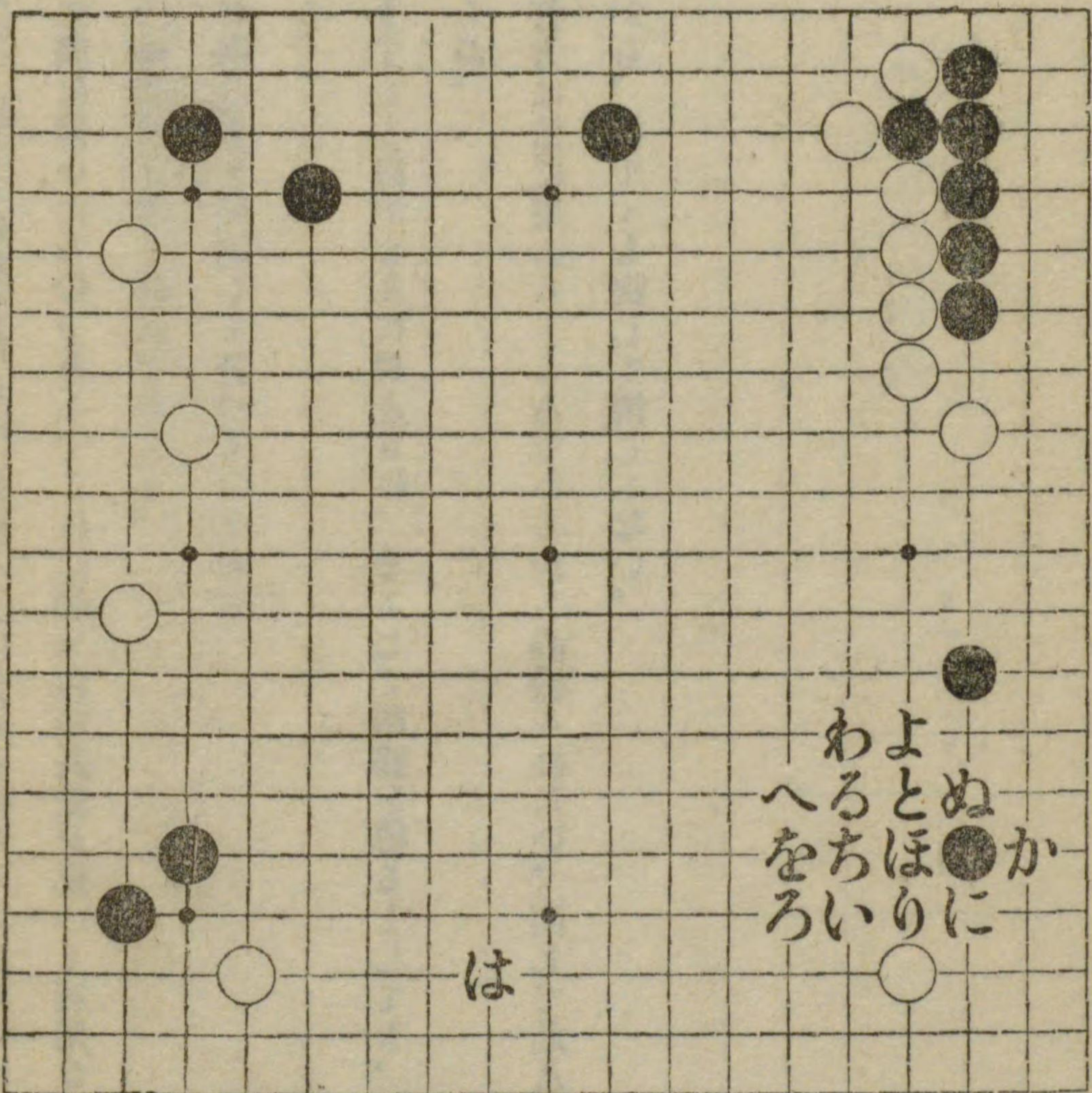
打つのは普通であるが、そうすると白から二以下と外勢を作られ、其後「ろ」に打込まれる手段が残るにより、是等を考慮して圖のやうに堅く二間に拆いたものである、これは即ち白の長壁を成べく利用されない打方とする以上、此一と打つ事の趣向は了解されたであらう。
備黒一と拆いたに對し白は無論二にかけ隅の黒を壓迫して打つものである。
黒三から白六まで双方至當の打方とする。
黒七は守りに必要の手である之を手抜きすると白から九に斜走され、辛ふじて活路を得るとしても、其損害少くないから斯様に備へねばならぬ。
白八、十は先手を取る手段で、斯かる打方は常に用ふるところであるから心得られたい、而して此八の一子は既に其働きを了つた石であるから、捨て、も決して惜しくない。

解説

第四局 (三圖)

本譜此場合に於て白の第一着手を下すのは甚打ちにくい形勢である、即ち「い」に尖むも或は「ろ」に斜走するも右側の黒は二間拆きになつて居るから餘りに響きを與へない、又「は」邊に拆くも是亦黒に直接影響しない、又「に」に尖みつけ黒「ほ」の時白「い」に尖めば黒「へ」に斜走して其運びは黒の分り易い局勢とならう、或は白轉じて上邊に打込を狙ふのもあるが、今此下

(圖三) 局四第



邊の場合を措いて直ちに打つことは其機會を得たものであらうか疑問である、是に至つて白は常套を脱し一の手を以て「ほ」に頂ける一手段がある、之は黒の狭いのを却つて利用し其都合に因つては此黒を凝らして、而して自己は隅を定めながら打たうとする趣向で、即ち黒の動靜を試みる機宜に適した着點である。

其時黒「と」に應じたら白「に」に約へ、黒「ち」に緯ね白「り」に粘ぎ黒「ぬ」に續くと白「る」を切り、此處に戦を開くもので、其形を見ると白は一隅を領有したに拘らず、黒は拆いた一子が堅い處に接近し其働きが甚鈍い、且白「る」に切つたのは黒が「を」に出れば白「わ」に行び此處に左右兩斷の姿勢となつて、其結果白の上隅に築いた長壁は必ずや利用の機があるべく、若、そういふ時は黒のためとらない形勢といへる。

又黒「を」に行び出ないで「ち」の一子を捨てるすると下邊の白地割合に廣く、之に反し黒は數子を費やした程の利得を收めることが出来ない形勢である。

又黒「ぬ」に續く手を以て「か」に下れば白「る」黒「よ」白「を」の掛けとなり、是亦黒の方割合が面白くない。

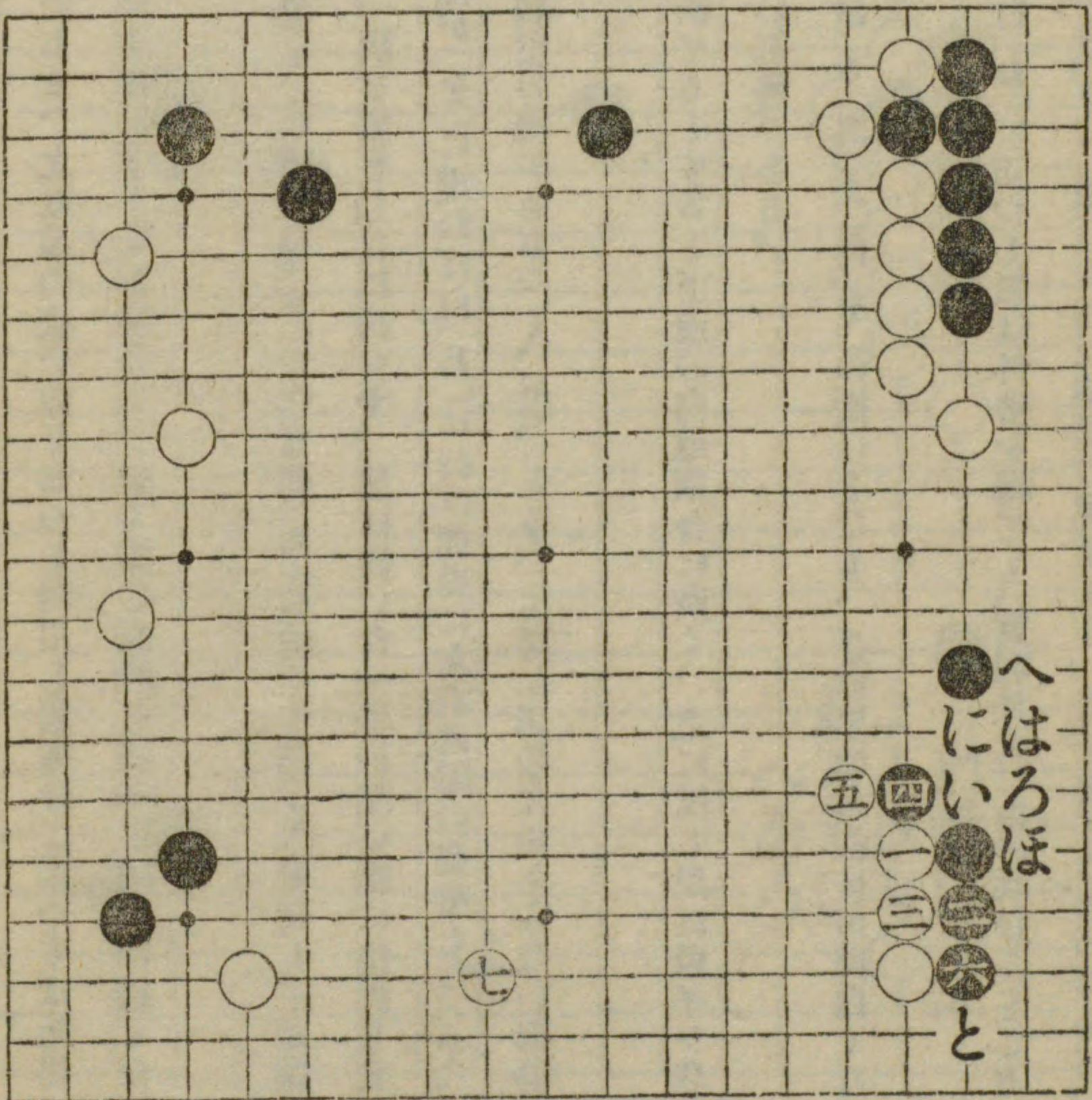
又黒「か」にも下らないで「る」に續けば白「ぬ」に切つて黒は外勢を得ても、實利は大に白の收むるところとなつて、之を償ふに足らぬ、故に白から「ほ」に頂けられた時黒の應手も亦一考を要するものである。

解説

第四局 (四圖)

前圖で述べたやうに、此場合白一と頂けたのに對し黒二と隅に行びるのは即ち白の趣向を挫く打方で、白三の續きは當然な手である、其時黒四の縛ねは是亦意味のある手で、若、之を單に六へ打つと白から「い」に縛ねられ、黒「ろ」なれば白「は」に二段縛をする、黒「に」に切り白四に粘き、其時黒「ほ」に續かねばならぬ、而して白は七の大場を占めて打つ事になるから黒は割合

(圖 四) 局 四 第



が面白くない、其故は右側の黒地は薄く、且「は」の處に一子の切りあるのは之から中央の經營に害ある事少くない、白は之に反し數子連行の堅壁と相應じて、七の拆きが恰好の位地にあつて布勢機を得たものである。

其中黒「ほ」の手で「へ」なれば白から「と」に縛ねられる損があるから逆でも打てぬ。

以上のやうな次第であるから黒は四に縛ねたもので、其時白五と受けるは亦當然である、若之を六へ打つと黒から五に行びられ、下邊の白が其位低くなるから宜しくない、此故に白は五と應じたものである。

其時黒六の約へ亦當然で、白から此處を打たれると右側の黒は直ちに影響を蒙る要處である、之に反し圖のやうに黒から打てば地域が廣くなるばかりでなく、白がダメヅマリの姿勢となるから其必要な事は益々明かである。

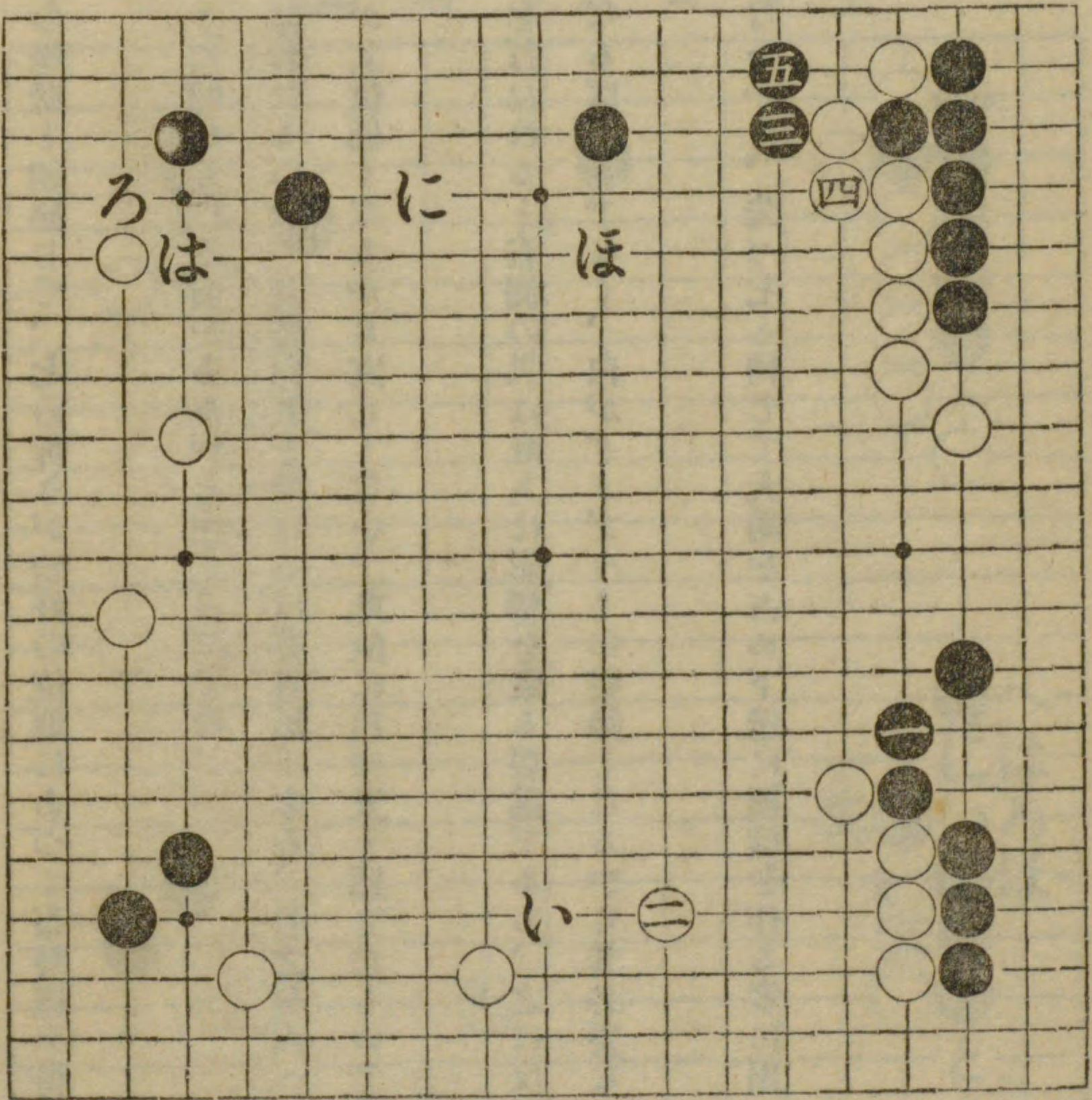
此時白右側に向つて直ちに施す趣向がないから、先づ七と轉じて大場を占め下邊に模様を作る策に出たのは至當の打方である。

解説

第四局 (五圖)

黒一の行びは此處を捨て、おいても白から直ちに手段を施される虞はないが、所謂厚い手で斯く打つておけば次に下邊の白へ打込むに就て非常の利便となる、若、之を他へ打つとすれば三に頂ける位であらう、そうすると白四に續き黒五に下り、其時白は下邊を益々擴張する策に出で形勢廣くなる嫌がある、或は黒三に打たないで直ちに下邊に打着する手段がないではない

(圖 五) 局 四 第



が、終には白から此缺點を狙はれる事になり易い故、黒としては自己を固め徐ろに機會を待つのを着實の打方とする。

白二の圍ひは既に黒が一と打つた以上は此邊を守備しなければ、今度こそ黒から「い」などに打たれると、右隅がダメヅマリとなつてをる場合だから其捌きに甚困るであらう、而して白二の着點は頗る當を得た打場である。

黒三と頂け白に四へ續かせ、而して黒五に下る手段は面白い、これは白に迫つて恐威し、且つ一方には自己の領域を廣め、しかのみならず爲に自然と上邊へ白から打込まれやうとする手段を豫防した策である。

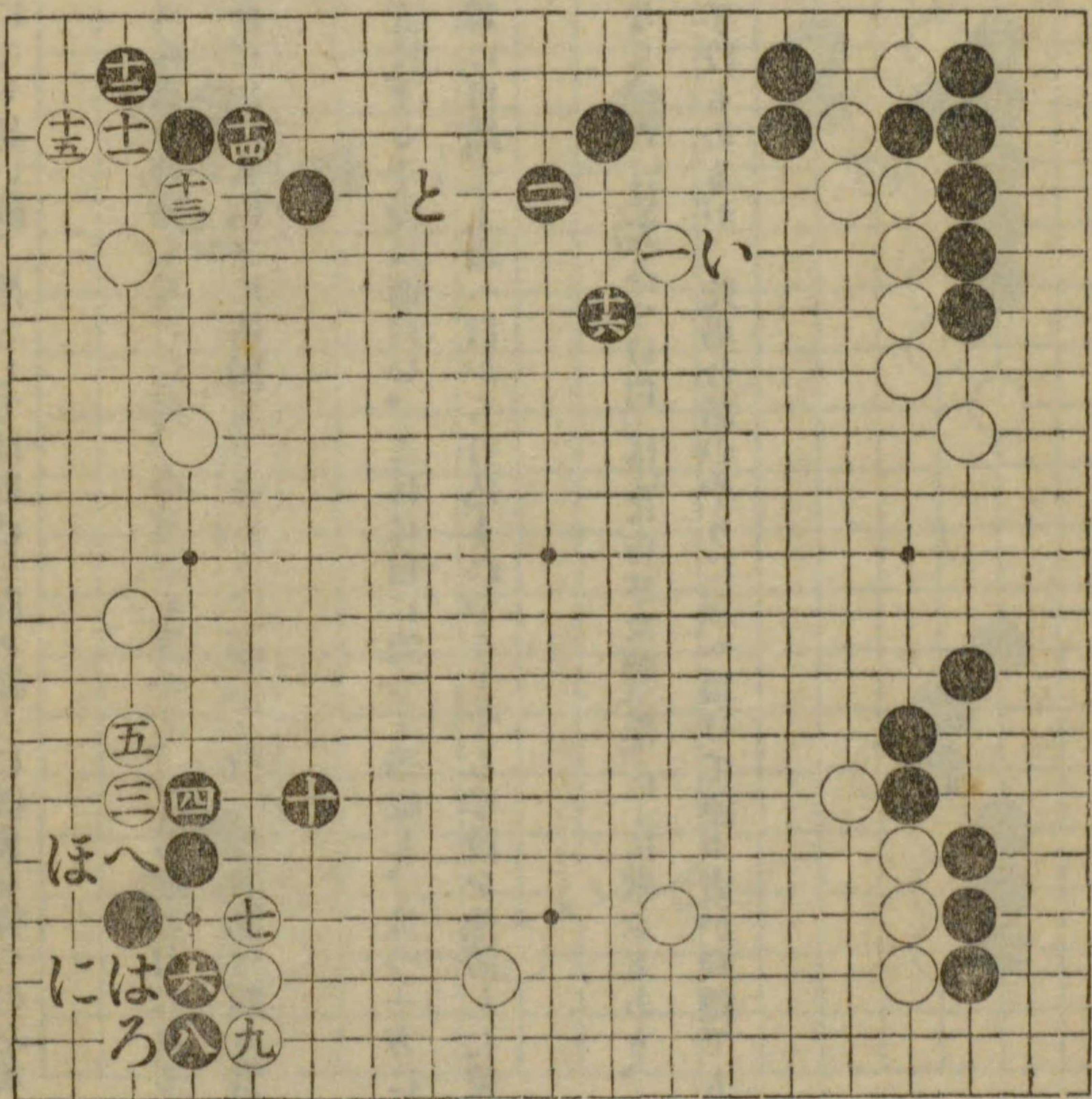
此黒三の手で單に上邊を守らうとするなら、「ろ」に尖みつけ白「は」に行びた時、黒「に」に飛ぶもあり、或は「ろ」に尖みつけないで「ほ」に打つ手段もあるが、此場合譜のやうに三へ頂けて運ぶ方が利益でもあり、且調子も大に善い。

解説

第四局 (六圖)

白一は此一隊の白を凌ぎながら
 發展する手である、然し之は前
 述のやうに黒から頂けられたの
 で無據打つたもので、黒から二
 と守られては上邊を益々固めさ
 せて面白くないが、蓋し已む
 を得ないものがある、之を捨て
 、おくと黒から「い」に斜走され
 益々白は薄弱となるに反し、黒
 の上邊は愈々發展する次第とな
 るからである。
 黒二は必要の受手で若白から此

(圖六) 局四第



處に打たれると位が低くなつて甚悪い。

白三の詰めは普通で此處は圖のやうに六までとなるか、或は白三の手で「ろ」からするものもある、其時
 黒は五に詰めて治まれば、其上下何れからするも此處は治め得る手順で割合も相當である、又白には
 「ろ」に打つ手で「は」に頂ける手段がある、黒「に」白「ろ」黒「ほ」となる、又白「ろ」に下らず、八なれ
 ば黒「ろ」白六黒「ほ」に打つて宜しい、此「ほ」に打つ事は心得られたい、若、此手を五の處に斜走する
 と白から「ほ」の急所を衝かれて根據を破られる虞がある。

楮白は何故上方の三から詰めたかといふに、下邊に自己の模様があるから黒に六へ尖みつけさせ、而
 して白七に行びる方針は下邊を厚壯にする利益がある、之に反し若三の手で「ろ」からすると黒から五
 に拆かれ下邊の領域薄弱の感がある、即ち黒から打込まれるとか其他不利な點が多い。
 黒八は場合に因り「へ」に打つこともある。

黒十は左隅未だ完全でないから進路を作り備へながら中腹白の模様を消すのである。
 白十一以下十五までの打方は實益を収めたもので、此場合他に好點がないから斯うして黒の動靜を窺
 つたものである。

黒十六の斜走は良い右隅の白を壓する意氣と一つには「と」の打込を防ぐの意味を寓して居る。

解説

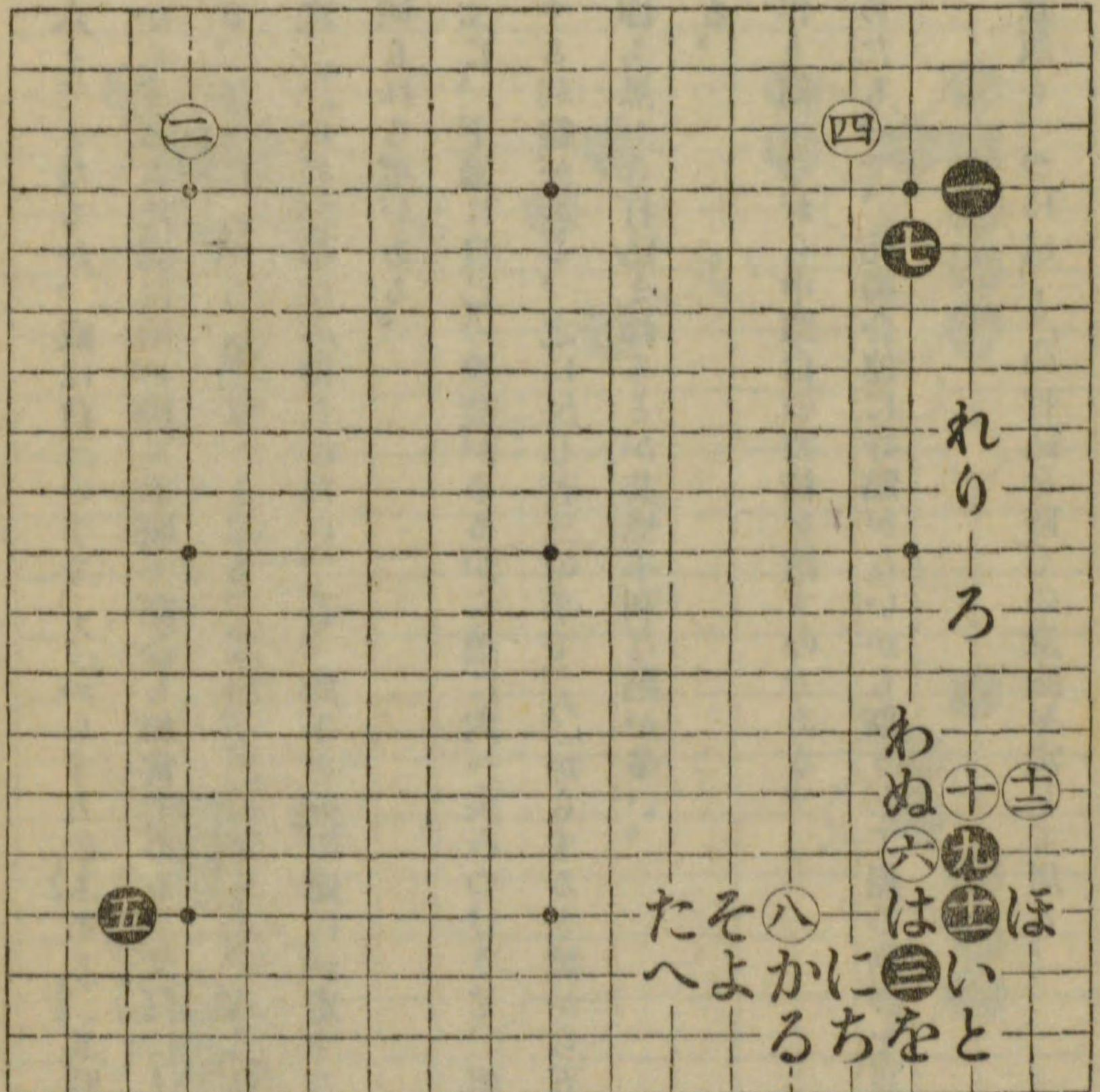
第五局 (一圖)

黒一から五までは既説した一、三、五の石立で、今度は其打出の一角が右上隅から始つて位置の面目が變つて居るが、是等は少しく慣るれば自ら判明する、實際其理合は同一で些の差異がないものである。

白六と一間高懸りしたのは一つの手段で、是迄は九の處に懸り黒七に尖んだものだが、今度は變化に出たのである。

此時黒七と前同様尖んだのは、

(圖一) 局五第



此場合でも紛れの少ない良手とする、尤も此手で九に頂けて白十黒十一と打つ普通の應答も亦仔細はない。

白八の掛け通常の定石である、此手で若「い」に頂ければ黒「ろ」白「は」黒「に」白「ほ」黒「へ」となる變化に出ることが多い、其故は一と七との備へがあつて「ろ」と拆く間合が黒としては働きのある配置であるから此趣向に出るのである、それを黒「ろ」に打たないで「と」なれば白十一黒「ち」の時白「り」などに廣く拆く手段に出るであらう、然る時は前に反し右上隅の黒の備へが幾分其働きを鈍くする嫌がある、些細のことのやうでも布石上忽にしてはならぬ。

黒九と頂けたのは此形で最も普通の打方である。白十、黒十一共に當然である。

白十二の下りは一手段で通常は「ぬ」に續き黒「る」なれば白「り」方面に展開し、又黒「る」に打たないで「り」なれば白「ち」黒「を」となつて白他に轉じるのである、又白「ぬ」に續かないで「わ」にカケツギ、黒「か」白「よ」黒「る」白「は」黒「い」白「た」の時黒「り」に打つか或は白「は」にアテないで、單に「り」或は「れ」なれば黒「そ」に切る變化もある。

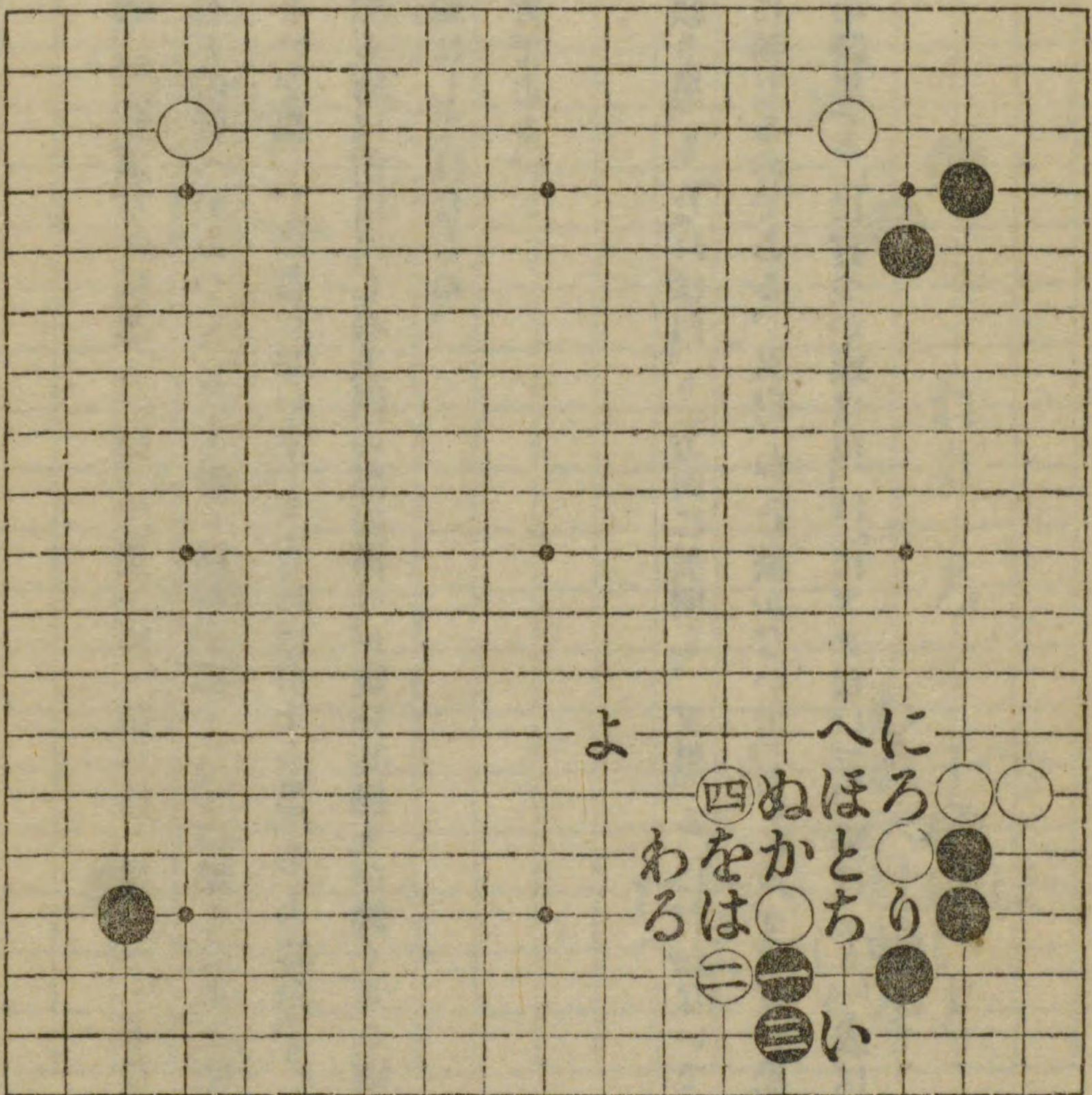
解説

第五局 (二圖)

黒一と頂け白二に約へ黒三と下るのは此隅を保護する打方で、同時に外部の白に切點を作り之を狙ふ意味を含んでゐる、若し此一の手を抜くと白から「い」に打たれて此隅甚だ窮屈になり、白の下つた手は益々其働きをすする事になるから、黒としては此場合に手抜きするのは宜しくない。尤も一の手で單に三へ斜走する打方もある。

白四の守備は軽い手筋で心得べ

(圖二) 局五第



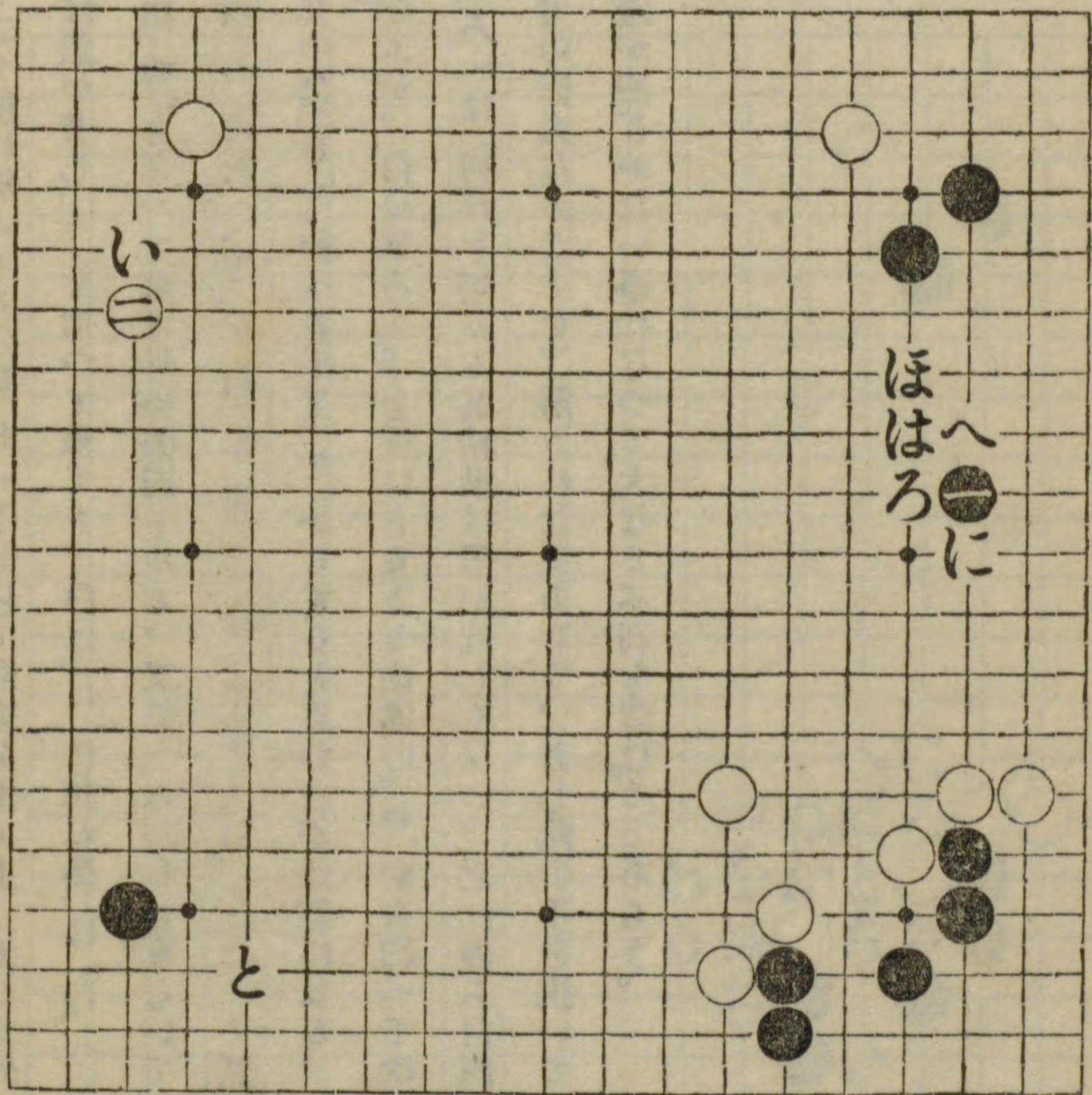
きことである、即ち此處に「ろ」と「は」の二ヶ所に疵のあるのを、此一手を以て双方を補ふ上、兼ねて外勢を張る手段である、斯く打つておけば黒が若し「ろ」を切つて來ても、白は「に」に縛ね黒「ほ」白「へ」黒「と」白「ち」黒「り」に一子提つた時、白「ぬ」となつて愈々外勢強固となる、又黒「ろ」を切らないで「は」の方から切つたらば白「る」黒「を」白「わ」に約へ、黒「か」白「ぬ」黒「ち」に一子提り、白「と」にアテ黒三目粘白「よ」に斜走して大に宜しい、其中白「わ」に約へる手で「か」からすると黒の二子は征になる、これは征の當りの有無に因つて打方が違ふが、白は寧ろ二子を征にとるより前述の「わ」から約へて塗る方が面白い、斯様な次第であるから「ろ」「は」何れを切るも其結果は黒が宜しくない、之れ即ち白四の手筋なるが爲めで此に至つて其の效力の偉大なることを了解されたであらう、若し此の手を抜いて黒から「ろ」に切られては、それこそ此邊が凌ぎがたい事になつて大なる不利を蒙むるであらう。

解説

第五局 (三圖)

黒一は此場合で最適切な急場である、普通は「い」と左上隅に懸るなどを大場とするけれど、此際は白右下隅に外勢を張つて居る時であるから、黒としては是非此右側に着手せねばならぬ、若し之を怠ると白から一或は「ろ」「は」などに拆かれると、此處に大模様が現出して黒の不利であることは明白である。俎此右側に拆くとして黒は一の處が最適とする、其故は一路

第五局 (三圖)



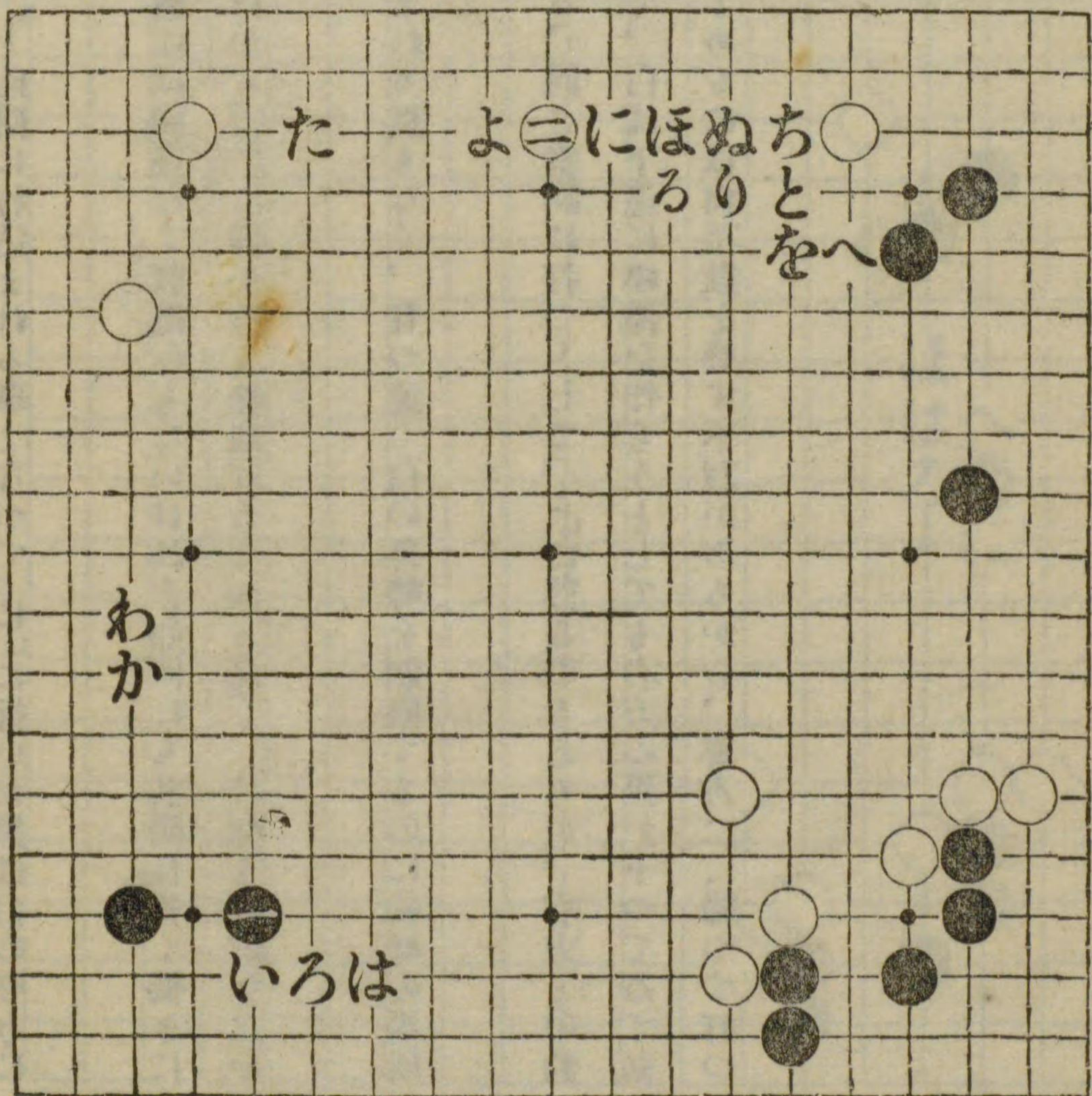
廣く「に」まで進むと白から「ろ」或は「ほ」と此間に打込まれる事となつて「に」に拆いた黒は白の堅きに向ふ形勢となる不利がある。又黒「に」でなく「へ」に拆くとそれは堅實には相違なく打込みもないけれど如何にも其間合狭く働きに乏しいものである其上かく打つても尙白から「に」に拆かれる餘地があるから此「へ」の處も適當とはいひがたい。圖のやうに一と打てば急に白から打込まれる虞もなく、且つ遠く白の外勢を制限するのに恰好の場所で釣合を得たものである。白二の締りは此場合最も善い着點である、同じ空隅に打つとして「と」に懸るのもあるが、右方との釣合上「と」に懸るも黒から「い」に懸られて、白は下邊に模様を作らうとしても右方の黒が下つてゐて裾明きとなつて居るから従つて下邊をまとめるには尙手数に費す不利があるから、寧ろ二に締つて打つが白としては宜しい。

解説

第五局 (四圖)

黒一は既に白が上隅を締つた上は他に是程の着点がないから一と締るのは普通である、尤も此締方に就いては「い」或は「ろ」もあるが、右方との權衡上斯く高締にするが宜しい、それは假りに白が「は」方面から懸ることがあつても、右方の裾明があるから白は此邊を模様とすることが出来ない、且つ黒は「い」「ろ」では其締が低く中央との布勢を保つ上からするも、且つ裾明方面

(圖 四) 局 五 第



に向つて低く打つことは策の得たものでない。

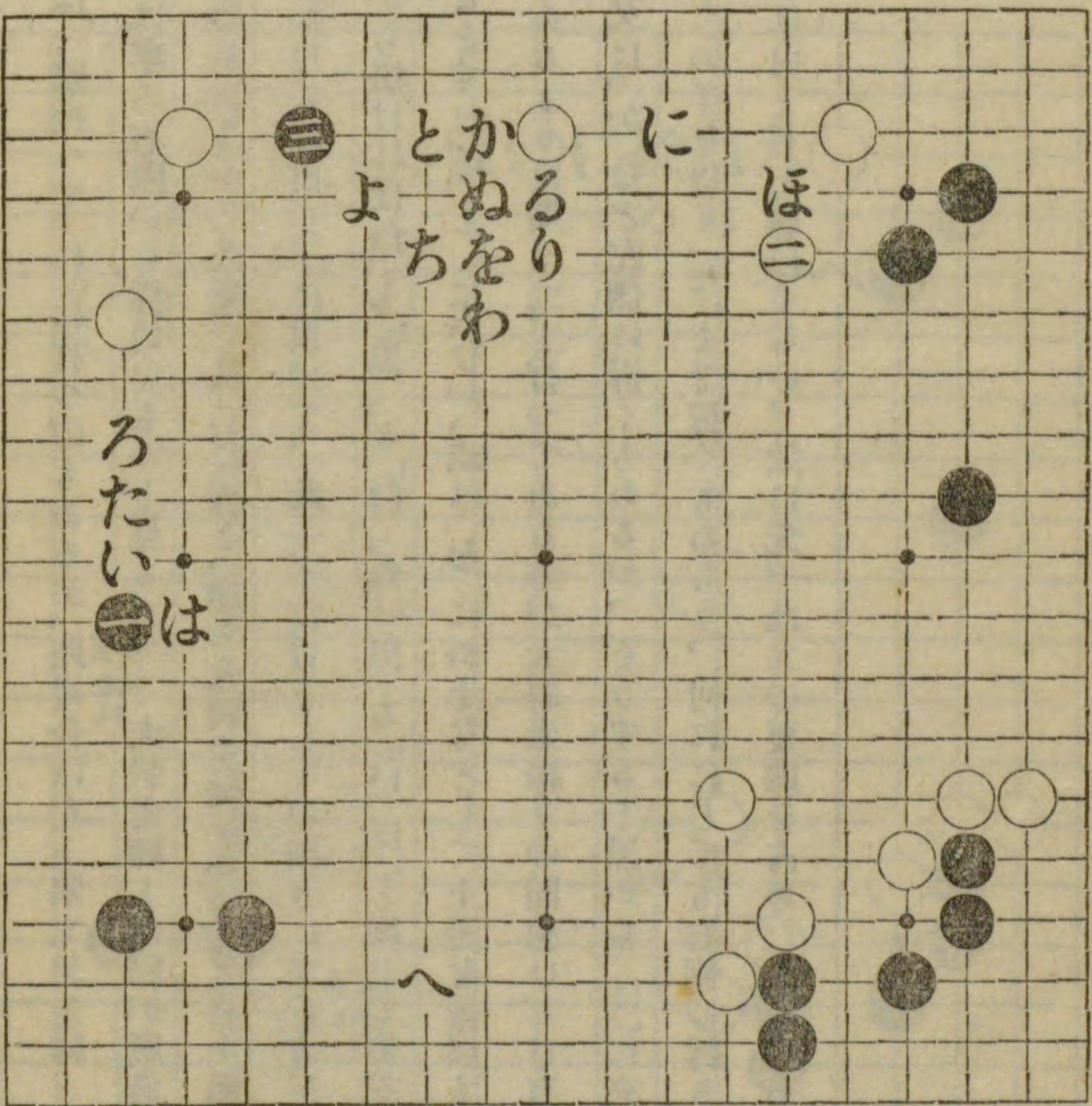
白二の拆きは大場である、斯様な形では一路控へて「に」に打つのもあるが、此場合は左上隅大斜走締との釣合をも計はねばならぬ、「に」の處は寧ろ右隅から拆いたものと見る方で、大斜走締との間が廣過ぎ黒から打込れた時に少しく不可のものがあるから此處では二に拆き、即ち大斜走締を發展し、右上隅に懸つた石は若し敵から「ほ」に打込れたならば白「へ」に頂けて、此一子だけとしての捌きにする方が得策である、又黒「ほ」に打込まず「と」から掛ければ白「ち」黒「り」白「ぬ」黒「る」白「ほ」と應じて差支ない、又時機を得て白が此處に先着するとすれば「と」に尖むか、或は「を」に斜走などとして上邊を發展するが善い、其時に當つて「に」に拆いてあるよりは斯く二と打つてある方が大斜走締との間狭いだけ有利である、又此上邊に打たないで「わ」又は「か」など左側に拆くもあるが、そうすると黒から「ほ」に夾まれ白「と」黒「よ」となるか、或は黒「よ」の手を以て「た」まで拆くもあらう、何れにしても右側に拆きのある場合黒から此處に先着されるのは白として面白くない、故に先づ此二の要處を占めたものである。

解説

第五局 (五圖)

黒一は此際最大場である、此手で一路進んで「い」に拆くのもあるがそれは場合に因つて特に趣向した手で、多くは斯く一に打ち次に「ろ」に拆く餘地を存するのを普通とする、或は「は」に打つのもあるがそれは中央との釣合上打つことが多い。
白二の斜走は上邊を發展しながら「に」の打込みを防いだものである、此手で「ほ」に尖むのも一手段である、尙遡つて考へれば、

(圖五) 局五第



前に打つた上邊の白の拆きは斯様に二と運ぶ手順となるのを豫測して打つたものである、即ち黒は一大場を占めるであらうから、次に白は此處に着手する順となる事は想察するに難くない、この故に上邊へ拆いた手の良着である所以をさとられたい。

黒三の打込みは左上隅が大斜走締で多少手段の餘地がなくもないから、其方に接近して打つたのは至當である。

碁局勢を見るに、此場合黒の着點は下邊「へ」に拆くか或は上邊に打つかの二途である、而して今下邊「へ」の處に打つとするも、白から益々上邊を發展されて或は打込の機を失ふやも計りがたいから、此際黒は進んで斯く着手するのが適切なのを感ずるであらう。

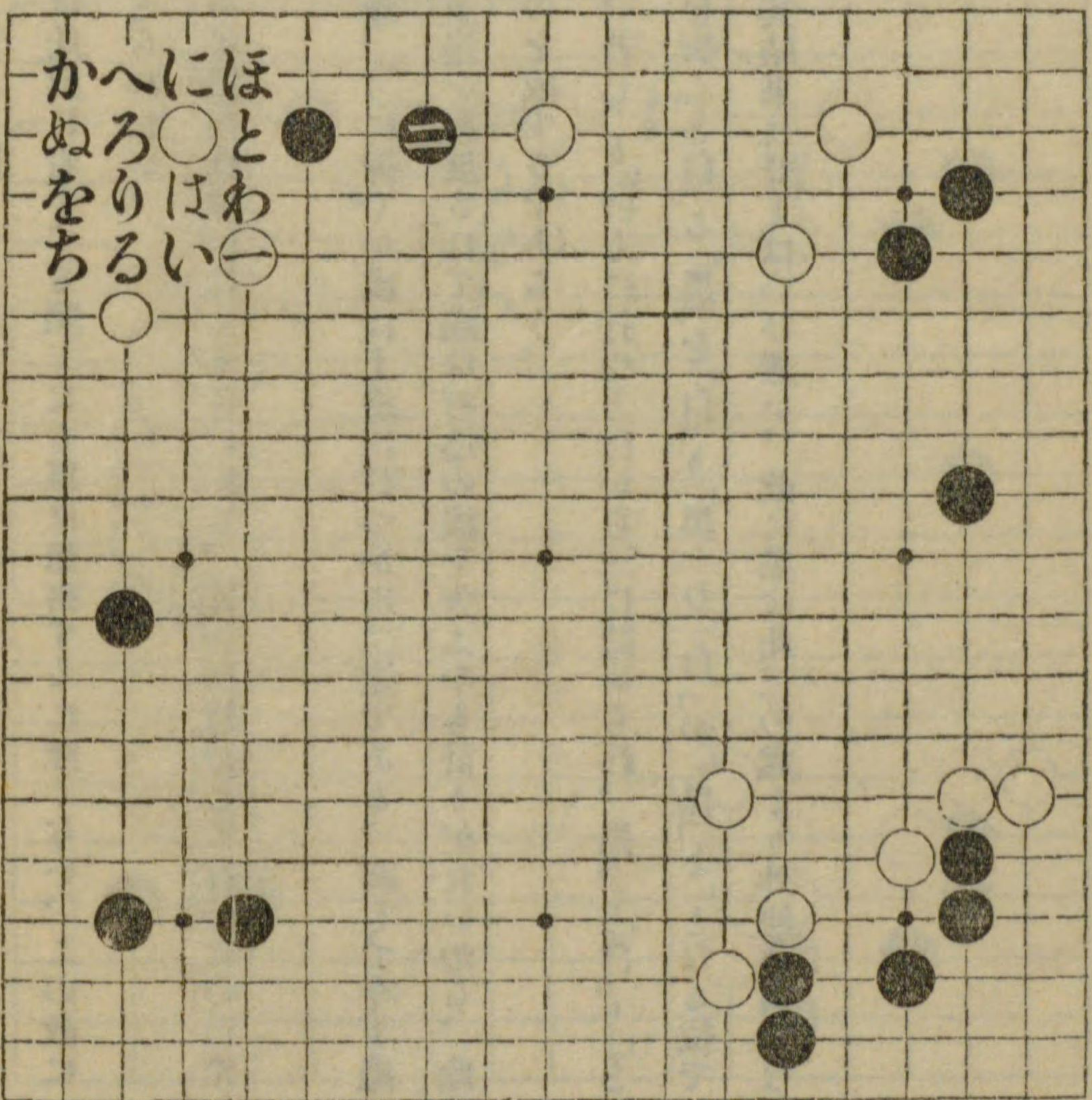
尙其着點は圖のやうでなければならぬ、若し「と」の方に打つと白から三に詰められ、黒「ち」白「り」となつて黒は根據がない、又黒「ぬ」の肩を衝くと白「る」黒「を」白「り」黒「わ」白「か」黒「よ」となる位であらう、其時白から「た」に詰められて其結果良好とはいひ難い、故に黒は此三の處より外他に適當なところがない。

解説

第五局 (六圖)

白一と斜走するのは普通である、特別の場合には「い」に尖んで隅を堅固にして且つ黒に調子を與へない手段を執る事もあ
る、要するに白は大斜走縮の方に守備して置くのが肝要で、そ
うでないとき黒から隅に手段され
る虞があるからである、但外部
の様様に因つては白殊更に之を
捨ておき、黒が何とか隅に着手
するのを待つてそれを隅に活か
し、己れは外勢を作るの趣向に

第五局 (六圖)



出る事もある、此場合では隅に黒を活かすのは白の不利であるから斜走した次第である、若し此手で
二の處に詰めると黒は「ろ」に頂けて隅を侵す策に出るのである、其時白「は」なれば黒「に」白「ほ」黒
「へ」白「と」黒「ち」と斜走して活きる事が出来るから、白が二に詰める事の不可をさとられたい、又白
「は」の手で「り」に綽ねると、其時黒には種々の趣向がある、先づ「に」に綽ね、白「へ」黒「ぬ」白「ほ」黒
「は」白「と」黒「る」白「い」黒「を」白「わ」となり劫争を生ずるか如何かは碁勢に因る、故に黒も是等の事
を熟慮して着手しなければならぬ。
又最初に戻り黒「ろ」白「り」の時黒「へ」に下る趣向もある、其時白「に」に約へると黒「は」を切り、白
「わ」黒「い」白「る」黒「と」となつて此征のアタリの如何に因つて得失が大に相違する打方もあり、又白
「わ」に列出す手で征のアタリがある時は「か」に頂けて先づ隅の二子を攻め、其機みに征のアタリがあ
つても差支ない様に運ぶのもある。



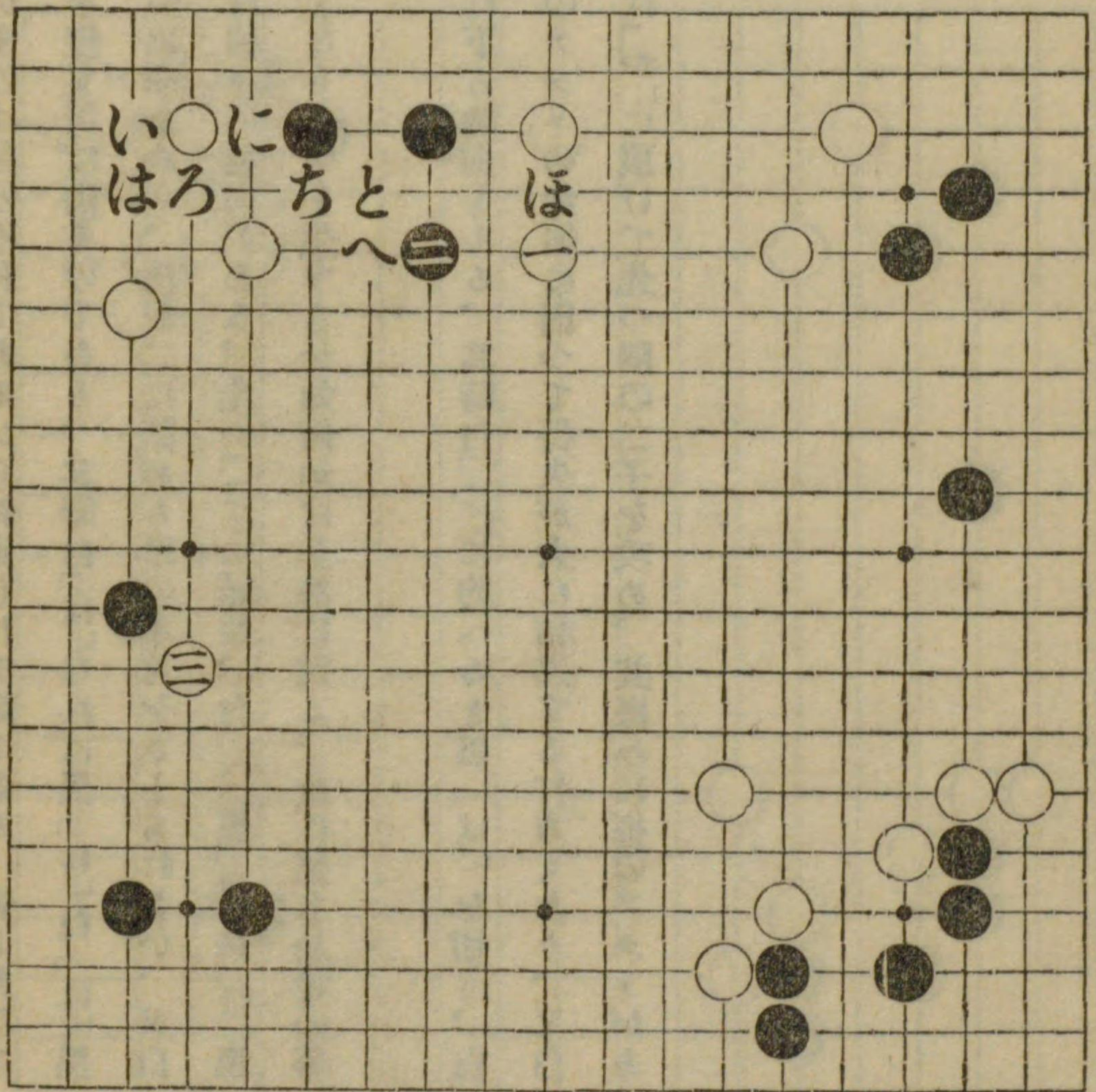
解説

第五局 (七圖)

黒「い」に頂ける時は前述した變化を豫測して打たねばならぬ、白も亦「ろ」に行びるか「は」に綽ねるか、何れも同様に考慮を要する次第である、又白「ろ」「は」の外に「に」へ突當り、黒「は」の時白圖のやうに掛けて黒を活す打方もある。

以上の接應數種は斯様な場合の大斜走締りに起り易い手段であるから述べておく、乍併此際は白が詰めて打つのは何れにして

(圖 七) 局 五 第



も不可であるから、大斜走締の方に守備するが良いので、前陳の手段は現出しないものである (前圖参照)

白一は尙黒を壓迫しやうとする勢力を示し、其の上右方を發展したものである、若し此手を打たないと黒から「ほ」に頂けられ自域を損するばかりでなく、黒の形を整へさせる不利がある。

黒二の飛びは言ふまでもなく進出の手段で、若し封鎖されては大事である、而して進出に就いても斯様に飛ぶのが手筋で「へ」に斜走するのは悪い、尙此形で白が「と」に覗く事もあれば、黒は「ち」に出切つて少しも仔細はない。

白三と肩を衝いたのは常用の手段である、其意味は此模様を消す次第である、而して斯く黒の拆きが普通より狭くある場合は、大抵打込む手段がないともいへる處だから、上の方から肩を衝いたものである。

解説

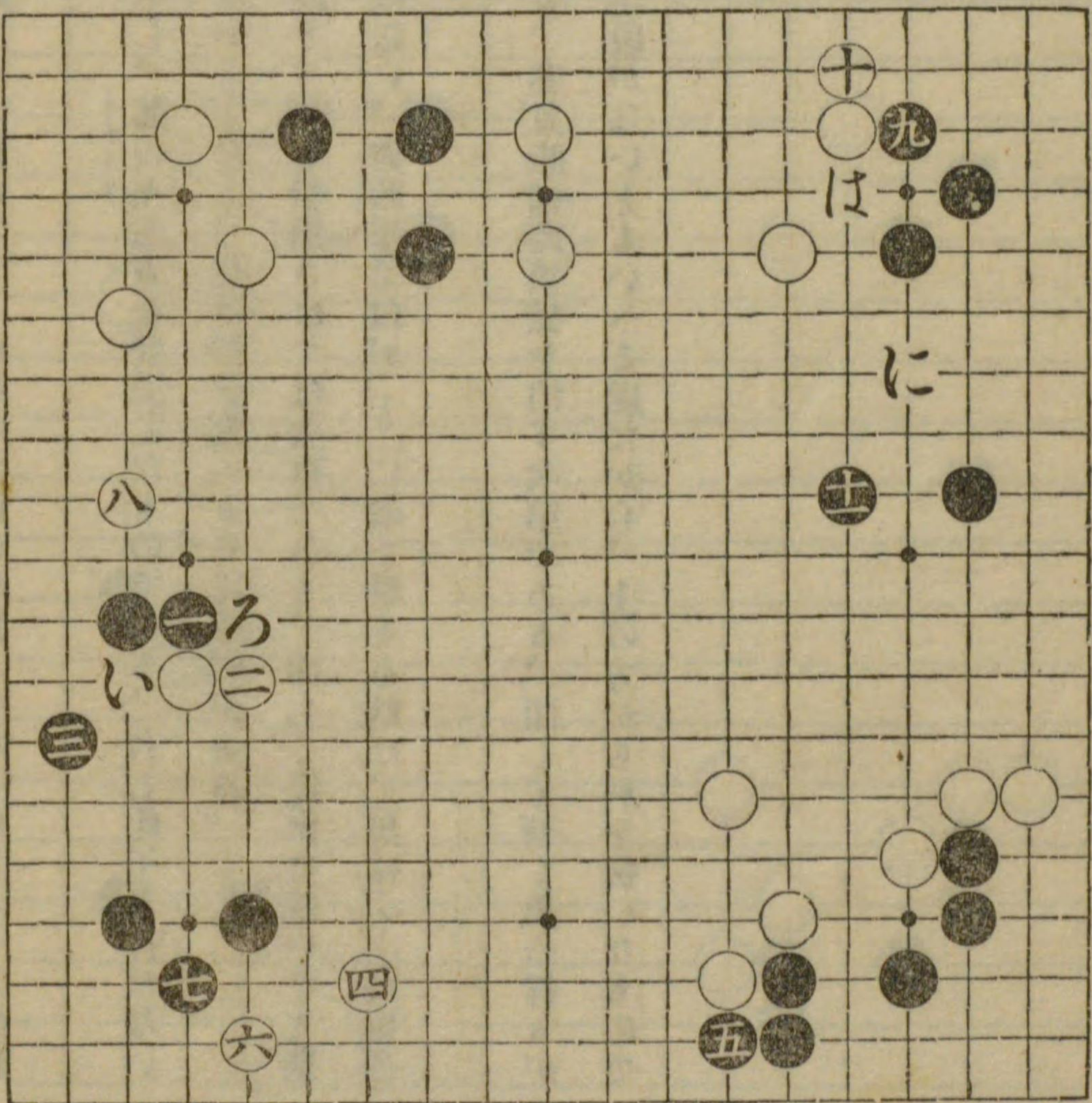
第五局 (八圖)

黒一と押し、而して三に斜走の連絡は是も亦毎々打ち出す形である。

黒一と押す手で「い」に這ふのは位が低くつて宜しくない事が多い。

白四の懸りは既に肩を衝いた時に胚胎した趣向で、黒の下邊に展開するのを妨げ遠く左側に打つた石に援助を與ふるもので、且つ下邊に自己の形勢を張る事にもなる。

(圖 八) 局 五 第



黒五の曲りは小さいやうだが、今白から此處を約へられると、下邊の形勢が益々張つて且つ右下隅に影響するところが少くない肝要の手である。

白六は黒地を侵す手で、黒七は之に對する普通の應手である。

白八の手は全局を見渡すところ好着點を求むるに至難の場合である、其故は既に黒から五と曲られた以上、下邊に着手することの面白くないのは言ふまでもなく、又右側方面を見ても好點を發見しない、是に因つて勢左側に着手するの外ないのは明かであるが、夫れにしても此八の點は甚だ振はない手のやうだが、仔細に審査すると兎も角二拆の地歩を占めながら黒の二子に迫るから、白尙「ろ」に曲れば二子の白は敵の弱點に乗じて治まるに易い姿勢である、又黒から「ろ」に押せば白はそれに従つて中央に出走する事になる、されば八は自ら二子の白に聲援を與ふる次第である、これによつて八の佳處である所以をさとりてあらう。

黒九と尖みつけ次ぎに十一と飛んだ順序は宜しい、若し白十の手で「は」に引けば黒は「に」に守備すべきである。

解説

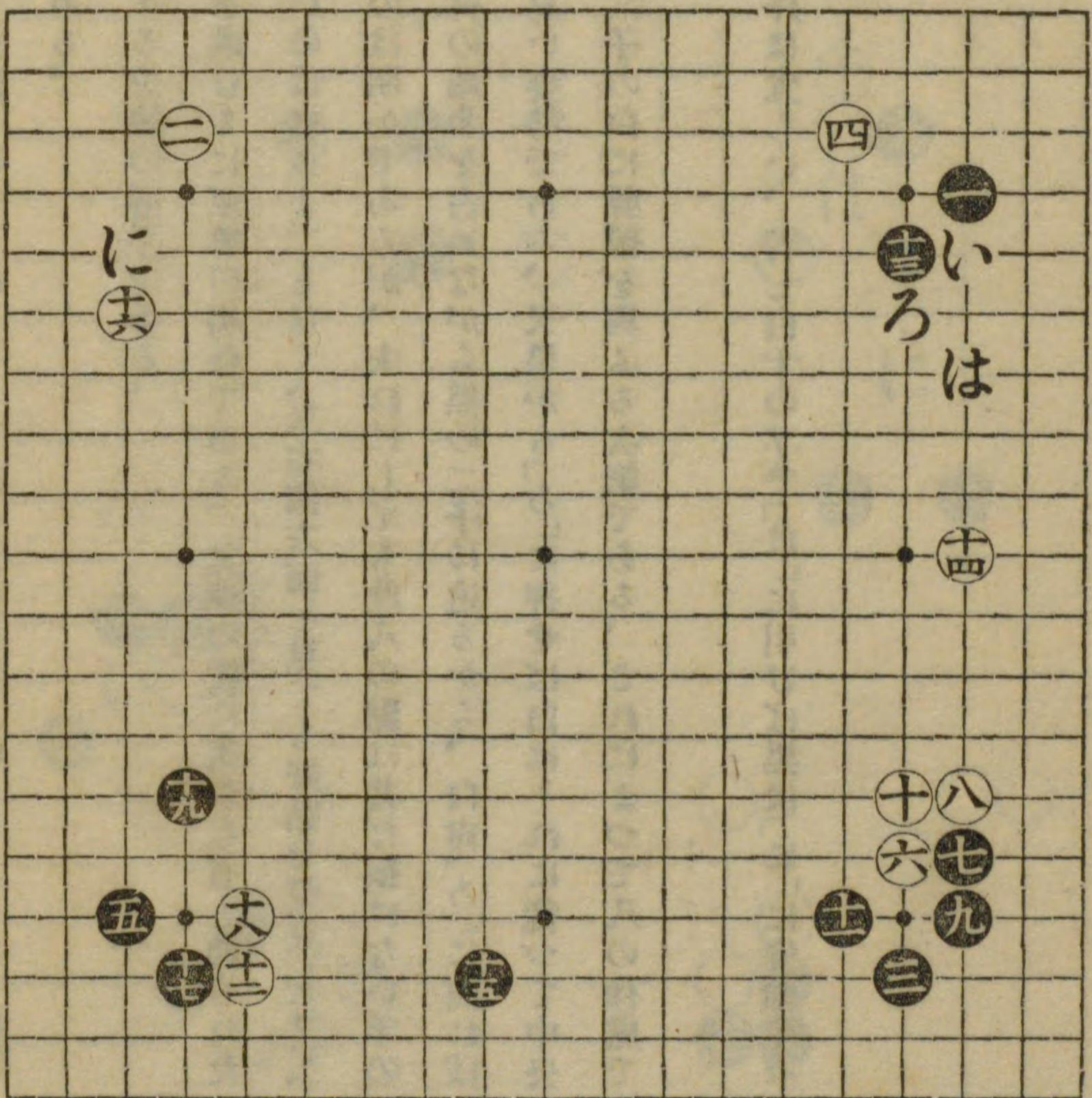
第六局 (一圖)

黒一から六までは前局の通りである。

白六に對して黒七に頂け、以下十一までと運ぶのは最も普通の定石である。

白十二は十四に拆くのが此處の定石であるが右上隅の配置が黒一白四のやうになつてをる場合には手抜するのも宜しい、若し黒が十四に夾めば白は十三の處に掛け黒「い」「白」「ろ」の時黒普通のやうに「は」に一間飛ぶと、既

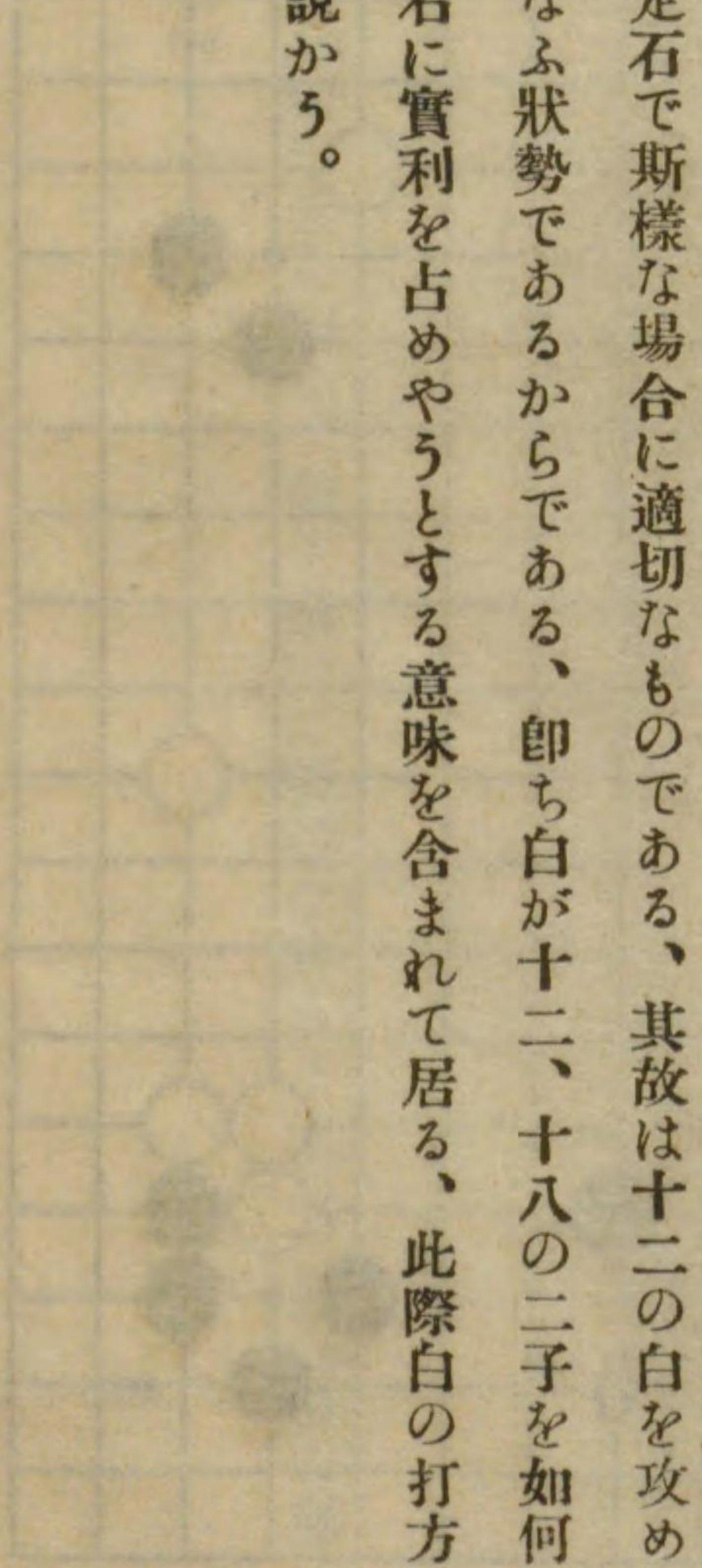
(圖一) 局六第



に前に打つた十四の處の石と此「は」との間が狭く如何にも働きのない重複した姿勢となり、之を大體から觀察すると、一と十四の黒とを同位に低下させることゝなつて宜しく、言ひ替れば黒は直ちに十四と打つ事は不利であるから打ち難いものと知つてよい。黒十三の手は前述の次第で、直ちに十四に打てないから先づ此處に尖み、次には十四の處へ詰めやうとする意味である。

白十四は至當の手で、今度こそ黒から此處に打たれるときは打撃を蒙る事甚大である。黒十五の三間夾是亦大場で宜しい、尤も此手で「に」に懸るのも悪くはない。

白十六の大斜走締は大場で好點とする。黒十七と尖みつけ十九と桂馬に運ぶは定石で斯様な場合に適切なものである、其故は十二の白を攻めて左右で利を占めやうとする趣意にかなふ状態であるからである、即ち白が十二、十八の二子を如何に捌くかを試みて、黒は夫れに従ひ左右に實利を占めやうとする意味を含まれて居る、此際白の打方には種々の手段があるから圖を改めて説かう。

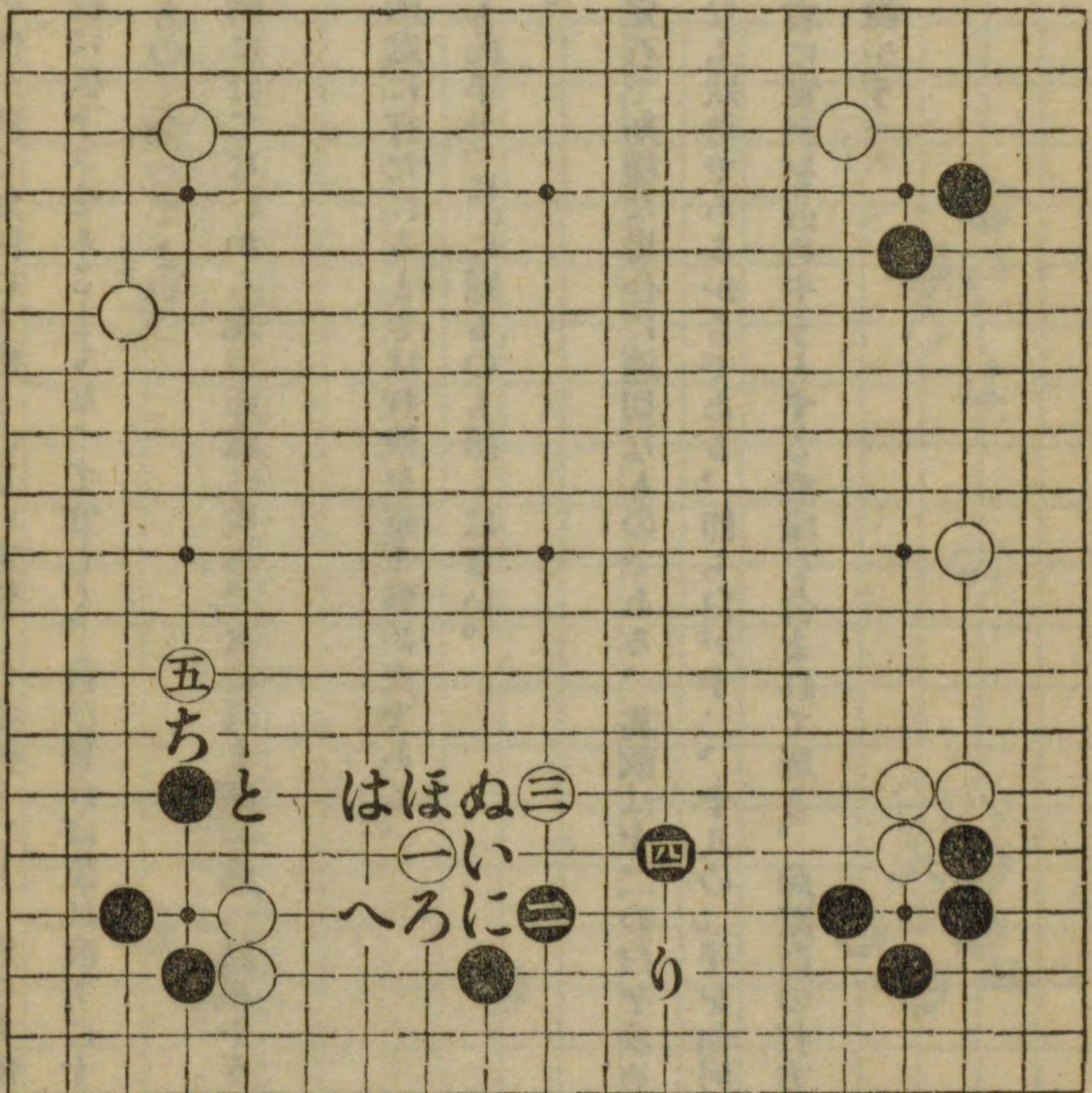


解説

第六局 (二圖)

白一の大斜走は二子を進出させたのは言ふまでもなく、而して斯様な形では白の打方に種々の手段がある、即ち外には「いろは」の三點で其中「い」は此一よりは却つて多く用ひられる傾きであるが、此場合では右下隅の配置が圖のやうに根據を作つてをる際であるから、黒は右方を顧慮するところが少いによつて逆に一の處に頂けて戦ふ手段があらうから、それを慮かつて白

(圖二) 局六第



は一路控へたものである、又白「ろ」に打つことは特殊の場合で、此處では黒が「り」に押され白一黒「い」白「ほ」の時黒轉じて五と飛ぶ事なれば之は白面白くない。

次に「は」に打つ事もある、これは左右の黒に餘り接したくない場合に斯く打つて動靜を窺ふこともある、其時黒は五に飛ぶが普通である、或は「へ」に試み、白「と」なれば黒「ち」と打つのもある、而して此場合では此「は」は一策たるを失はない。

黒二の尖みは右隅との釣合で斯く打つたが、若し右隅が白の布置ある時などには黒「り」に拆く手を用ふるが、此際は重複を來すによつて二と尖むが宜しい。

次ぎには「ぬ」に掛けて煽る趣向を含むものである。

白三の斜走は黒から「ぬ」に煽られるのを凌ぐと同時に此三子に援助ともなり、且つ下邊に打込まうとする姿勢もある。

黒四の斜走は下邊を發展したものである。

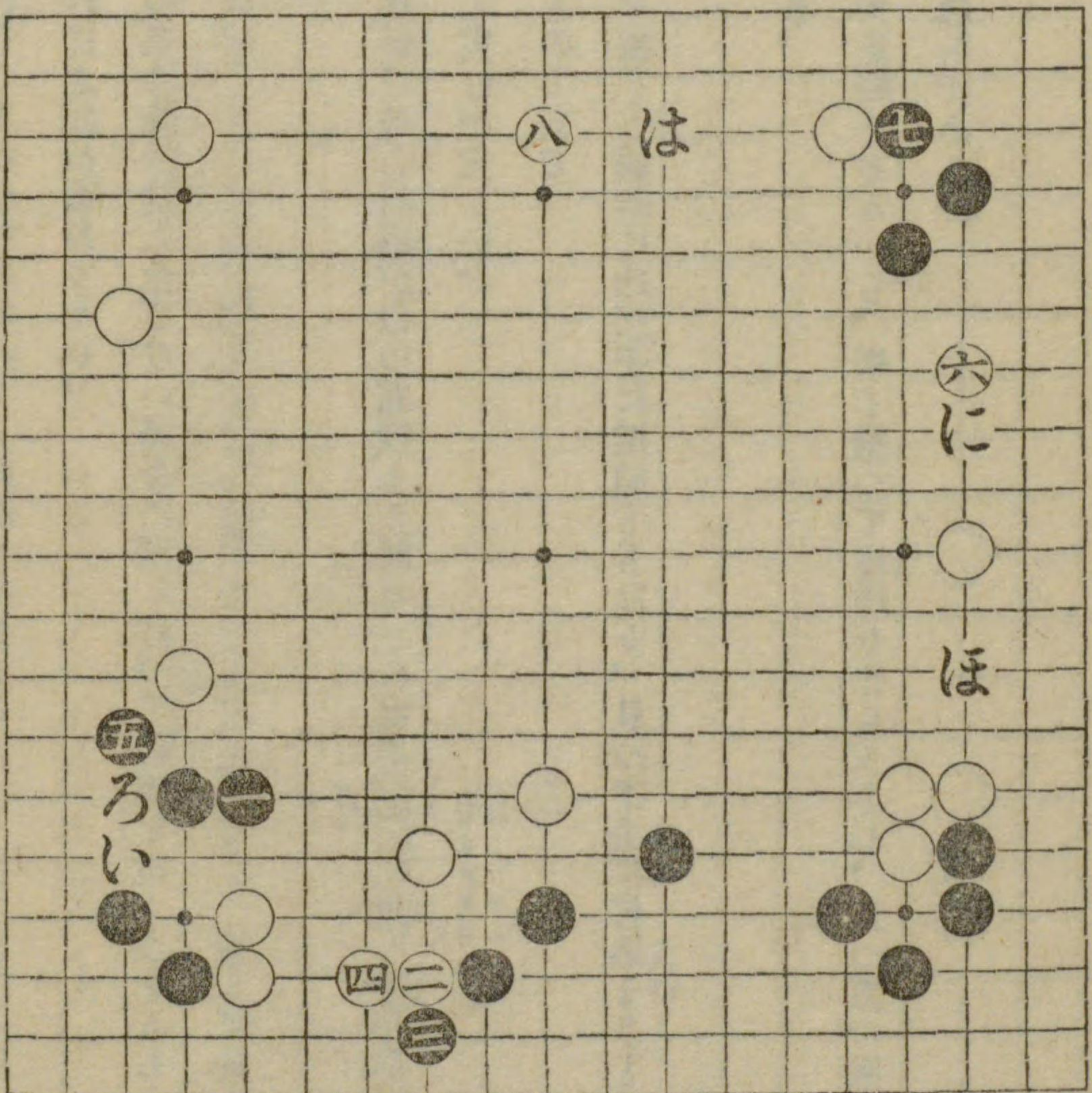
白五と轉じたのは、左上隅の布石が大斜走締であるから、斯く懸つて模様を作らうとし、且つ黒の應手に従つて下邊の白を治めやうとする趣向である。

解説

第六局 (三圖)

黒一の双びは常用の手段である、これは白から「い」に頂け越される手筋を防ぎながら外面へ出で、下邊の白を窺ふものである、尤も此手は場合により「ろ」に下る事もある、然し此場合では外部に響かないから上に双んだ次第である。
白二黒三白四は何れも當然の着手で、白若し手抜きすると黒から此處を攻撃されて非常に痛切に感じるから斯く二と防衛した

(圖三) 局六第



もので、これは既に前圖五と打つた趣向と連続してゐる。

黒五の尖みは白が相當の治まりをつけたから、黒も亦之に對して相當の治まりを付けねばならぬ、然るに「い」に頂けられる手筋が残つておつて、此處未だ不完全であるからそれを補ひながら側面に向つて出動する意味をもつてゐる手である。

白六の拆きは上邊八若くは「は」などに打つのが普通だが、此際黒から「に」に詰められると下方に未だ治らない一團があり、旁々其成行に因つては「ほ」に打込まれる事がないとも保せられない、若し然る時は破綻を生ずるを以て斯様に地歩を占めながら黒に迫り、自然と上邊に黒が着手するを牽制してをる意味である。

黒七の尖みつけは如上の次第であるから漫然上邊に着手しても、若し白から右上隅を攻められる事になつては甚だ不利益であるから、斯く打つて白の動靜を窺ふ穩健の着手である。

白八の拆きは大場を占めたもので、之を直ちに右方の石に着手すると、其形が重くなつて斯様に大場を占めるのに支障を來たすかも知計がたいから、先づこの八へ着したのである。

解説

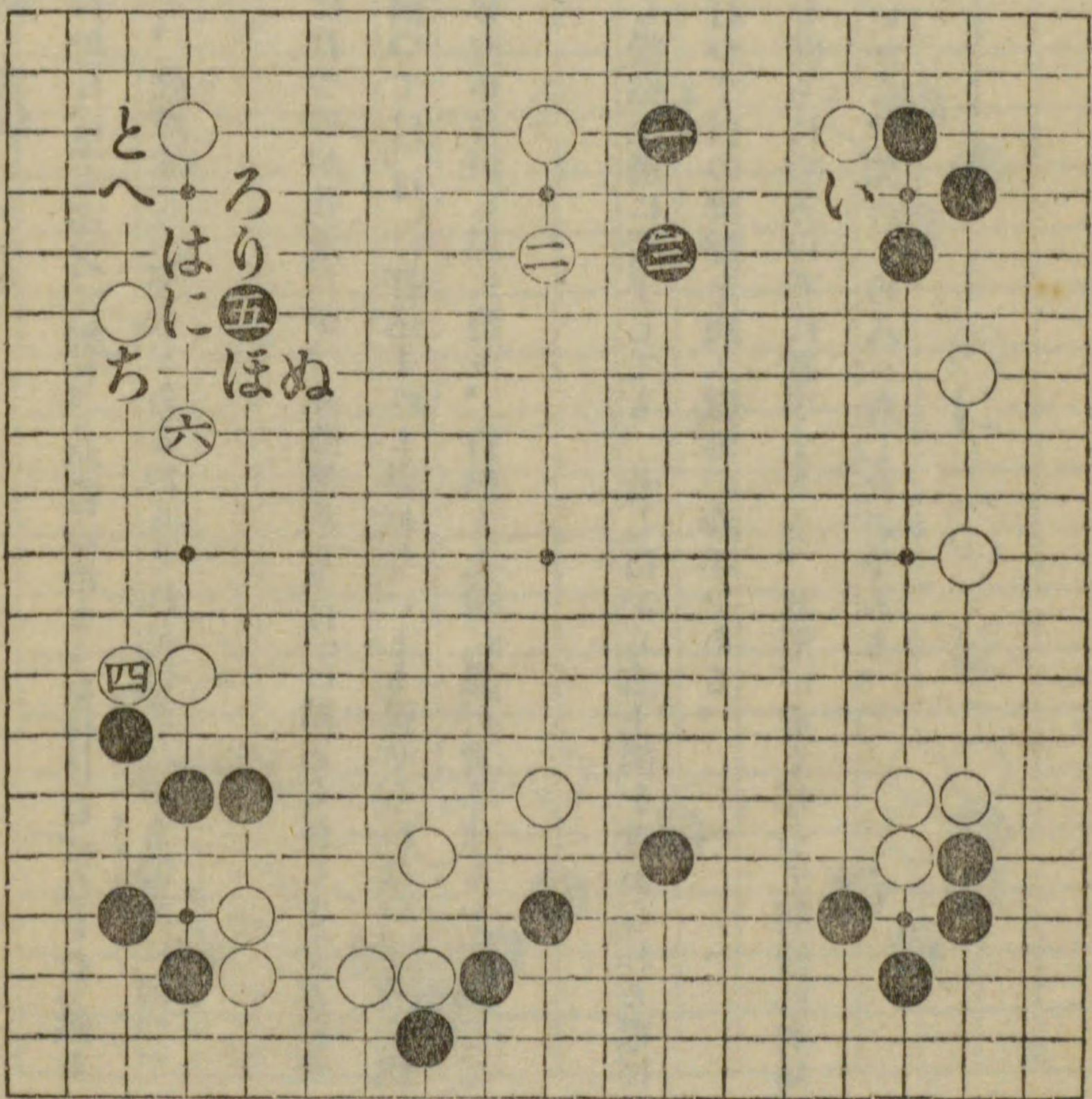
第六局 (四圖)

黒一の打込は要處である。若し捨ておくと白から「い」に行びられる虞があるによつて、其前に打込み白の一子を捕獲する手段である。

白二の飛びは直ちに「い」に出ても既に黒から打込まれたので逃走の形重く、従つて不利益であるから斯く飛びを先にしたのである。

黒三は白の二に飛んだのに對して、右方の一子の逃路を塞ぐ手

(圖 四) 局 六 第



である。

白四の抑へは上方一帯に大模様を張る手段であるは申すまでもない、而して此手段は二と飛ぶ際に既に此趣向に出やうと豫測したものである。

黒五は白の勢力圏を侵掠するに此場合適當の着點である、若し侵入が浅いと白に領域を定められる虞があり又深いときはそれ自身困厄に陥る事がある、此故に適處を撰擇するのは最も必要の事で、此際の五の様なのは眞に淺深其宜しきを得て進退の便に利なるばかりでなく、之を全局から觀ても其度に適つて權衡を得たものである。

白六の應手の時は種々の手段がある、其一是「ろ」に守るもあり、又時としては「は」或は「に」もあり、又特殊の場合には「ほ」に頂ける事もあり、其中「ろ」に打つと黒「へ」に試み、白「と」の時黒は「ち」或は六などの手段に出て此邊を蹂躪するであらう、又白「は」では黒に響かないから此際面白くない、又「に」に突當ると黒「ろ」或は「り」に打ち此邊をあらず事になる。それは白として黒に調子を與へて宜しくない、又白「ほ」に頂けると黒には種々打方があるが、此處では「ぬ」に綽ねて容易に目的を達する。されば白の應手は最も考慮を要する次第で、譜のやうに軽く六に應ずるは適當である、之は地域を失はないばかりでなく上部から黒を壓迫しやうとする氣勢を示し、且つ黒に調子を與へないから策の得たものである。

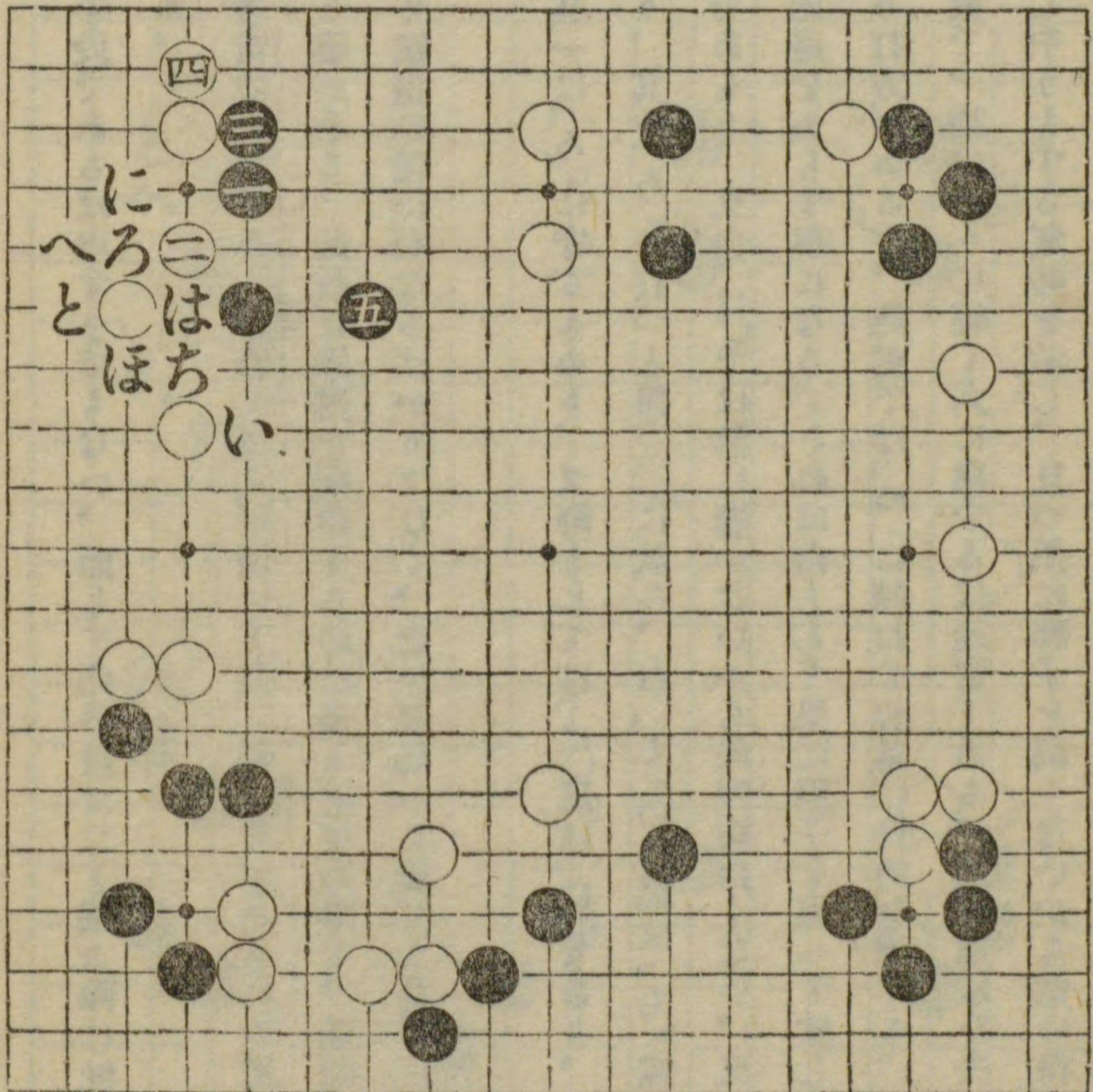
解説

第六局 (五圖)

黒一と一間飛びして白に二を守らし、黒三と一應約へ込み白四に下り而して黒五と切を防ぎ、旁々逃路を作つた打方軽くして面白い。

此一の一間飛の手で「い」に頂ければ直ちに逃げ出す事は出来るが、斯くては自己を逃げるに止り何等白へ響く手段でない、且つ上邊の白から連絡かたぐい地歩を占められる不利がある。されば同じく逃げるとするも圖

(圖五) 局六第



のやうに先づ敵地に侵入遮断して然る後自ら守るの計に出るが利方にもあり、且つ白の上邊の二子も黒と同様に未だ根據をもつて居ないから、従つて黒を攻るとしても多少自ら顧るところがある次第ともなれば、畢竟するに黒としては敵を幾分薄弱にする事は一方から観て自ら守るの手段にも相當する道理である。

故に黒一と飛び込むのを以て策の得たものといふのである、又黒一の手で直ちに「ろ」に頂け、白二黒「は」白「に」黒「ほ」白「へ」に一子打抜き黒「と」にアテ白「ろ」の處に粘ぎ、黒「ち」となつた時白「い」に行ひ、此黒を攻め立てて打つて變化もある、斯くなる時は黒の勢重く且つ急で此場合に執るべき手段でない、されば黒が最初「ろ」に頂越す事は宜しくないといへる。

解説

第七局 (一圖)

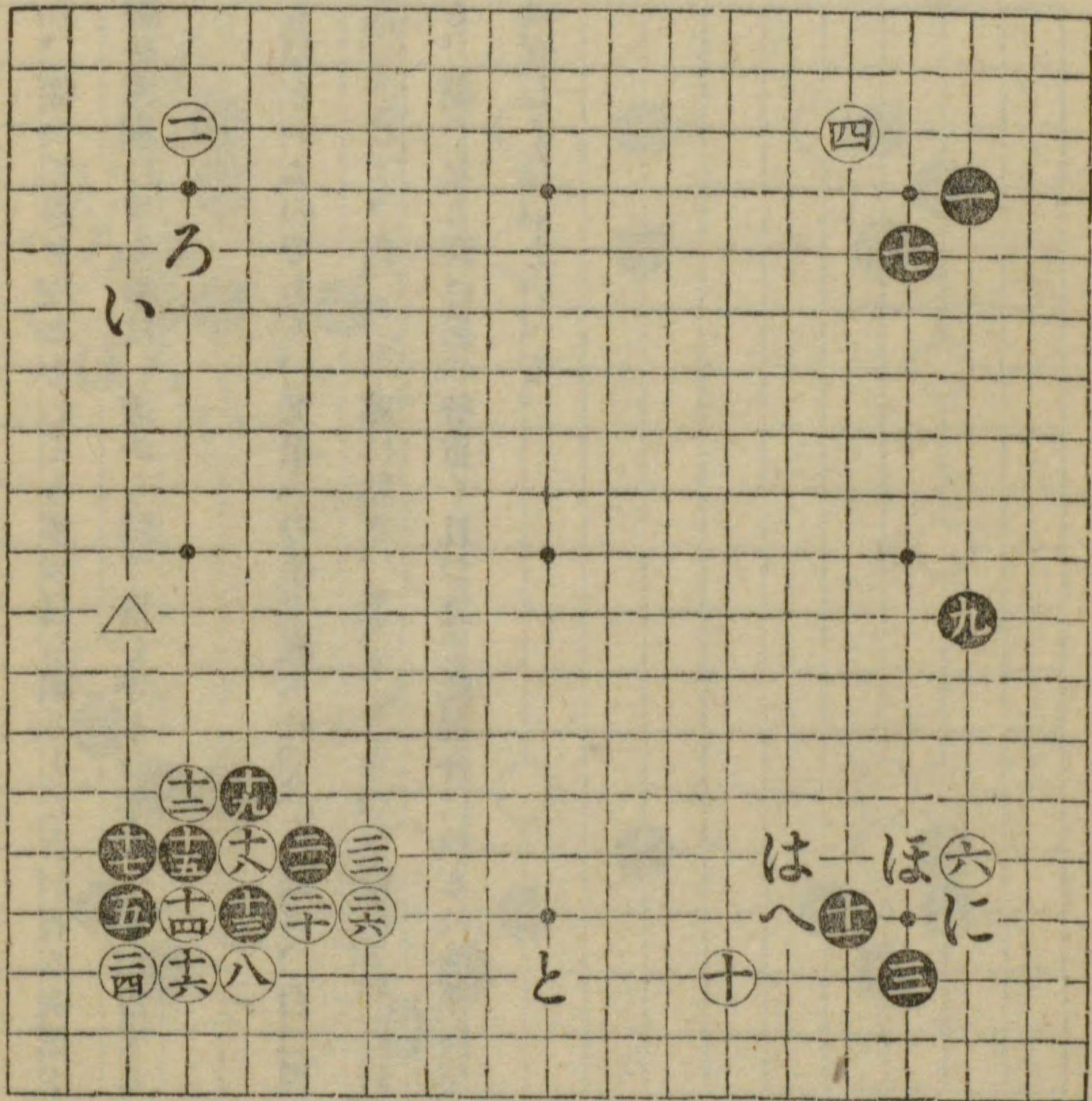
二三 劫提

二五 劫粘

黒一から七までは既に掲げたところである、其時白八と明隅に懸つて來たらば黒は九と三間に夾んで、前に打つた七の一子を利用して此右側に形勢を占めるのが普通である。

此時白は各自の趣向によつて種々の着点があるが、圖も其一例で或は此十の手を以て單に十二に掛けるもある、或は「い」又は

(圖一) 局七第



「ろ」と明隅を締るものあり、夫等の得失は趣向の如何に關はるもので、今直ちに之れが可否の判断は下し難い。

楮圖のやうに白十と二間に夾んだのは黒に十一に尖ませ次に白十二に掛けやうとする手段で、此際十の手を以て「は」などに打つ定法に出るのは八の石との釣合が悪いから好ましくない。

何故白は十二と掛ける前に一應十と打つておくかといふに、左下隅の應接十三から二六までの手順を了した時黒△印に拆く手を以て「に」に尖みつけ、白「ほ」なれば黒「へ」に斜走する手段に出たなら、白は折角左下隅に築き得た堅壘を利用する範圍が狭くなつて面白くないから、斯様に十二と掛ける前に一應十と打つておく事の必要がある。

此十と夾む手に就ては黒十一の時直ちに白「と」に拆くのが通則であるが、斯く十二と掛け内外の振替りをすれば左方に白の堅勢現出するを以て、差當り「と」に拆く手がなくとも權衡を保つことが出来るのである。

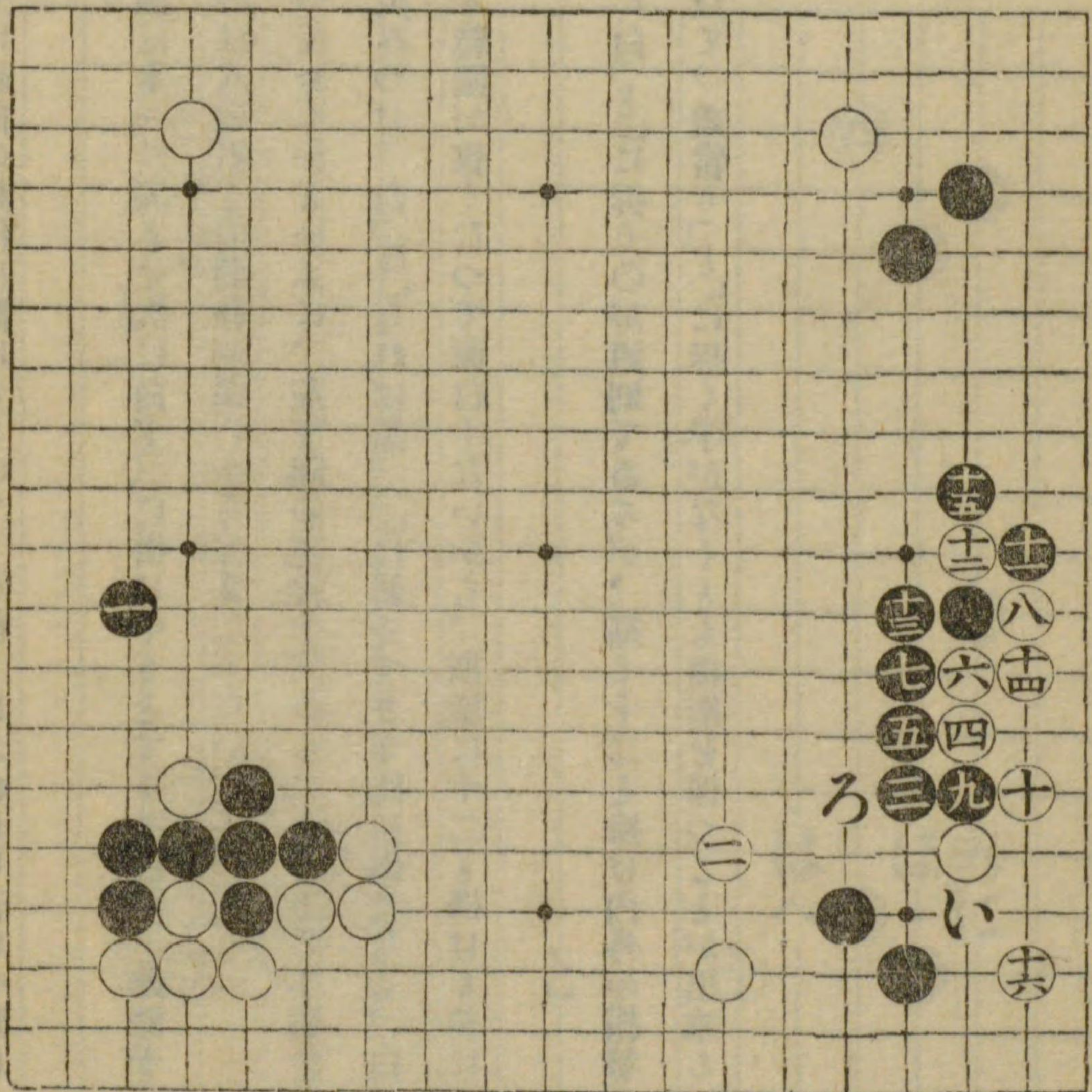
解説

第七局 (二圖)

黒一の拆きは此形で定法とするところだが、場合に因り手抜きすることもあるが、今他に急場もないから斯く大場を占めておくのは黒として堅實の打方である。

白二は下邊が未だ手薄であるから補ひながら之を發展し、且つ右側の一子に聲援を與ふるもので黒が何とか之に對して應答をするであらうから、それに乘じて此一子を捌かうとする白の趣

(圖 二) 局 七 第



向である、故に黒は三と掛けた次第で、若し此三を以て「い」に尖みつけければ白は「ろ」に軽く斜走する、それでは黒は面白くないから三と掛けたのである。

白四に飛んだのは普通の應手である、此時黒「い」に尖みつける手段もある、其場合には白は五に押出すのを通則とする、本圖では黒「い」に尖みつけないで五、七と封鎖する手段を採つたのは、外部を厚壯にして尙白の界中に侵入の意を寓して居る、白としては黒から壓迫を蒙るのは前に手抜きしておいた處であるから致方ないものである。

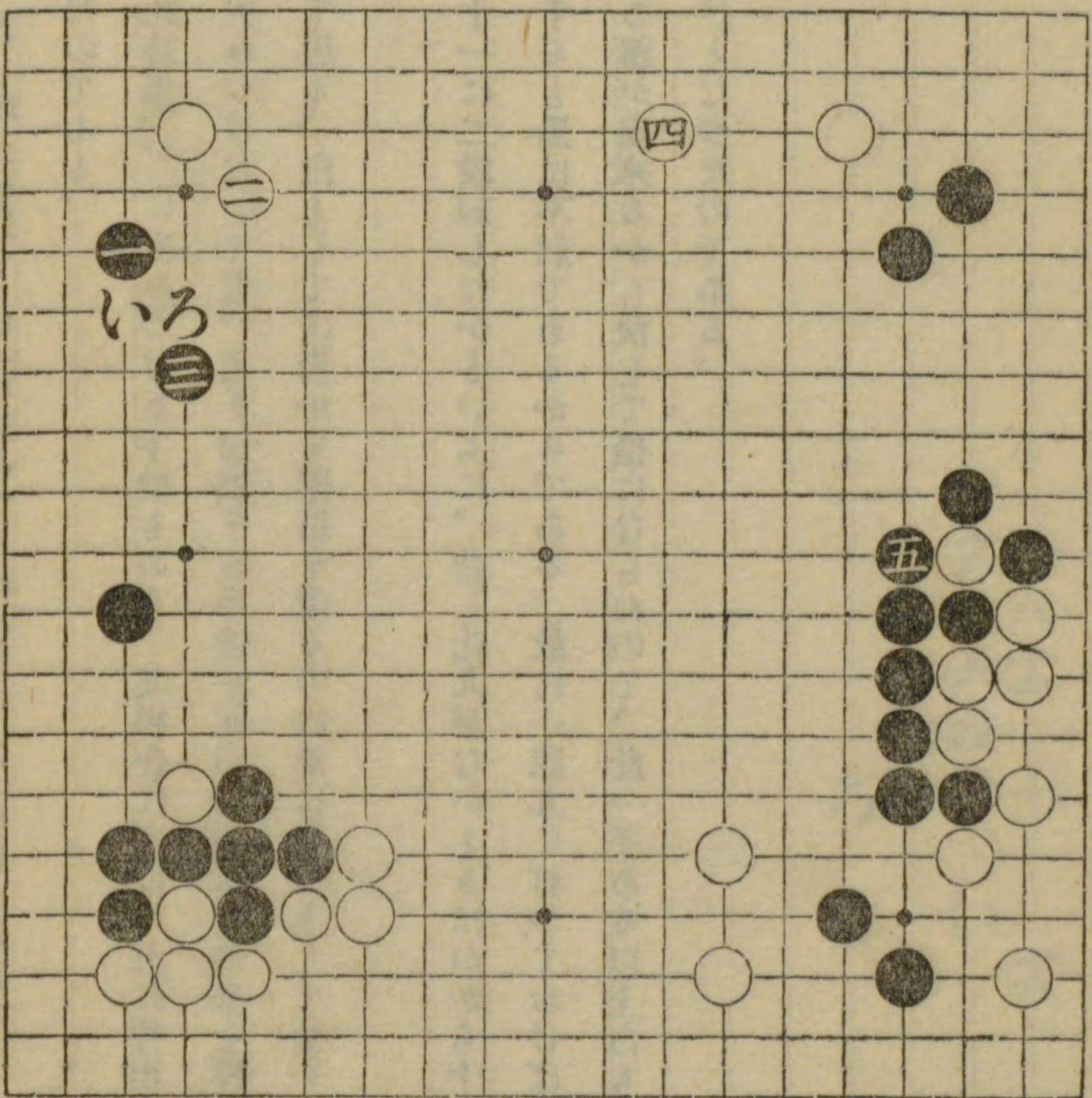
白八に縛ねた時黒何故九に出たおいて十一に二段縛したかといふに、若し此九がないときは白から十二に切られ、十一の一子を取られたとすると黒は不利であるからである。故に一應九に打つておけば振替られても黒は四、六の二子をも取る事が出来るから決して損にならぬので、此一子ある以上白も振替るは損と認めて以下十六までの運びとなつたのである。

解説

第七局 (三圖)

黒一の懸りは此形勢に於て最大の着点とする、此處に注意すべきは白の一子が征にはなつてをるが、斯様な石の存在は甚だ懸念に堪へないもので、若し一朝引き出される事ともなると是より紛争を生じて其不可なる事はいふまでもない、因つてかういふ形の現はれた時は征のアタリを打たれるのを待つまでもなく黒は確實に五に一子を打抜くの通則とするが、然し翻つて局

(圖 三) 局 七 第

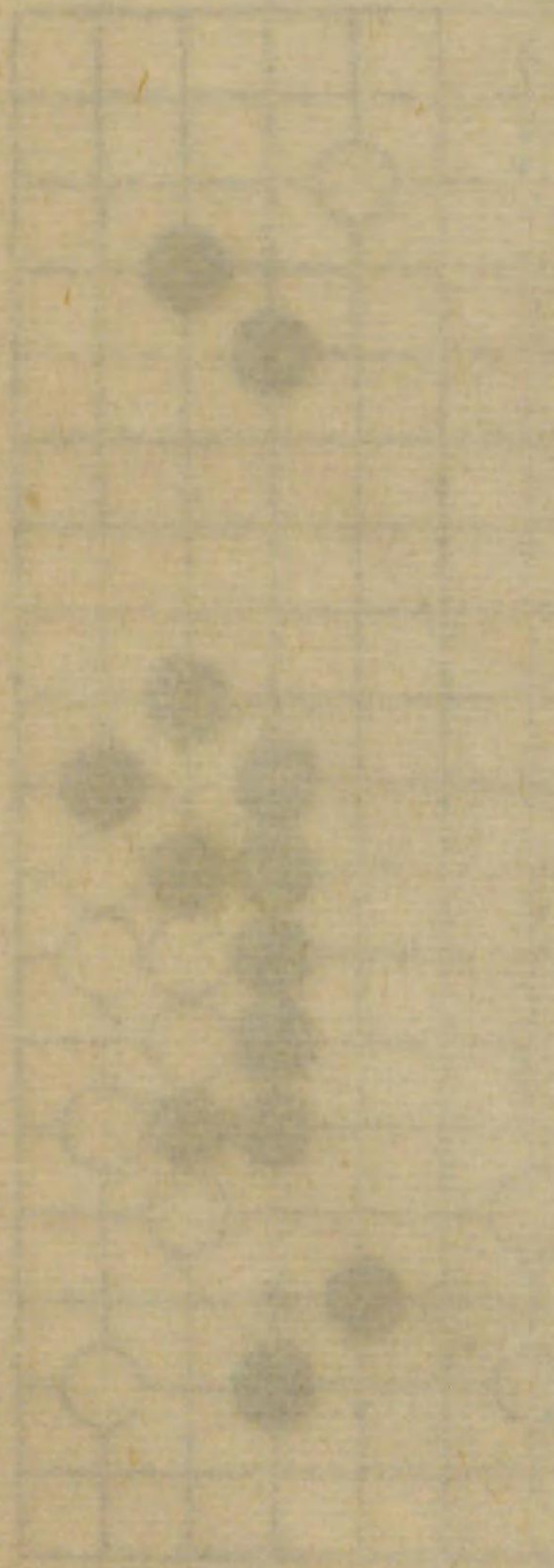


勢を通観するに、今若し此處に一手を費やすと白から「い」などに此隅を締まられ、次ぎに黒の打場を求むるのに其締まられた程の代償を發見しないから、先づ一と懸つて其大に就いたのである、尤も未だ當りを打たれても痛切に感ずる形もあらはれてをらないから、斯く一と懸つたもので、若しその憂でもある場合にはそれを別について別に一手を要する。

白二は上述のやうに當りを打つても其効果が少いから二と尖んだ次第で、之は次ぎに「ろ」に掛け左側の黒の位を低くしやうとする意味である。

黒三は白から「ろ」の掛けをされるのを防ぎ、旁々上邊に敵が地歩を占めた時打込まうとする伏線である。

白四の二拆は即ち征のアタリで黒五は無論至當の應手である。



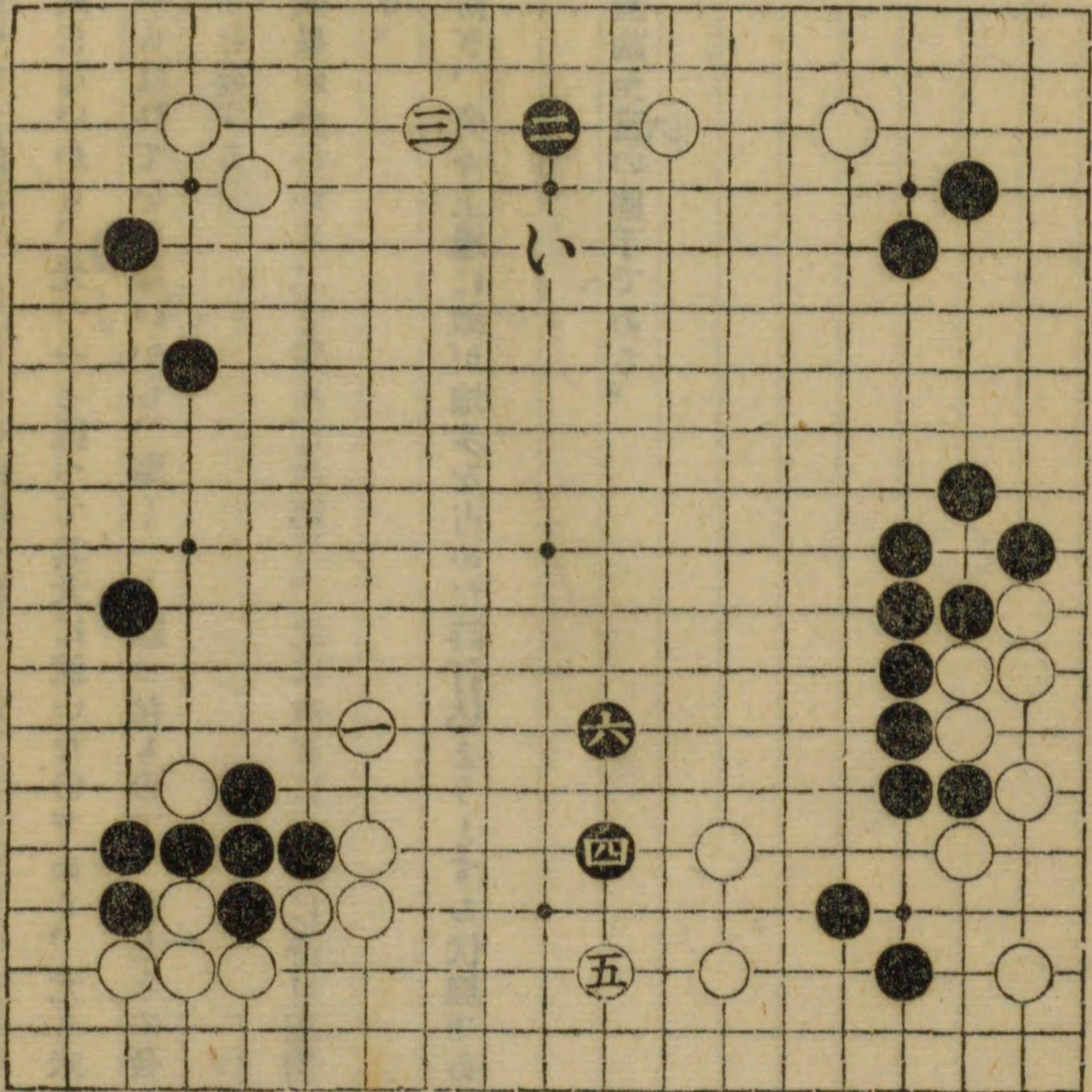
解説

第七局 (四圖)

白一と飛んだのは下邊を發展しながら左側の黒の形勢を縮少する意味のある一擧兩得の良手である。

黒二の打込は普通面白くないところだが、此場合では右側に味方の堅壁があるから二間拆になつて居る白は勢ひ薄弱を免れないによつて、先づ此處に一撃を試み白の三と交換しておく事は黒にとつて得策である、而して直ちに此二の石を「い」に飛び出

第七局 (圖四)



さないでも右方の堅壁は遙かに上邊まで其勢力を普及してをるから、差當り黒は他に轉じても差支ない、是に由つて先づ下邊四の處に侵入したものである、此時白五に應じる外ないの言ふまでもない事で、若し此黒を攻めやうとして上部から包圍の計に出ると、黒から五の處に飛び込まれて却つて根據を黒に與ふるやうな姿勢となり、白の右方の二子の方が危殆に陥る事がないとも限らぬ、其故は右方の堅壁が矢張り利用される結果である、故に五に應じる外なく、さすれば黒も亦六と一間飛をしておく事は必要とするところである。

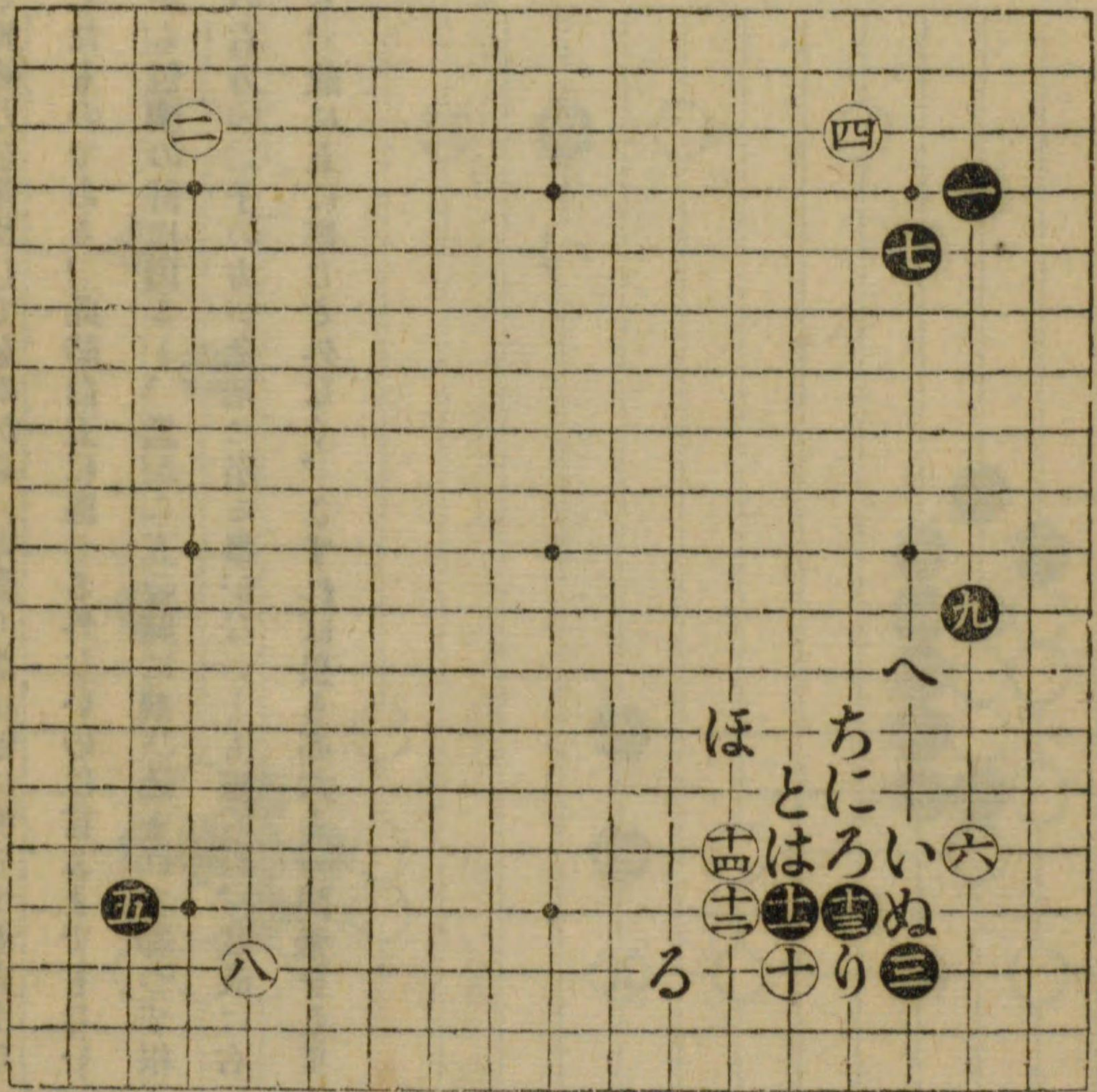
解説

第八局 (一圖)

黒一から九までは前局の通りである、

白十の間夾返しの手段は最急なものであるからそれだけ特に趣向のある譯で、漫然用ふるの
は悪い、而して黒の之に對する
應手は圖のやうに十一と頂ける
か或は單に十三に尖み出すの兩
法がある、又「い」に頂けるもあ
るが此場合では面白くない、假
りに十三と打てば白は十一に押
し黒「ろ」白「は」黒「に」となつた

(圖一) 局八第



時、白には種々の趣向がある、先づ「ほ」に斜走するか、或は「へ」に打つか、又は一應「と」に押し黒「ち」の時白「へ」に打つのもある、或は全く轉じて左下隅方面に着手して黒の動靜を試みることもあらう、兎も角白は八と此十以下の三子との間隔の廣いのを利用して何等かの手段を廻らさうとするところである。

本圖のやうに黒十一と頂けたのは白をして三子連行の策に出ぬやう妨げた打方で、能く夫等の意味を會得して此兩種の受手を撰むべきである。

黒十一に頂けた時白十二に縛るは至當の事で、黒十三の引きも普通である、尤も十三で「は」に立つ定法もないではない、其時は白「り」に突當り黒「ぬ」の行びとなるが通形であるが此處では黒十三と引いた打方を示したものである。

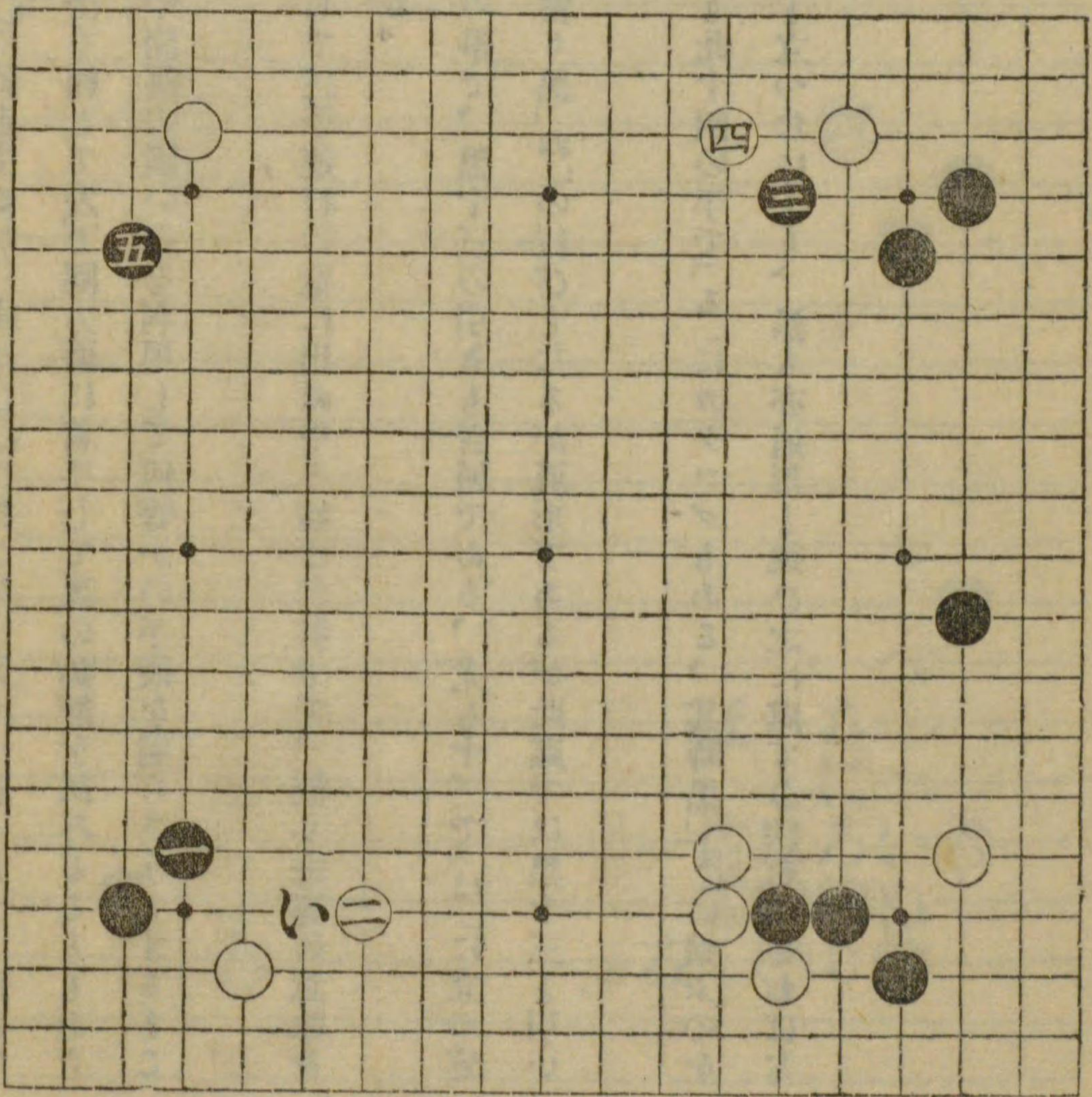
白十四の行びは是亦一手段とする、尤も此十四の手で「る」にカケツグもある、其時黒「と」に飛ぶのを通常とする、今白は趣向に因つて十四と立つたにより、黒も亦通形と違ひ之に處する法を講せねばならぬ。

解説

第八局 (二圖)

黒一の手は今白が右方に伸びて
 變則に來た時であるから、斯く
 尖んで白が下邊を擴大しやうと
 する趣向を制限しておくので、
 此場合では最適當の着手である
 且進んで「い」に掛けて白を低く
 させ白が伸びた手段を挫かうと
 する意を寓してをる、若、此手
 を打たないと白から一の處に掛
 けられ大模様が出来る。
 白の二の應手は黒から前述の
 「い」に掛けられて位が低くなる

(圖 二) 局 八 第



のを避けるために斯く打ち、尙下邊の位を保つておくが白として得策である。

黒三の掛けは白の四と交換するのは通形で、此場合斯様に打つておく意味は、既に形づける右側との配置を見れば其間隔が廣いから打込まれる虞れもあり、且之を我が領域としやうとする趣向を探れば、其間の廣いだけが利益となる次第であるから、先づ掛けておく事は何れからみるも策の得たものとする、之に對して白の四の應手は至當で又已むを得ないものである。

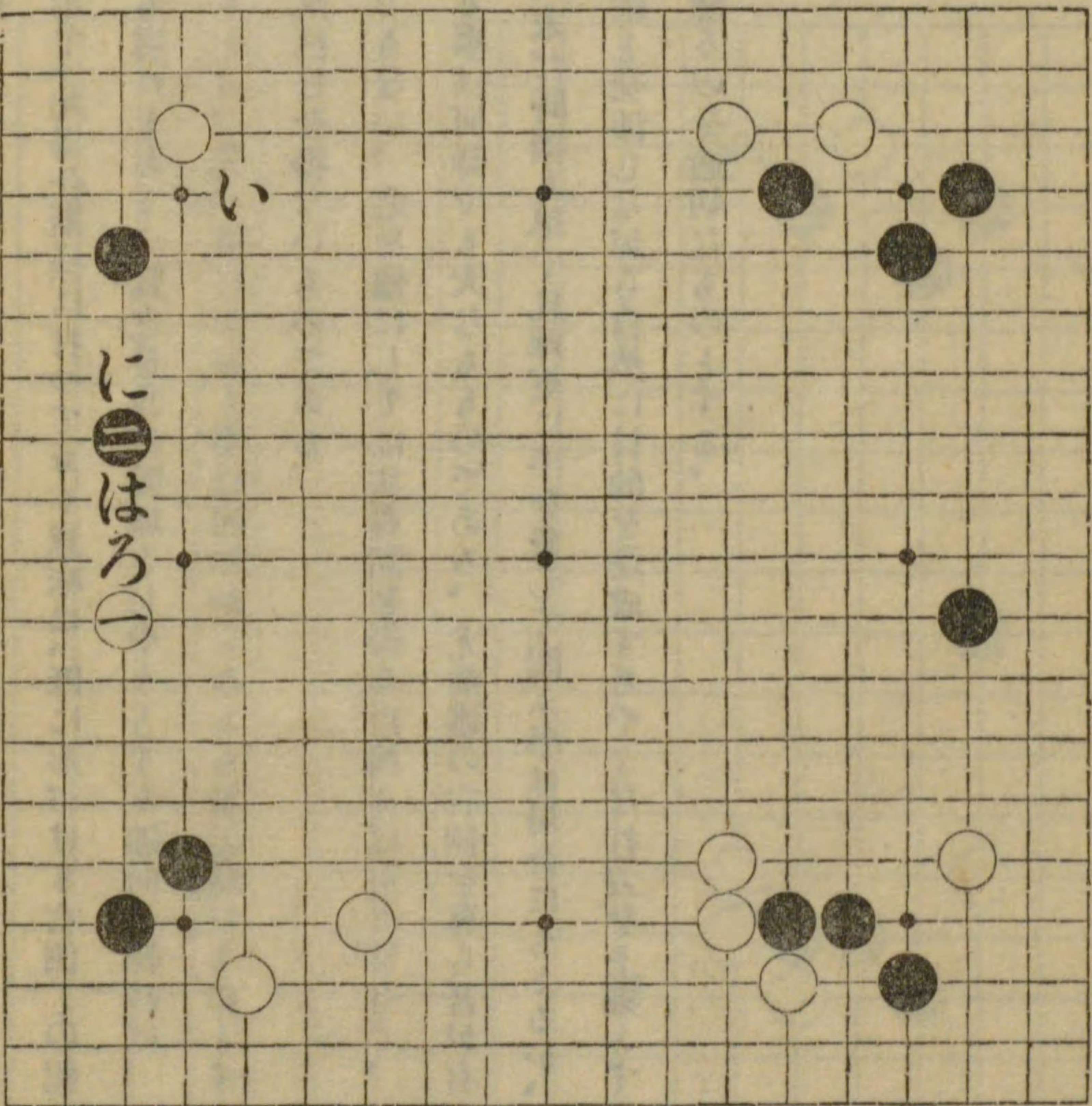
黒五の懸りは此際最大場な事は言ふまでもない、之を他にしては其着點を得るに迷ふばかりでなく、最初に於ける配石として明隅に着手する事は何時でも大なるものである、尤前述の右側を専ら吾が有としやうとする手段がないでもないが、未だ時機も早く且殊更に手を費して圍ふ事は場合にもよるが、大方策戦上面白くないもので、多くは敵と交渉しながら自然に目的を達成するやうな打方を上乘とする、況して明隅のある此布勢では五と懸るのを適切なものとする。

解説

第八局 (三圖)

白一の着手は最熟慮を要する時機で、之に因つて自から後の運びに相違を來たす分岐點である、此際上邊の形勢を按ずるのに右隅から掛けられて白は低く飛んである時、又左上隅を黒から「い」に掛けられると此方面でも亦位が低くなり、右隅と同線となるから面白くないやうだが仔細に之を観察すると黒の右上隅は尖んである、即ち兩手を費やした上に掛けたもので、左隅

第八局 (三圖)



のやうに唯一手の懸りばかりでないから割合上左程の事も無い、且黒から「い」に掛けられて後「ろ」邊の要處を占められる運びならば格別、此場合では既に白が一と其要處の邊に先着したのであるから、尙更恐れるところはない。

以上説くところのやうに、白は此一で左側に着手するのが肝要なのを推知されたであらう、尤此手で「い」に尖む打方もあるが、較々白として緩い観がある、且黒から「は」に打たれて好ましくない、然らば白が左側に打つとして其着點は如何といふに、各自の趣向に因つて種々の打方がある、即ち「に」「二」は「の」三ヶ處は何れも通形であるのに、此圖では夫れを避けて殊更白は下方に偏して打つたのは、少しく手段の存するものがある、假りに「は」に打てば黒から一の處に詰められて、平凡の布勢となるのを避けたものである。

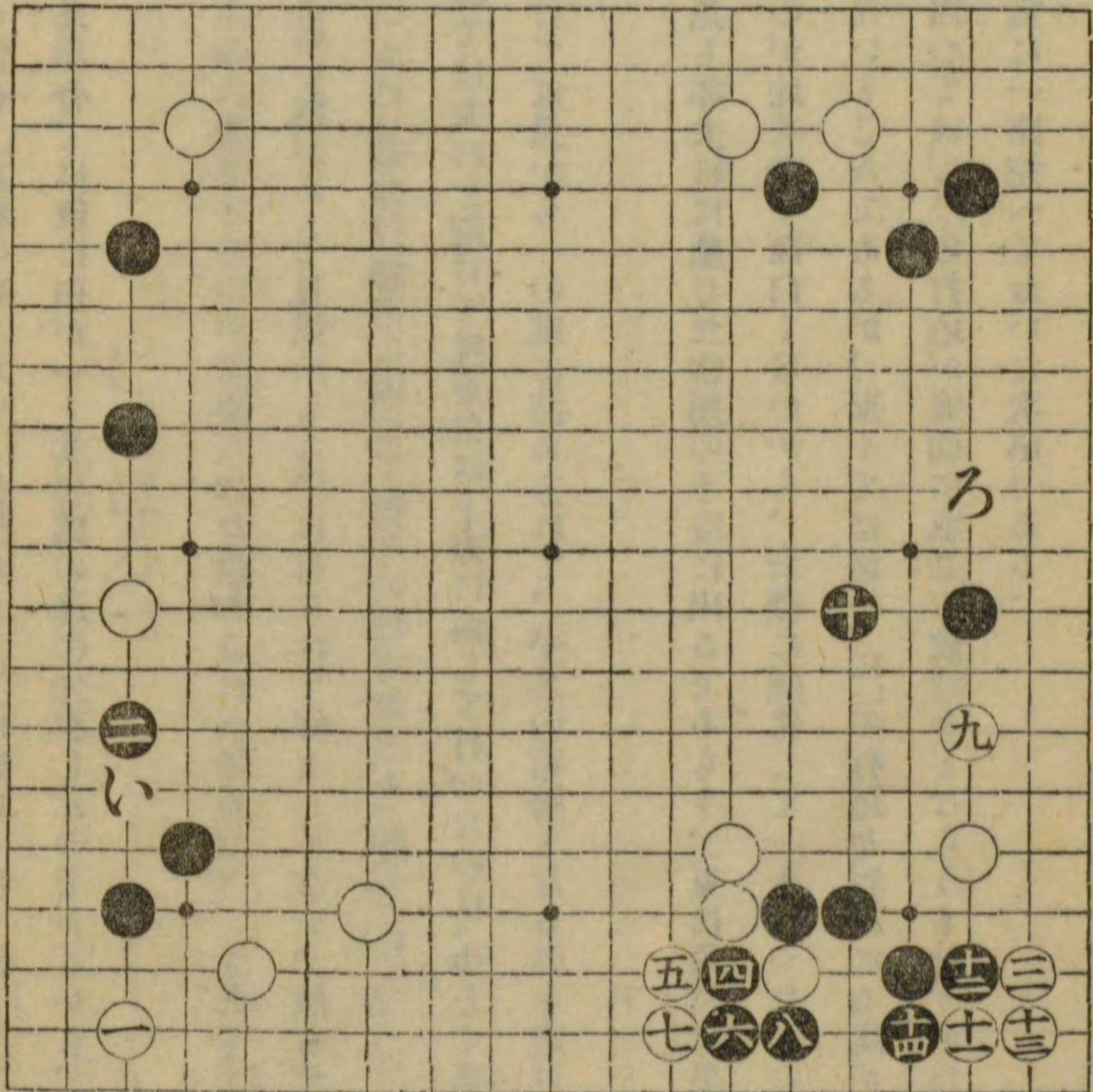
又二「に」の二個處の中何れにか打てば黒も亦夫れに應じた常用の手段に出るであらう、兎に角白は黒から一の方面から詰められる事になるのが此碁勢で面白くないから、斯様に變化して一と打つたものである、黒二の拆きは「は」まで進みたいところであるが、斯くては後に「に」の打込を狙はれる虞がある、其故は下隅に着手され其結果に因つては「に」の打込が痛切に感じる成行きとならうも計りがたく、黒としては不安が少くないから堅實に一路控へておいた次第である。

解説

第八局 (四圖)

白の一の斜走は實利を収めながら、此二子の黒を攻めやうとする打方であるは觀易い事であるが、尙一言するのは前述のやうに黒上方から一路控へて打つた爲、上部への打込はないによつて、白は「い」方面より夫れを窺ふ手段に出るのは不可能であるから逆に一と今度は隅から着手し、黒をして二に打たし、左側の一子の白は軽く捌かうとする意味である。

(圖 四) 局 八 第



黒二は白の一に對し是非此處に守備する必要がある、若白から「い」に打たれると活形を失ひ、攻め立てられる成行きとなつて甚不可である。

白三の斜走は一子を援助するのは勿論、尙黒の石をも攻やうとする意味を含んで居る。

黒四から八までは白の一子を取つて治まつた堅實の打方である、既に白から三と運ばれたにも拘らず、手抜きすると白から又此四の處の切を防がれ、勢黒の三子は薄弱となるからそれ故漸く四と切取つて此石を治めながら、敵の模様を狭ばめ尙外部に切味を残す事となる。

白九の一間飛は下方の黒が堅固になると同時に、今度は自己の石が薄弱を覺えたにより、其凌ぎのためである。

黒十の一間飛は白が九と來たのに對し、上方の廣境を維持するに缺くことならぬものである、若之を閉却すると白から「ろ」の邊に打込れ、忽ち此形勢を消滅されるであらう、且此十と上方を發展し、次に黒十三に頂けて尙此白を攻めやうとする意味をも兼ねて居る。

白十一から黒十四までの應接は至當で、白は黒から十三に打たれるのを凌ぎながら、黒に迫つたもので、黒は先づ十二にアテル手順を了し、而して後十四と約へて此黒を確實にしておくは、必要で亦已むを得ないものである。

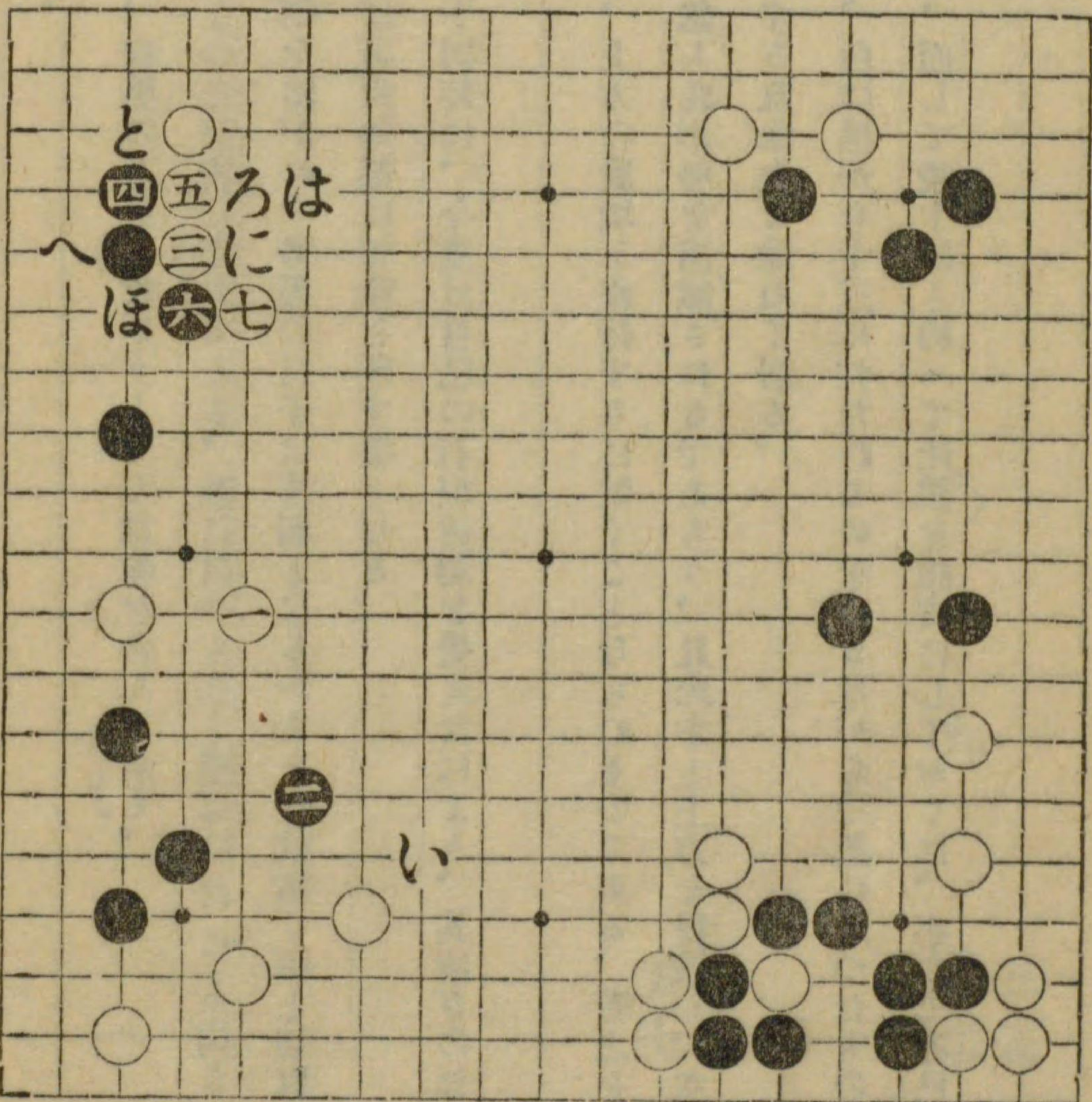
解説

第八局 (五圖)

白一の間飛は今此一子が上下から夾撃されて薄弱の姿勢となつて居るから、此處に一着を補ふのは至當の着手である、且此左下隅の黒を封鎖しやうとする趣をも有して居る。

黒二の斜走は白の一に對して斯く出動しておかないと、白から此處に壓迫を加へられる虞がある、旁々「い」に掛けて下邊白の模様を消滅しやうとする意味をも含む。

第八局 (五圖)



白三の頂けは臨機的手段で、黒が二間拆きした場合であるからかやうの手段を用ひたのである、其故は到底此二間拆きには打込がないから、之を外部から縮少する方針に出たもので、若之が三間拆以上なれば此三の手で「ろ」或は「は」に打ちおき打込を窺ふ方が優つて居る、然し其打込がないによつて斯く頂ける變化に出て、敵を凝らす打方は時機を得たものである。

黒四、六の應答は是亦白の變化に相應した着手である、若此四の手で通常のやうに六へ縛ると、白から四に約へられ、黒「に」白五に粘となり、其時黒七なれば白「ほ」に切るべく、又黒七に續かず「へ」なれば白七の處を切つて戦ふ事となつて、何れも黒のため割合が宜しくない、此故に先づ四と伸び、而して六に縛ねたので此手段は至極面白い。

白七の縛は緊要の點で忽せにできぬ、白としては「と」に約へたいところだが、黒から此七の處に行びられては上邊を薄くするばかりでなく、左側の白二子が自然と薄弱を感ずるから、斯様に七に打たねばならぬのである。

解・説

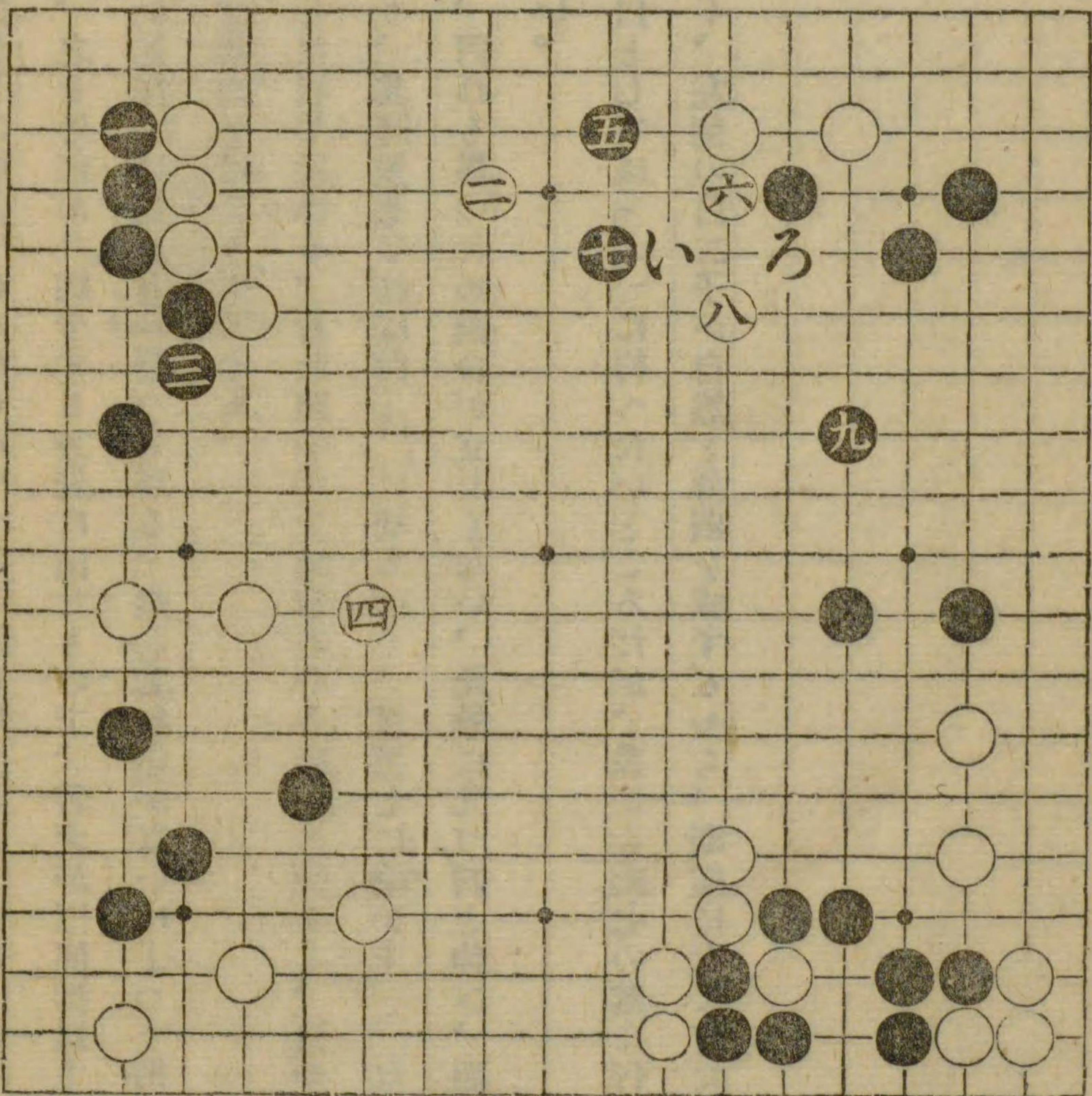
第八局 (六圖)

黒一の約へは要處であるは言ふまでもないところで、此形の儘尙白から一に曲げられると此黒甚窮屈になる、斯く約へておけば地境を拓くばかりでなく、安固で且外部の白三子がダメヅマリ之の姿となる利益がある。

白二の圍ひは常用の手段ではないが此場合左右の釣合上恰好の位置といへる。

黒三の行びは一見緩いやうだが、手厚い打方で白の動靜を試

(圖 六) 局 八 第



みたものである、即ち次に四に冠し此左側の二子を攻撃しながら、其勢を以て上邊の白の版圖を侵さうとする意氣を示したり其他種々味ひを含んでゐるところで良着とする。

白四の飛は前述のやう黒が三と持重したに對し、此處を補はないと攻撃される虞があるから、已むを得ない着手である。

黒五の打込は危険のやうに見へるが實はさうでない、其故は黒の掛け白の飛びと交換してゐるのは、白が薄い姿であるから、此五はそれに對し一撃を試みる位のもので、少しも恐れるところはない、之によつて白は六と押出す外なく、黒又七の飛びは當然の運びである、斯様な成行を見るとすれば、五の打込の危険でないのを知るに足らう、尤黒五の手で上部から「い」に斜走し右側を發展する打方もあるが、此場合其後右方を構成するに就て適當の着點を發見するに苦むから、此際は寧圖のやうに打込んで押出させ、其機會に右側を固める方却つて容易なものがある。

白八は「ろ」に綽るのを通形とするが、幾分左方の黒二子に對して響きを與へやうと用意して飛んだものである。

黒九の圍ひは五から豫定の着手とするところで、五、七の二子は薄弱なやうだが、上邊の裾明きがあると且は其形が軽いから、種々變化も出來得ようによつて、今急に恐れるところはない。

解説

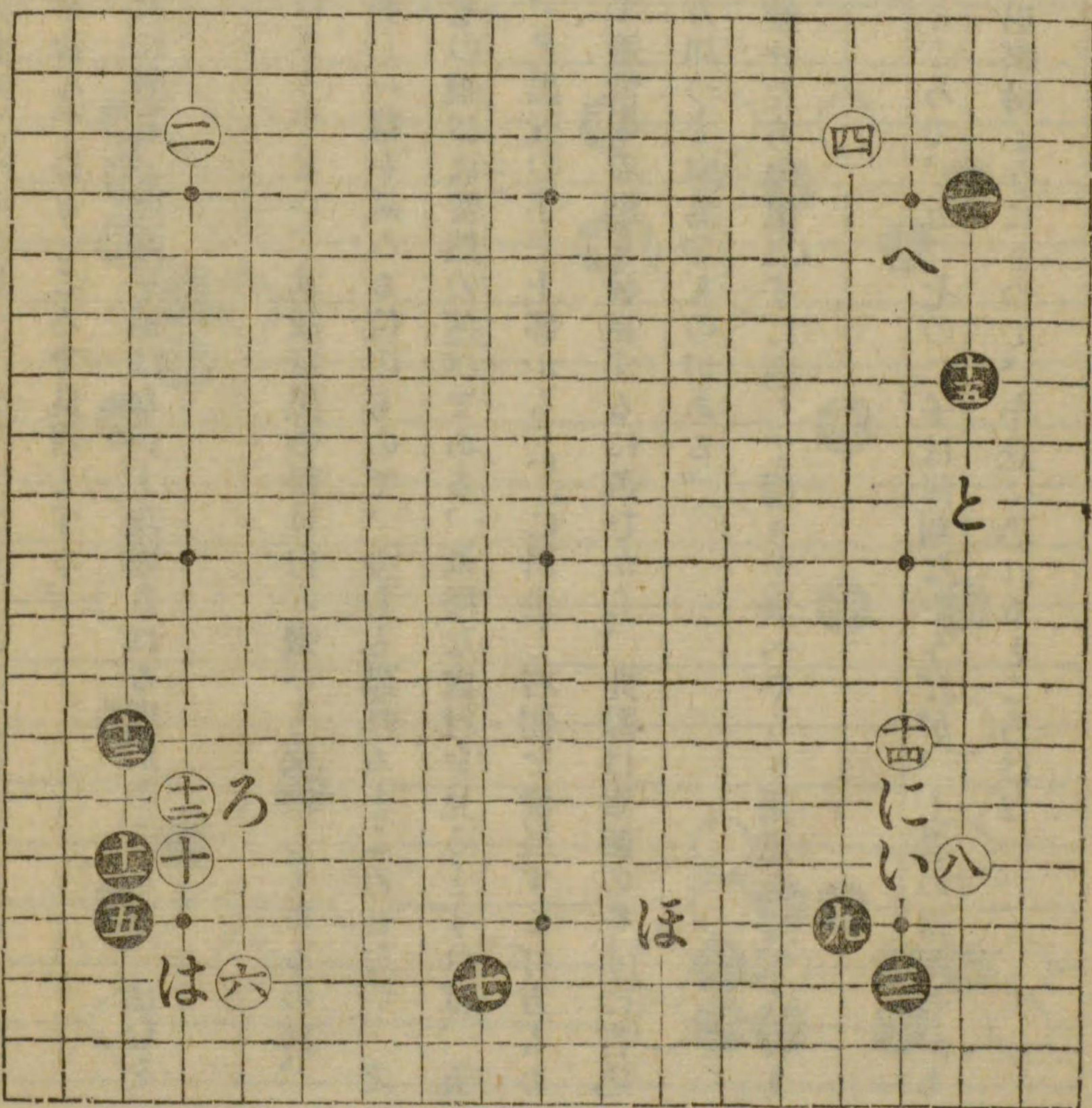
第九局 (一圖)

黒七の三間夾は「い」に締つて打つのも善く、何れも常に用ふる布石の一法である。

白八の懸り普通で言ふところもない。

黒九の尖み必要の應手である、これは七に夾む時に豫め其覺悟がなければならぬ、即ち白八と懸つた時黒九を手抜きすると、白から九に掛けられて、七の石のある場合に下邊を這つては、其布石重複するからである。

(圖一) 局九第



白十に掛け黒十三までとなるのは一種の趣向とするところで、其他此十の手で「ろ」に二間飛するものあり、或は十二に大桂馬掛けするのもあらう、又單に手抜きすると黒から「は」に尖みつけられて、此六の一子を攻められる運びとなるであらう、

白十四の斜走は下邊黒の間隔廣いから、之に打込まうとする用意の手段である、若これがなく打込む時は黒から「に」に掛けられる手があるから、其打込んだ石の捌きに就いて、碁勢を急促にする虞があるから、先づ斯様に打つて黒の動靜を試みたのである、其時黒若下邊に打込まれない様に「ほ」に圍へば白は轉じて十五の處に詰めて右側に地境を張る策である。

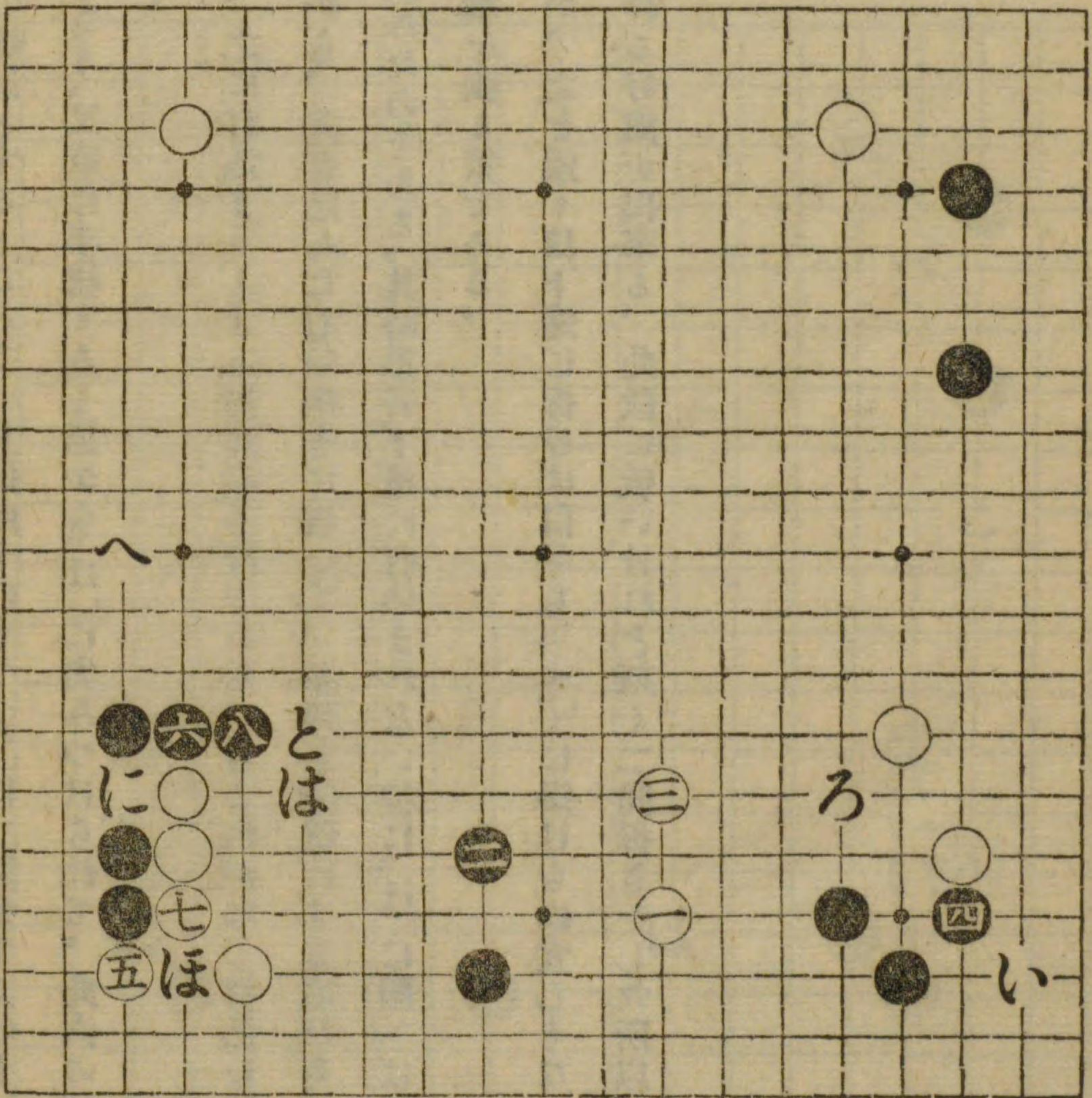
黒十五は普通用ひない低い手ではあるが、之を遠く目下邊に拆けば白から「へ」に掛けられ宜しくない、又「へ」に尖めば白から「と」に打たれる好處が出来る、此故に低いけれど斯く二間拆きをした所以である。

解説

第九局 (二圖)

白一の打込は左右の釣合をみて
 斯く高く打つたもので、之を低
 くする時は後の運びに宜しくな
 い、而して此趣向は右側へ斜走
 した時から既に含んで居る、尙
 其斜走と一との兩手は相呼應し
 てゐる趣がある。
 黒二の一間飛は通常である、他
 に打つときは此處に冠せられる
 虞がある。
 白三の飛びも亦普通である、之
 を強ひて「い」に斜走して黒の根

第九局 (圖二)



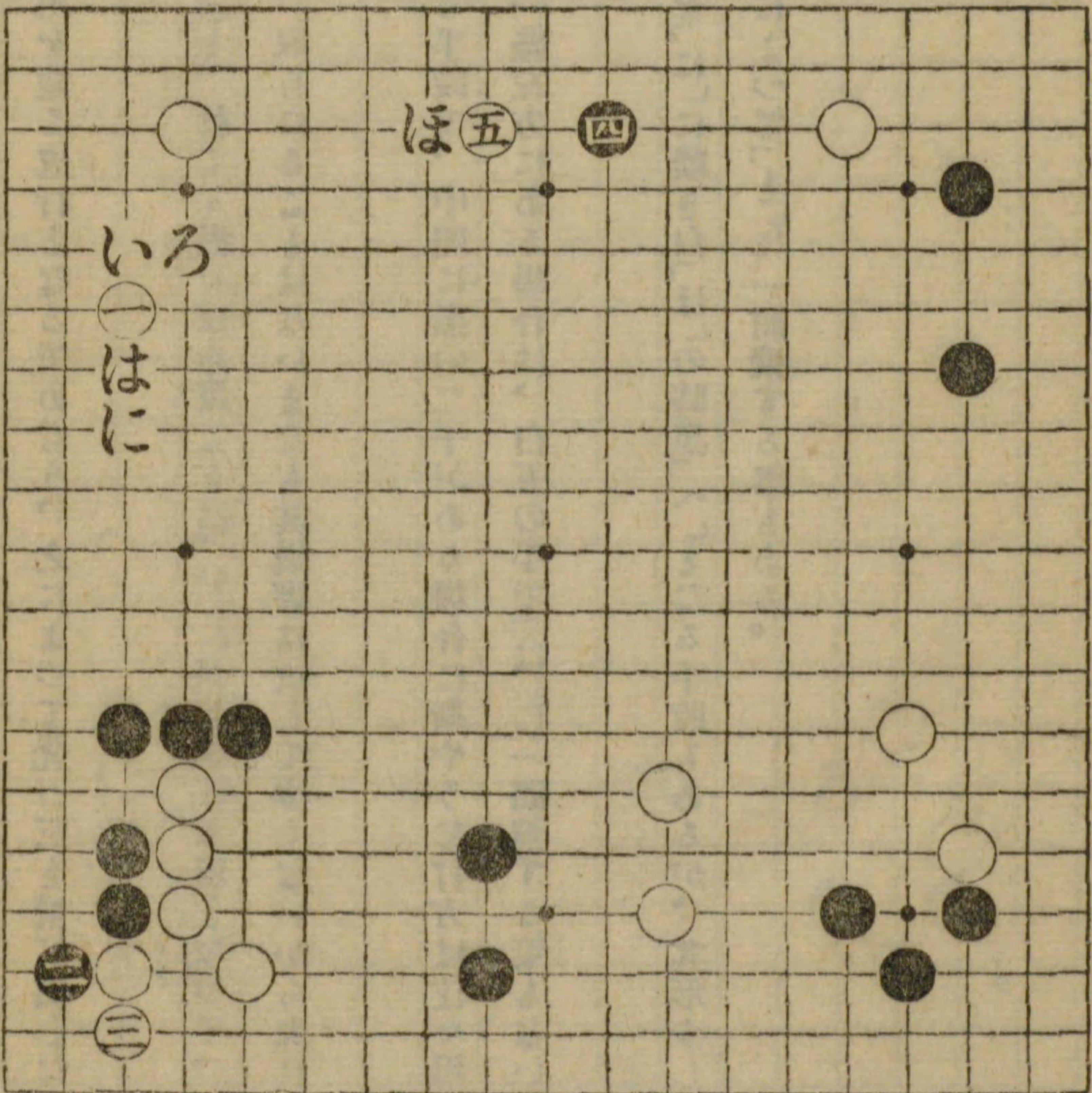
據を奪はうと打つと、黒から「ろ」に飛ばれて打込んだ一の石が孤立となつて、倉皇之が逃走をはかるも事甚急になつて、そのため黒から壓迫を蒙る成行となるであらう、之によつて先づ三と飛び出した次第である。
 黒四の尖みつけは既に白が三と飛んだ以上、捨て、置けば今度こそは「い」に斜走される事となつて、此隅の二子が攻められて甚宜しくなく、取られることはないまでも其損害は決して少くないから夫れを防ぐ爲めに緊要の手である。
 白五の頂けは此石を早く治めやうとする手段で、中間に黒の二子がある場合に斯やうな打方は往々用ふるところである、此中の黒の二子が一路左方にある場合は、白五の手で「は」に一間飛する策もないではない。
 黒六は五に對し普通の應手である、之を「に」に續き白「は」の時黒「へ」となる手段もあるが、其形少しく重く面白くない、黒八の行び、場合によつて「と」に一間飛する事もある。

解説

第九局 (三圖)

白一の大桂馬締は最要處である、其故は黒下方に三子連衡して勢力を張つてゐる時に當つて白若之を忽にすると直ちに黒から「い」の處に懸られ、其石と下方の數子と相俟つて、此左側に大模様が出来ると不利がある、是に由つて白は少しも猶豫しないで、此要處を占めたのである、又其締方として「い」或は「ろ」もあるが、「い」では狭く黒から尙「は」に詰められる處がある、

(圖三) 局九第



「ろ」に至つては此場合「い」よりも悪い、矢張「は」に打たれて左上隅の締が裾明きとなる不利がある、此際の締としては、下方に對して最釣合を得た一の處でなければならぬ、斯く締つておけば黒から打つも狭いによつて、今直ちに「に」に詰める事は恐らくないものである。

黒二は一應試みておくまでのものである。
白三は當然の應手とする。

黒四の三間夾は大場で、今形勢を観るに他にそれ程の處もなく此上邊に着手するのが至當の場合である、而して其着點も亦此處を以て適當の場所とする。

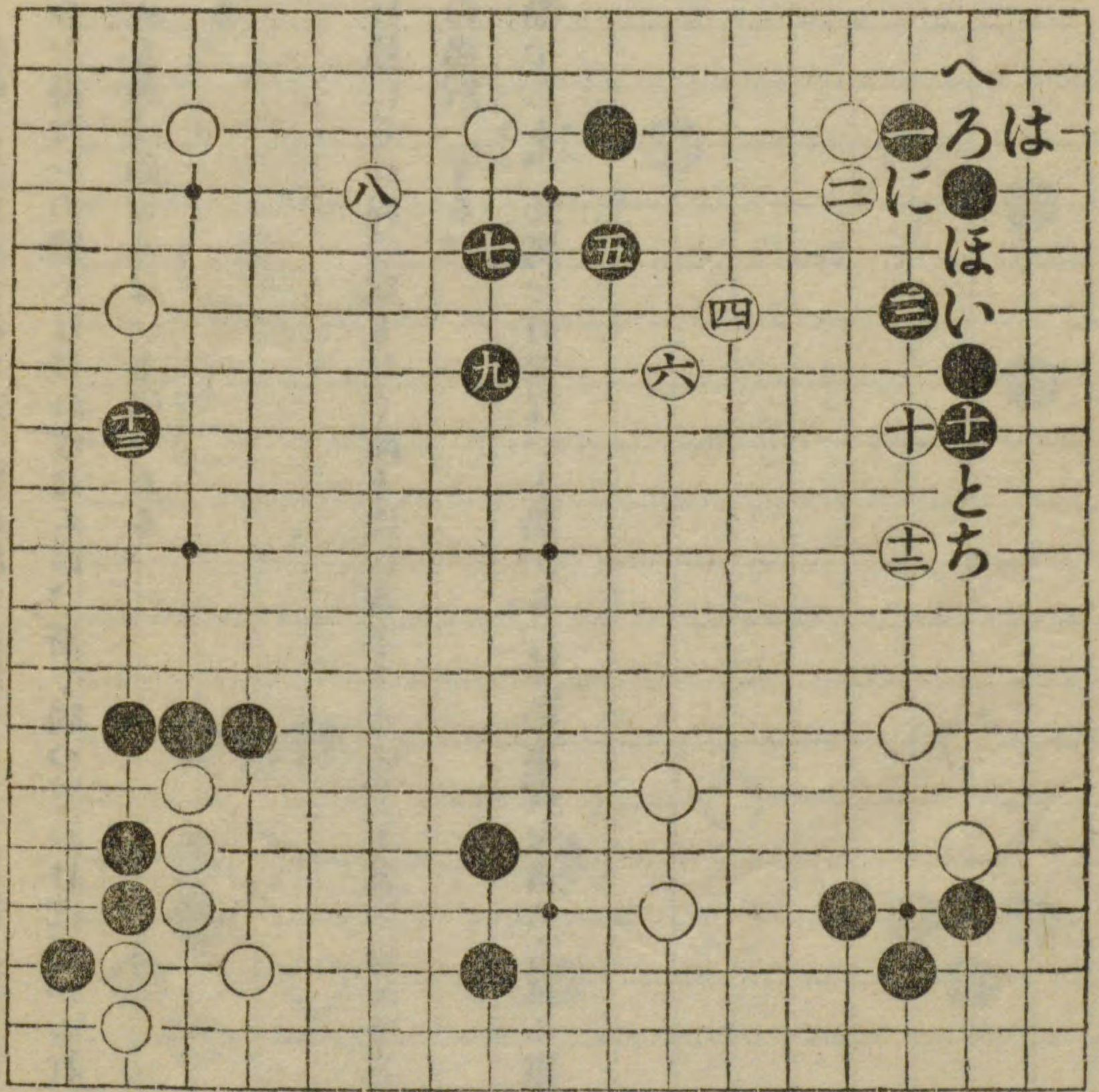
白五の詰めは四の黒に對して切實な好點である、此處を打たないと黒から「ほ」の要處を占められる事は觀易い次第である。

解説

第九局 (四圖)

黒一と尖みつけて三と打つのは、右側二間拆きの石のない時に多く用ふる手段であるが、此時に當つては他に好着がなく、此白を攻めたて、上邊の黒一子を同時に治める機會をつくる趣向である、それゆゑ此處較々凝るやうな變體であるけれども、此場合は前陳の次第であるから、却つて之を有効に利用したものといへる、尤一の手で單に五へ飛ぶ手段もあるが、そうす

(圖四) 局九第



ると白から三に打たれ、黒「い」白「ろ」黒「は」白「に」黒「ほ」白「へ」となる通形になつて、白の方も治まるは兎に角、此碁勢では黒の方が少し面白くない形勢となる。

白四と間を打つて斜に打つ事は、斯様な形では往々打出す手筋である、其趣意は今直ちに夾んだ上邊の黒を攻めやうとしても好着がない、却つて之を早く治まらせる惡結果を來たす状態である時など、何れへも偏せず斜に飛び出す手段を用ふるのである。

黒五及白六共に當然の手である。

黒七は出動しながら白の位を低くめ、之に對し白八の斜走は地位を保ち、黒からの侵入を防ぐ普通の應手である。

黒九の飛びは此黒を安全にしておく必然の手筋とみてよい、白十と打ち、黒に十一と押させ、而して十二と一間飛したのは、此半面にある三方の白は、各々薄弱の觀があるから、之を凌がねばならぬと同時に此着點は頗適切なのを偲ばしむる、之を低く「と」又は「ち」などに打つたのでは上邊の數子との連絡に缺くところがある圖のやうに運べば三方自然と連繫する形勢を現出するからである。

黒十三の詰は前圖で未だ小であるといつたが、最早打場も少なくなつて、此處が最好點となつたゆゑ打着したもので、一つには遠く上邊の數子にも援助を與へる效力もある。

解説

第十局 (一圖)

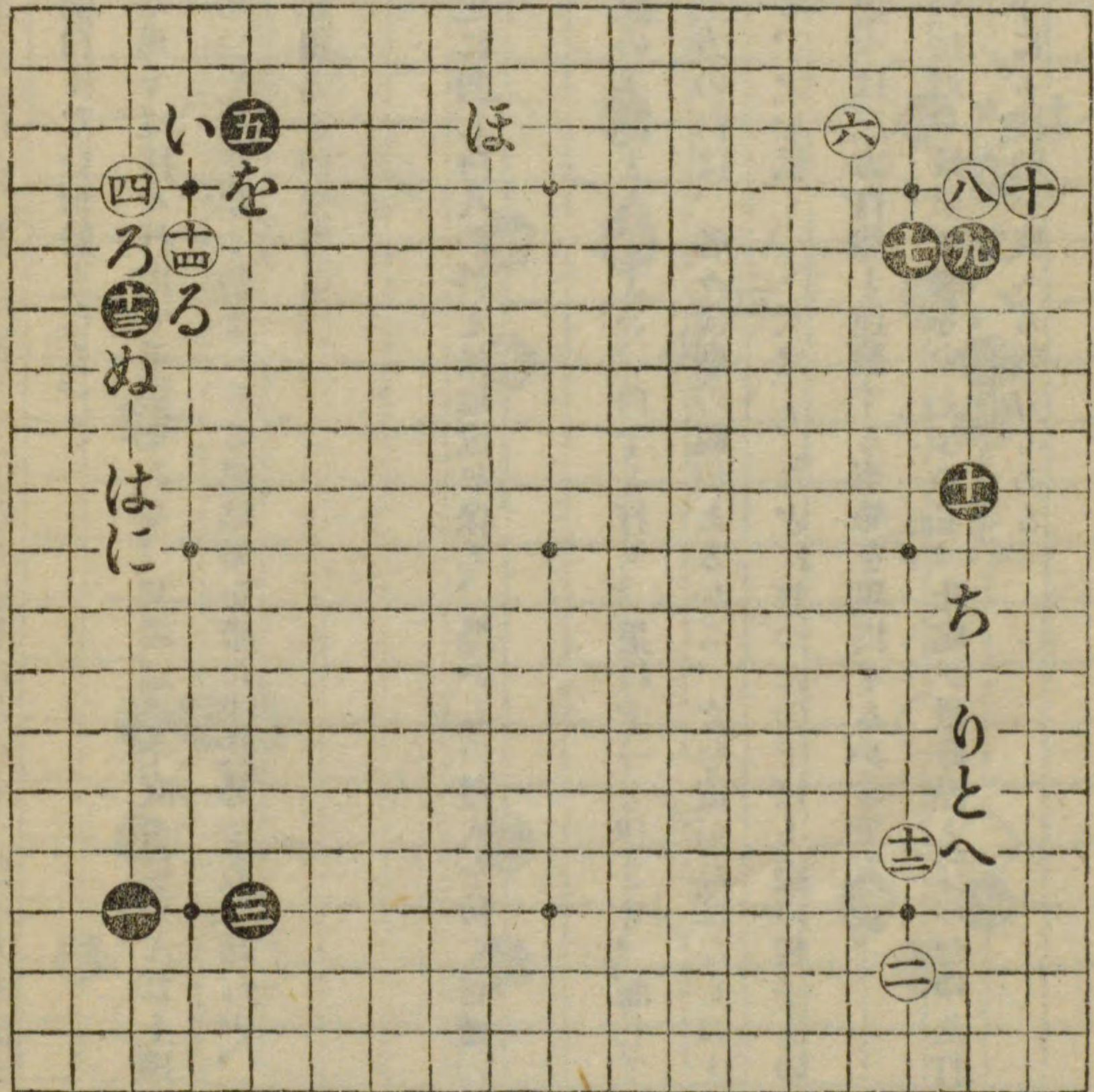
黒三と締るのは一種の趣向である。

白四は黒が三と締つた以上他隅に着手すると、黒から「い」に打たれ、白「ろ」なれば黒「は」となつて、局勢を狭くする虞があるから、此隅に一應着したものである、尤「ろ」に打ち黒「い」の時白「に」に拆く趣向もある。

黒五の懸りは普通、此手で右上隅に據るのも亦悪くない。

白六の目外しは此場合釣合が善

(圖一) 第十局



い、即ち黒八に懸ると白は「ほ」に打つて攻守を兼ねる手段がある。

黒七の懸り此隅だけとすれば確實な地域を白に占められる不利はあれど、前述のやうに入まで深く懸ると、白から「ほ」に拆かれる順序となるのは観易いを以て、淺く懸る通形に出たのである。

白八黒九白十黒十一定石で言ふところはない。

白十二の締は適當である、此場合十一の黒があるから、「へ」或は「と」に締つては上方に對する釣合が宜しくない、それは後に「ち」に詰るも其石と同線になつて位低く不可である、尤黒から同方面に拆いても矢張効力は薄い、圖のやうになれば「り」の點を相應の打場とするけれど、白から「ち」の詰も大場となれば其得失、此後の手順巧拙によつて豫測しがたいが、白は十二の方興味多いものとする。

黒十三の夾返しは一種の趣向で局勢を急にする手であるから、之を打つには能々場合を見計はねばならぬものである、今此局勢に就て言へば「ぬ」に二間夾返しをするのは最普通の着點とする、其時白十四なれば黒「に」に拆いて亦不可もない、然るに一路進んで十三と詰めたのは趣向の差異こそあれ、四圍の狀勢より察してこれも亦無難の形勢といへる。

白十四と尖み出すのは普通の應手で、之を「る」或は「を」に頂ける定石に打つのは、此場合では宜しくない。

解説

第十局 (二圖)

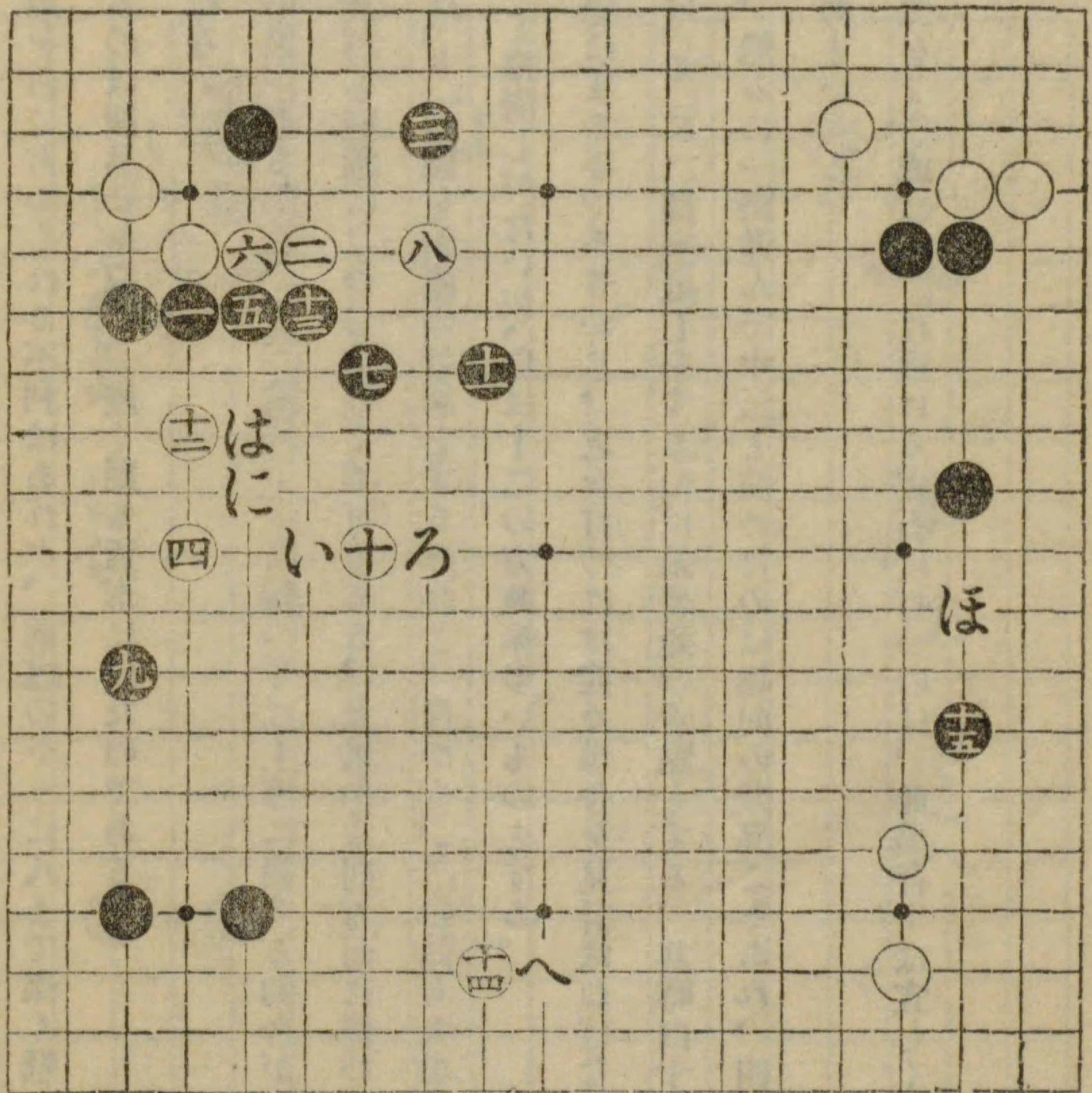
黒一の押しは當然とする。

白二の間飛は六に行びるものもある。

黒三の間拆は肝要の着点である。

白四は普通用ふる手段で、其意味は上方の黒二子を夾撃して其勢力を削減させやうとするものである、尤下隅の配置に因つては多少異なる時もあるが、先づ此邊に着するのは適當である。黒五と行び而して七と運ぶのも

第十局 (二圖)



通常用ひられる打方である。

白八の飛出しは當然の着手で黒から封鎖されては不可である。

黒九の詰は緊要の點である、これは白の四の石を攻める事は勿論、自己の地歩を占める一舉兩得の良着である。

白十の間飛は四の石を助ける手であるのは言ふまでもなく釣合も亦宜しい、之を狭く「い」に一間では黒の七へ對して釣合が悪い、即ち「ろ」などに冠せられる手段も残つて良くない、且二間飛は隙き間がある様だが、次に打つ十二の手段があるから十分之を補足する事が出来る譯だから却つて此方が働きのある手と變る。

黒十一の間飛は至當白十二の手筋は良好で、前陳の意味を往くばかりでなく、此白一體の助けにもなり、且敵を攻める意を寓す。

黒十三に沿つたのは働きのないやうだが亦已むを得ないものである、之を「は」に頂けて白を「に」に受けさせ先手を取る策もないではないが、それは自己の形が薄弱となるばかりでなく白を強固にさせる傾があつて甚好ましくない、故に圖のやう遲鈍に見へる、か、十三に應じておけば、將來上下の白に對して窺ふところもある。

白十四は大場で遠く左側の三子に聲援を與へる、之を若右側「ほ」に打つと、黒から「へ」に拆かれて左側に對する意味に影響が少くない。

黒十五大場である、既に白から下邊十四を打たれた以上、此處を以て最大なものとする。

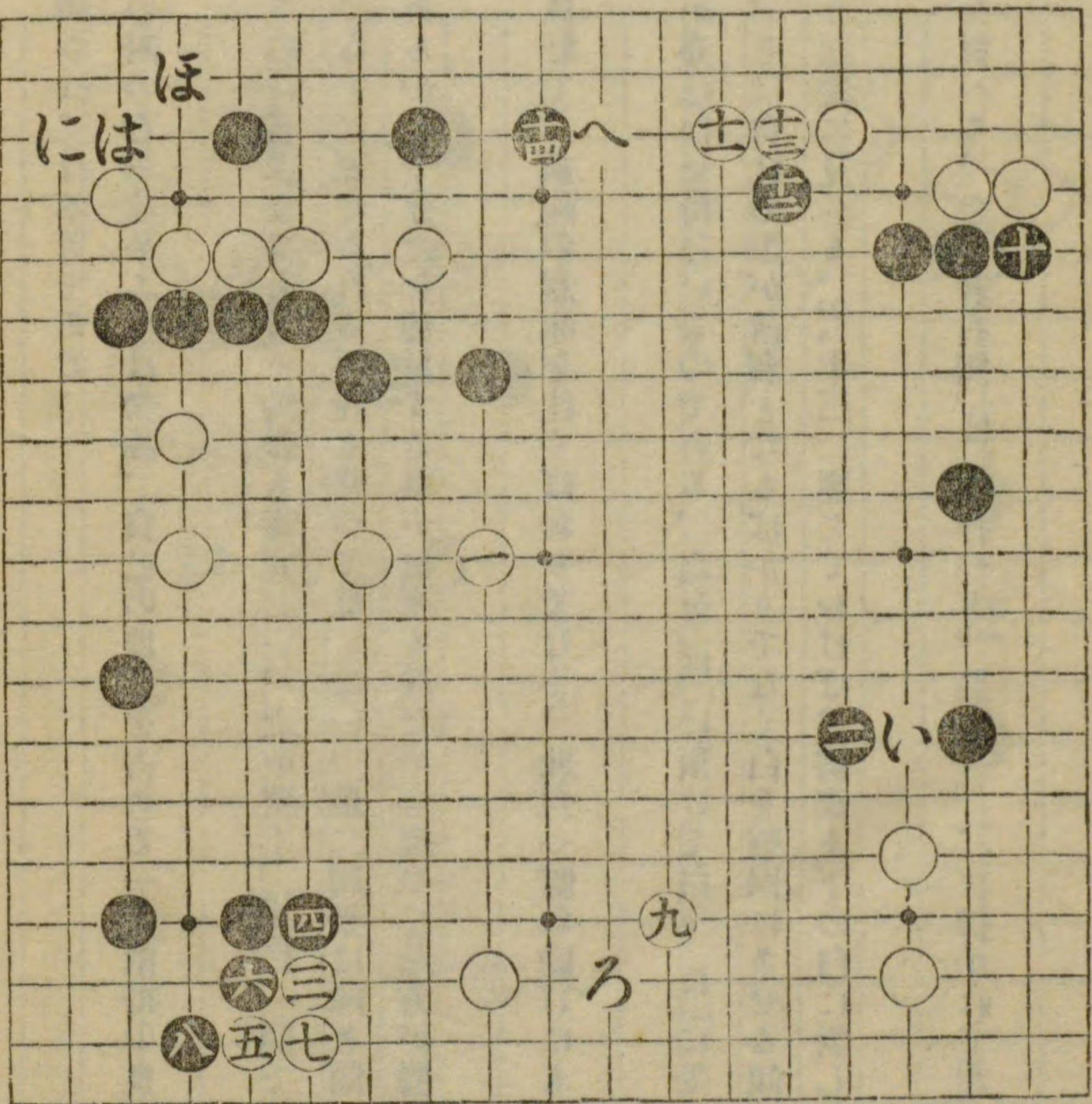
解説

第十局 (三圖)

白一の飛びは差當り此處に打たないでも此石を攻められる虞はないが、能く形勢を察するの他に相應の打場を發見しないから、先づ此處に飛んで黒から冠せられるのを凌ぎ、一方何とか上部の黒に響かすから此際良策である。

黒二の飛びは下邊への打込をも狙ひ、且は右側の發展に資するものである、尙白が今一と中央に出動したのは上部の石へ對す

(圖三) 局十第



る次第もあるが、一方からみると下邊から中央へかけて、擴張しやうとする氣勢明かであればそれを妨げるものとなる、若し之を打ないと白から「い」などへ頂けて發展策を講せられるであらう。

白三は地域を擴張したもので以下八までの接衝普通である。

白九の圍ひ大場である、既に三と左隅に對して利益を圖りしたため、其形較々重くなつて居る、次に黒から「ろ」に打込まれるのは急場となつてきた次第であるから、早速此九の圍ひに着手する必要を生じたと、且は一手を費やしても亦相當の割合といへる處である、尙詳言すれば白は既に三と打つ時此計畫あるもので、豫定の行動とみてよい。

黒十と約へたのは普通局勢のなかばに打つこと少いものであるが、此場合は上邊一帶の釣合上から來る趣向で、其意味は先づ右側を固めて利をはかり、隅の白に響かすところあれば、白は勢何とか上邊に打着するであらう、其應答をみて黒亦之に策應しやうとする手段である、即ち上邊を先着しても餘り効果がない時など一つの趣向とする、又黒上邊を打つとすれば「は」に頂け、白「に」黒「ほ」と打つ手段など可であらう。

白十一は十二に尖むが普通であるが、黒から「へ」に折かれるは親易いから、變化を試みたので。黒十二と覗いて打得をなし、而して次に十四と飛んだ順序は宜しい。

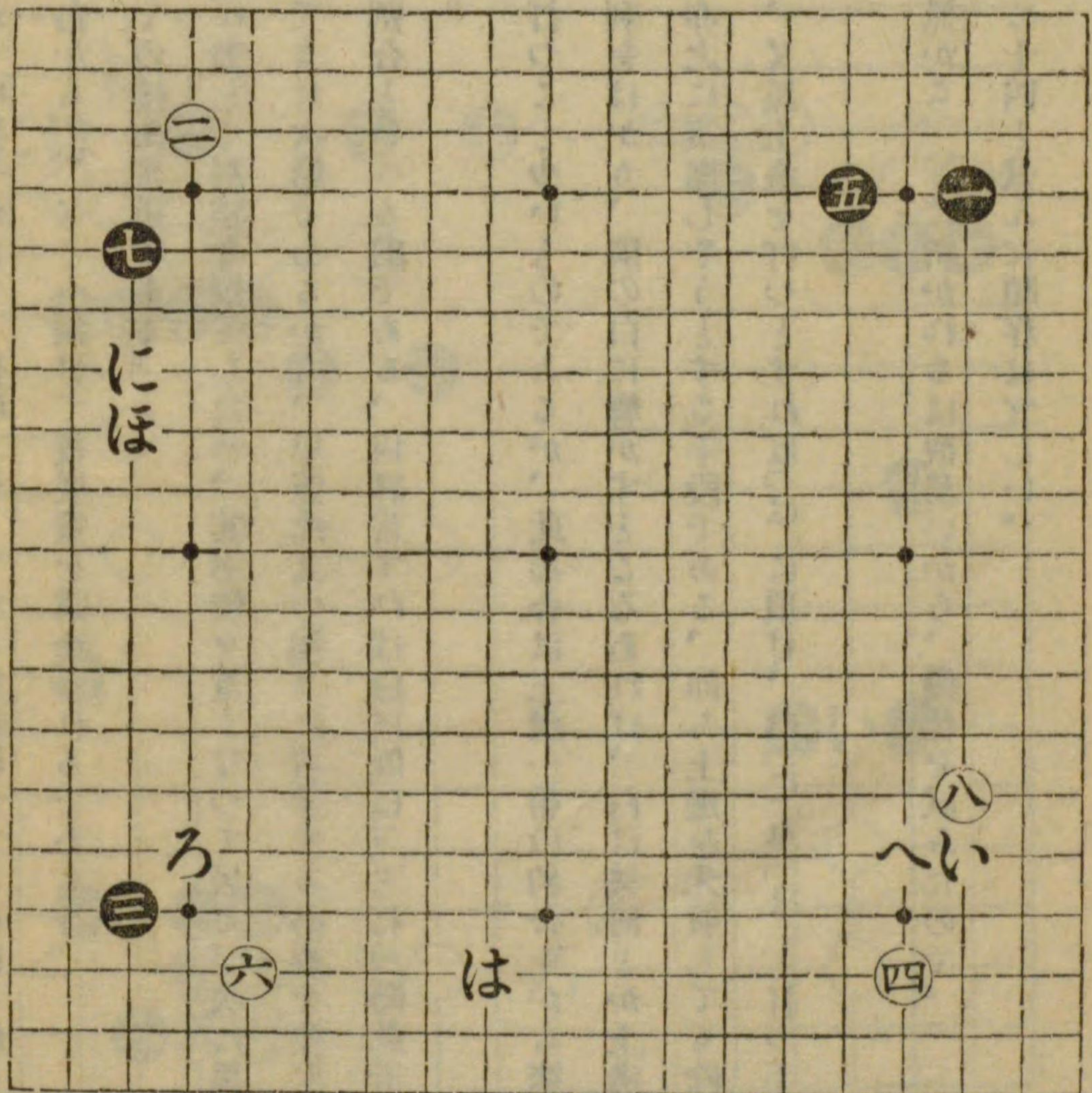
解説

第十一局 (二圖)

黒五と高縮をして一隅を守つたのは先の碁として確實の態度とする、進んで七又は他の明隅に懸るなども敢て悪るいといふのではないが、趣向としては先づ自らを守る黒の趣旨とするところに反する譯である、即ち黒が五と縮れば白は六と明隅に懸る外ない、さすれば黒は夫れから徐ろに歩を進めて善い。

白六の懸りは最普通で別にいふところはないが、但黒に一隅を

(圖 一) 局 一 十 第



縮られてみれば、他の一方の明いてる隅に懸るは白として必要の事である、是は白が外に打つと黒から兩隅を縮られ、所謂兩縮の形勢となり、紛れ少く局勢分明になりやすい虞があるから、白としては此隅に懸るのが殆既定の運びともするところである、尤稀には一種の趣向を以て、殊更黒を兩縮にさせた打碁を見ることがあるけれども、夫れは異例に屬し布勢としては變體である。

黒七の時は「い」に懸るか又は「ろ」に尖むか或は「は」に夾むなど此際は種々趣向のある場合である、以上何れも相當一手の働きをする着點で、未だ其可否を分ち難い、要は各自の趣向に因つて相違があるもので皆不可な事はない。

白八の大斜走縮は大場であつて、此隅の外に適當の處もない、強ひて擧ぐれば「に」か「ほ」ぐらゐるだけだ、圖の様に此明隅を縮るの大なるに若くはない、而して其縮方に「い」もあり「へ」もあるが是れは又各々の考案によつて選ぶものであるが、其中にも此八と大斜走するのは其姿勢が壯大で、或は黒を誘ふにも足らう、尤此の構への廣いだけ場合に因つて後に打込まれる懸念があるのと、較々着實を缺く嫌がないでもないが夫れは、白として却つて一方に妙味を含むものがある、且上隅の黒が一、五と高縮に遠く壘をなしてゐるのに對し、下隅から白が八と之に權衡を保つて縮まつたのは、他の「い」「へ」に比し少しく働きのあるやうである。

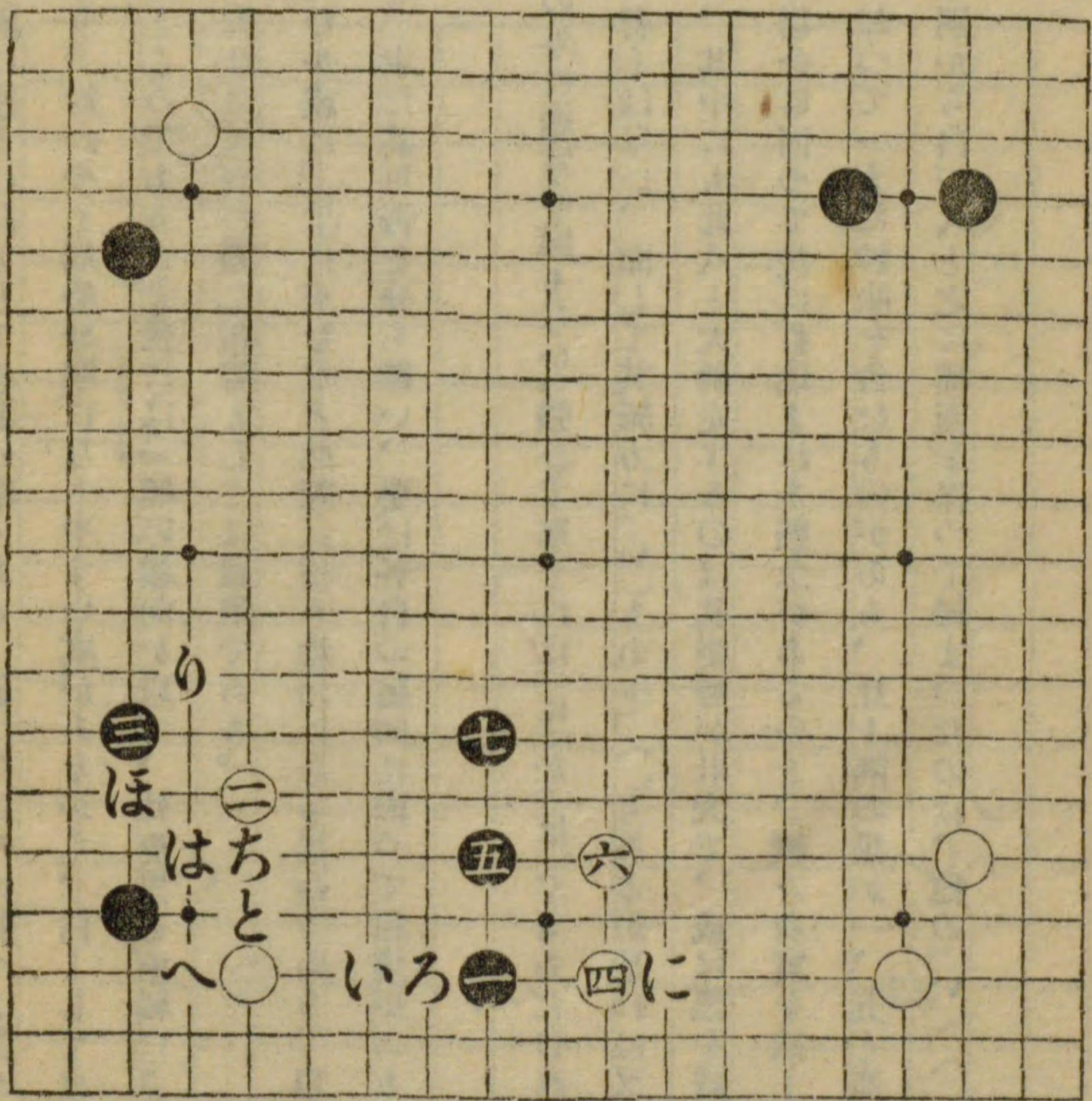
解説

第十一局 (二圖)

黒一の三間夾は適當の着點である、趣向に因つては「い」或は「ろ」に狭く夾むこともないではないが、右隅との釣合は斯様に廣く夾む方が面白い、或は「は」に尖むのもあつて是は又一策とする。

白二の二間飛は黒に三へ受けさせ、四へ詰めやうとする手段であることは観易い、此二と三の交換は較々不利であるが、四と詰める手を以て之を恢復し以て

(圖 二) 局 一 十 第



償ふところがある。

黒三の應手は最普通の打方とする、尤右隅の配置に因つて四に詰められるのが苦痛に思へば「に」へ拆く變化もある、さすれば白から「は」に打たれて封鎖を蒙るのは致方ない、是は稀な場合に應變の手段であるから妄りに用ひてはならぬ。

白四の詰めは既に二と打つた時からの豫定の行動とみるがよい、尤白は二の手を打たないで直ちに四へ詰めることもある。

黒五の飛びは勿論必要のところである。

白六の飛びは四の手から連絡した運びで、右方を發展し黒に響を與へてをる。

黒七の飛びは是れも亦一以下を安全にする手である、且此手を打つておくと今度は又白の二子を攻めやうとする意味を含んでをる、即ち白が手抜きすると黒は「へ」に尖ミツケ、白「と」黒「は」白「ち」黒「り」と尖んで白を攻めながら實利を收むる打方がある。

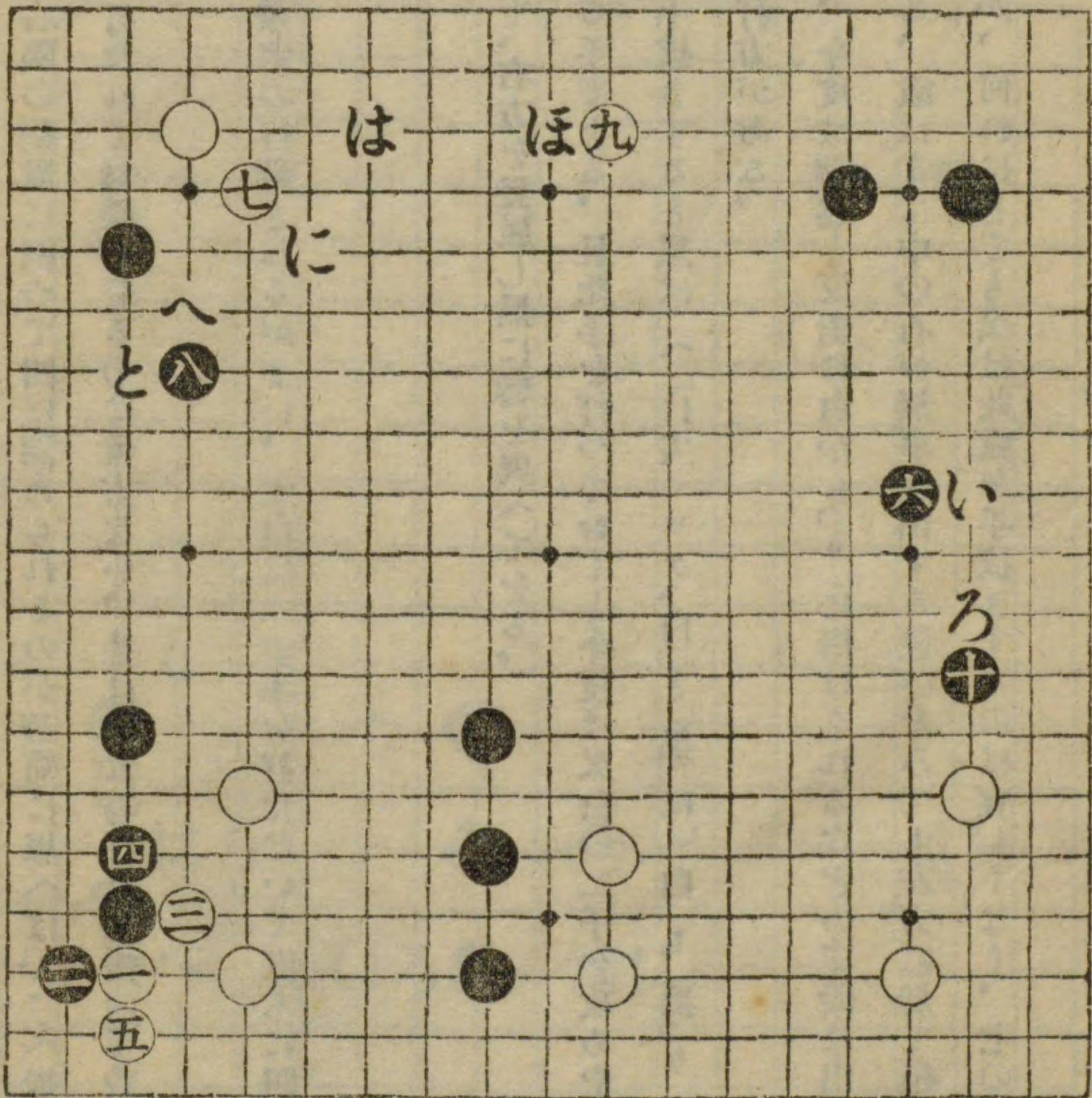
又遡つて黒七の手を打たないでおくと、今度は前述と反對に白から「り」に掛けられるなどの手段に出られて、中の二子を脅されることがある、或は幸に中の石が無事進出する運びをみても左方に於て損害を受けるとか、又は紛争を生じるとか、何れにしても黒は此處を手抜きするのは宜しくなく、七の飛びは必要の手である。

解説

第十一局 (三圖)

白一と頂け以下五までと運ぶのは通形であつて、此處に根據を作り前に述べた様に黒から攻撃されるのを豫防したもので、此際に於ける適當の打方である。黒六と高く歩武を占めたのは適當である、普通は「い」に拆く場合であるが、下隅白との釣合上斯く高く打つ方が善い、即ち白から「ろ」に拆いても其間が二間で面白くない、之に反し黒が十へ詰めることになれば六との

(圖三) 局一十第



姿勢が頗佳くはないか、それゆゑ打たれる時は痛痒少く打つ時は其形を得る次第であるから、黒は六と高くするのが優れるといふ所以である、此手を若外に打つとすれば「は」に夾み、白七黒八「に」黒「ほ」となる位であるが、そうすると白から此六の處に先着される結果、右方の白模様擴大にして較く廣い局面となる虞があるから、黒は先づ此六を先きにするのが急務である。

白七の尖みは普通堅實に過ぎ、白として較々面白くないが、此際捨ておくと黒から「は」へ夾まれる前述べの手段があるし、且之を外にして好着がない。

黒八の斜走は下方との釣合が宜しく、此變則に地域を形作るものである、又一方には高く斜走してゐるから、上邊に對しても此利き目がある、之に反し手を抜くと白から「へ」へ掛けられて、黒は「と」に應じるより外ないから左側の地位が大に低くなるばかりでなく、「へ」の掛けは上邊に非常の勢力を加ふるものであるから、黒が八と斜走するのは良着である。

白九は大場で黒が一方に六と高くあり、又此方面に展開されるいと、もなると、上隅の形勢が雄大とならう、夫故白は此處に拆いて黒の發展を阻止したものである。

黒十の詰めは既に述べた様な好形で、自己を開拓し且敵隅を窺ふ事にもなつて、良着な事は言ふまでもない。

圍碁 第十一編 互先石立 終

製復許不



大正八年十月
大正八年十月
日發行

圍碁講義第十一編
互先石立 奧付

編者

雁金準一

編者

小林鍵太郎

發行者

東京日本橋區本石
町三丁目十六番地
株式會社

右代表者
取締役社長

大橋進一

印刷者

東京日本橋區
本所區
四番地

印刷所

東京日本橋區
本所區
四番地
凸版印刷株式會社本所分工場

發行所

東京日本橋區
本石町三丁目

株式會社

博文

館

●○錢五拾七價正○●

249
188

編共 君一 準金 雁 段六
君郎 太鍵 林小 段三

圍 碁 講 義

入り難く成り難き圍碁の技を師に就かずして、而かも猶ほ能く入り易く成り易からしめんが爲め、兩棋伯が多年の實験に基く錦什を編みたるもの即ち本講義なり、初心者の絶好指針たるは論なく高段大家と雖も以て參考資料たるべく、洵に近來に於ける棋界出色の好著なりとす。

6 ▲置碁石立 (上)	5 ▲置碁定石 <small>附實眼圖</small> (下)	4 ▲置碁定石 <small>變形</small> (上)	3 ▲圍碁手筋 <small>請方</small> (上)	2 ▲圍碁手ほどき (下)	1 ▲圍碁手ほどき (上)
12 ▲打碁	11 ▲互先石立	10 ▲互先定石 (下)	9 ▲互先定石 (上)	8 ▲置碁石立 (下)	7 ▲置碁石立 (中)

全十二册

和紙刷大判美本
每編百卅頁内外

正價每編金十五錢
郵稅每編金四錢

博 文 館 發 行

